れ。』といへば女房もさながらあい左樣ともいひかねて、『いや趁跛といふ程にも御座らぬが、實の所は左の足が少し短いので御座る。』といへば、辨阿はそれを違うたことの樣に思うて、その後、子供が趁跛というこ、辨阿は大きに腹を立て、『おれが足は趁跛ぢやないぞ。只左の足の短いのぢや。』といへば、子供は益々聲を立てゝ、『エヱ趁跛ぢや〳〵。』こ笑う故、辨阿も少し疑の心が起つて、隣の三助へ問ふには、『わしを子供が趁跛といふが、こりやどちらが正眞か、見て下され。』こいへば、三助も亦どちらともいひかねて、『いや實の所は右の足の少し長いのぢや。』というたけな。

そこで辨阿は内へ歸つて、女房に向ひ、『おれが足は、實は右の長いのぢやけな。それに左が短いなどいうて、よくおれをだまし居つた。エヱここな畜生め。』と大に腹を立つる故、女房はあきれはて、『ハテまあその樣に腹を立てずと、よく物を案じて見なされ。女房の私が何故にお前に嘘をい

ふものか、人の言葉を必ずあてにさしやんすな。』といへば、辨阿は又いかさまそれはさうでもあらうこ、女房の言葉に又迷うて、檀那寺の和尚へ行きて、『さて此の頃私を趁跛こいふ人もあり、びつここいふ人もあり、又左の足の短いのぢやといふ人もあれば、右の足の長いのぢやといふ人もあつて、大きに迷惑致しますが、こりや全體どちらが實眞でござりますか、信實の所を聞かして下され。』こいへば、和尚も此の行司には團扇を上げかね、『イヤ辨阿殿、此の論は勝負なしで御座る』といへば、『ヘエ左樣ならこの樣にもないので御座りやすか。』といふゆゑ、和尚も詮方なく、『イヤ左樣でも御座らぬが、信實の所を申せば、兩足の揃はぬので御座る。』といはれたけな。何こ阿房なものもあるものぢやな。

人の言葉をあてにせずこ、まあ我が足を投出して、とつくりこ見ればよい。さうすると、趁跛といふも實に此の事、びつことといふもやつぱり此の

事。右の足の長いといふも、左の足の短いといふも、兩足の揃はぬといふも、皆此の事であつたわいといふことが知れる。

文字や書物や經文ばかりを當にして、我が本心の知れぬのは、やつぱり此の辨阿の仲間ぢや。誰殿もその樣な阿房なことはまあ止めにして、御銘々御生れ得の本心を取出して御覽じるがよい。さうすると此の克己の御辭の廣大な意味が、はつきりと分つて、實實にありがたうなる。さうないと此の御辭は何程委しう御話し申しても、足袋の底から足の裏を抓く樣で、今一こ際身にしまぬ故、大切なことをうろ〳〵仕舞にせにやならぬ。

已に先年ある人のいはるゝには、『孔子樣にも大分言過がある。仁の德が何程廣大にいひたいとて、たつた一日己に復つたとて、天下中がその仁德に歸服するとは、あんまり大相ないひ樣ぢやないか。』といはれたが、それが大きな間違ぢや。仁は前にも申す通り、やつぱり我が本心の異名で、その

本心は、元來ちつとも無理のないもの故、一日どころぢやない、只一時でも一事でも、そのいふ事や爲る事に無理さへなけらねば、世界中の人が得心する。鷺を白いといひ、烏を黑いといふに、誰が一人もそりや間違ぢやといふものはない。雨の降る日に、『今日は結構な御日和。』といつて見たがよい。そりや誰でも合點はせぬ。

しかし之を聞いて、若い衆など早合點して、人の顏の醜いのを見て、『おまへの顏は醜い顏。』とは必ず言はぬことぢやぞえ。そりや又禮に違ふ故、向ふで腹を立てる。されど又、人が此方を『馬鹿』の『白痴』のといつた時は、必ず腹を立てぬことぢや。その時はまづ我が身に立反つて、馬鹿か白痴かよう考へて見るがよい。その上で白痴といはるゝ覺えがあれば、そりや向ふに白痴といふたが至極尤もゆゑ、此方に何にも腹を立てることはない。又こちらに馬鹿といはるゝ覺えもなく、白痴でもないものを、自然

向ふで白痴といへば、そりやその言うたものが眞の白痴ぢや。その白痴を相手にして腹を立て養え返へるは、向ふの白痴へ弟子入して白痴の稽古するといふもの故、それが正眞に白痴を盡すといふものぢや。

これ程譯の分つた事の分らぬ樣に成つて居るも、やつぱりかの己といふ眼鏡の所爲で、大切な世界を、只うろ〳〵仕舞ひぢや。兎にも角にも本心知つて、此のおのれといふものを打殺す修行せねばなりませぬ。仁を爲ふこと己に由れりぢや。その殺し切つた所が、即ち仁の全體ぢや。

しかし此所は、前にも段々申す通り、甚だ聞え惡い所で、その場に居切ることは、孔子樣や顏回の德がなければ中々出來ぬことゆゑ、その所を今一段引下げて、銘々ごもの分際で近く聞えるやうに申せば、萬事を堪忍する事ぢやと思へばそれでよい。百戰百勝一忍に如かずの、忍の德たるこゝ持戒苦行も及ぶべからずなどいうて、堪忍の德にはどんなものでも敵對ふ

婆婆、又、索訶とも書し、堪

忍と譯す。吾人が住すると千の大千世界の總稱なり。堪忍と名づる所以は、この世界の生類、惡十惡業に堪へて、敢へ出離せざるなり。又一切世界に出生するも、互に相堪忍法に依り堪忍にて生存を得るが故に名づく。

事はならぬというてある。

しかし又此の樣に堪忍々々といふと、お前方は、只腹の立つのを堪へる事ぢやことばかり思うて御座らうも知れぬが、此の堪忍といふことは、中々左樣なことでは御座りませぬ。已に佛法では、此の世界を娑婆世界と申しますが、その娑婆といふことは、天竺のことばで、それを漢士の文字に飜譯すと、堪忍といふ二字になるけな。此の日本のことばで訓むと、たへしのぶと訓んで、ひらたく言へば、こらへるといふことになる。さう見ると娑婆世界といふは、堪忍世界といふことで、何事でもこらへにやならぬ世界ぢやといふことぢや。それ故其の意味を、此の次に孔子樣が顏回へ御懇ろに御示しなされました。それも序に御話し申しませうが、通すと御退屈ゆゑ、先づ一服上りませ。

顏淵曰く、請ふその目を問はん。孔子曰く、非禮動くことなかれ。非禮聽くことなかれ。非禮言ふことなかれ。非禮動くことなかれ。顏淵曰く、回不敏ゝ雖も請ふ斯の語を事ゝせん。

扨この顏淵の請ふその目を問はんといはれましたは、前席にも段々申す通り、孔子樣が顏回へ、人の心にも私心ゝ本心との差別のある事故、その私心ゝいふ身欲の己に克つて、本心といふ天理のまゝになりきるを仁といふぞと御示しなされた所、顏回はその意味を速に御會得なされて、扨も扨もゝ御感心の餘り、『尙その己に克つことの條目を委しく御示しなされませ。』と、又推返して願はれたことで御座ります。そこで孔子樣がその條目を委しく爰に御示しなされて、『非禮視ることなかれ。非禮聽くことなかれ。非禮言ふことなかれ。非禮動くことなかれ。』と仰せられた。『非禮』とは萬事を氣まゝにすること。『なかれ』とは爲ないといふことで、『視ることも氣儘に視るな。聽くことも氣儘に聽くな。言ふことも氣儘に言ふな。動することも氣儘にするな』と仰せられたのぢや。

扨この氣儘ゝいふことは惡いことぢやゝいふことは、誰も本心にはよう知つて居るけれど、その本心を曲げるものが、かの己ゝいふ身勝手な心ぢやゆゑ、その身勝手の心に克つて、萬事に氣儘をせぬやう、畏れ愼むことが肝要で御座ります。その志のたつた一つで親への孝行も出來、主人への忠義も出來、夫婦兄弟朋友の和合も出來ます故、何事にも惡いことはないやうになります。

又その志がなくて、見たいまゝに見、聞きたいまゝに聞き、言ひたいまゝを言ひ、動たいまゝをする氣になると、おのづと不忠も出來、不孝も

出來、種々樣々な惡事が起ります。さう見ると、人の身の上に此の上もない恐ろしい敵となるものは、只此の己といふ萬事に氣儘我が儘する人の心ぢや。心中したり、身を投げたり、首縊つたり、咽突いたり、廣い世界に五尺の體の置所がないやうになつて、果は家を失ひ國を亡すも、皆此の己から起ることぢや

それで昔唐土の舜といふ天子樣は、禹王といふ聖人へ天子の御位を御讓りなさるゝ時、『人心惟れ危く、道心惟れ微なり。惟れ精惟れ一にして允にその中を執れ。』と御示しなされた。義經公の軍歌にも、

我に勝ち味方に勝ちて敵に勝つ
是を武將の三勝といふ

とも御座りますが、如何樣たとひ幾萬騎を引率ゐて御座る大將方でも、常々此の己といふ身欲の敵に御勝なさるゝ御力がなくて、只御自身のいひたいまゝを、勝手次第に仰せられたり、したいまゝを勝手次第にして御座ると、第一その御家來から歸服せぬ故、味方の軍勢が何萬あつても、皆當分の雇人みたやうになつて、驚破といふ時は銘々の逃仕度ばかりするから、如何程の小さい敵にも勝つことが出來ぬ。そこで昔の名將方は、先づ此の己に克つことを、常の御仕業になされて御座る。己に東照神君の五字七字の御傳授にも、

上を見な身の程を知れ

と仰せられましたげなが、是れ皆己に克つことの御示しで御座ります。その上にまだ有りがたいは、『我は戰國に生れたれば、幼少より學問といふものをせぬゆゑ、何にも知らぬ文盲なものなれど、只常々の心得に、仇を恩で報すといふことを忘れぬやうに守つて居る。』と御意なされたげな。何とまあ恐入つた有りがたい御心ぢや御座りませぬか。是が本眞の己に克つて

東照神君の德川家康のことは慈家康は後陽成天皇より東照大權現の號を賜はる。

北條の末頃。鎌倉北條氏の末頃即ち北條高時の頃をさす。

切つ〻張つ〻人を切り張とばすこと。

禮に復ると孔子の仰せられた所で御座りませう。又銘々ごとき小人は、

手とたのむ垣ひき倒す瓠かな

とやらで、恩を仇で報すといふことは、隨分知つて居りますが、仇を恩でかへすといふことは、どうやら勝手が違うたやうに思ふ。古い句に、

手折らるゝ袖にかをるや梅の花

是が誠の仇を恩で報すの心で、寛仁大度といふものゆゑ、己に克つて禮に復れば、『天下仁に歸す』で、此の德には如何なるものでも、抗拒くことは出來ませぬ。申すも甚だ恐れ多いことながら、神君のその御仁心のたつた一つで、天下一統、草も木もその御仁德に服し奉り、往昔北條の末頃から二百七八十年間息間のなかつた、切つ〻張つ〻も、貝鐘太鼓や、鬨の聲も、斯く太平の御代と治り、己に今日の冬方や我々まで、その御仁澤を蒙るこいふは、實に有りがたいとも勿體ないとも、言葉には言ひ盡されませぬ、

手島先生。手島堵庵のこと。石田梅巖に次ぐ心學の大家なり。

韓信。支那の漢の韓信の事。

この時、人少年の時、大勢の若者から辱しめられて、人の殿れをくぐつたことがあるので名高いる。

廣大な御慈悲で御座ります。

されば今日の銘々如きものは、取りわけ此の己に克つことを、常の仕事にして居ねばならぬ筈で御座りますに、氣の強いといふものか、又盲蛇に懼ぢずこやらで、恐ろしいことの知れぬのかで、己が私欲や身勝手に克たうとはちつともせず、只人に勝たうの、世間に負けまいのこばかり骨を折つて居る。何こ詰まらぬものぢや御座りませぬか。手島先生のいろは歌にも、

負けることをばきらやるけながなぜに欲にはよう勝たぬ

これが負けぎらひの負好き、勝好きの勝ぎらひこいふのぢや。どなたも負けることが御嫌ひなら、まあ〳〵精出して我に勝つ樣になされませ。負けて勝つ智惠の力の強さには

●利生あらたなる御利益が不思議にあらはれること。
●墓どのひきがへるのこと。

誰もかんしんするぞ韓信

我が心に勝ちさへすれば、世界中に敵はない。それを譬へて御話し申すと、爰に面白い話がある。

昔、或所に利生あらたな観音様が御座つた所、その堂へ、毎夜々々鼠が大勢連れだつて參り、観音様を祈りますげな。何こいうて祈るかといへば、

『南無大慈大悲の観世音菩薩、千の御手の弓矢を以て、怨敵退散なさしめ給へ。南無大慈大悲の観世音様。』と、高聲に祈る聲を、縁の下から墓が聞きつけ、そろ〳〵這うて出て、鼠へ向つて言ひますは、『お前がたはそこへ來て観音様へ何を祈らるゝか。』と問ひましたれば、數多の鼠が口を揃へていひますは、

『いや墓どのか、久しぶりに御目に懸るが、いつも御無事で目出たう御座る。我等は又それに引換へ、此の頃大きに難儀なことが起つた。聞いて下され。

●塵功記と書く。塵劫記は吉田七兵衛光永が寛永四年に著したる和算の書なり。当時輸入せらるる支那の書よりは遙に大なる明の著、算法統宗を直したるものなり。塵劫の文字は山城嵯峨の天龍寺の僧玄光の作にしもの流行甚だ多かつた。

我等が代々住む家は、そなたも豫て知らるゝ通り、此のあたりでの大家なれど、亭主が代々猫嫌ひで、猫を飼うたことのない家ゆゑ、我等は何の恐もなく、數多の子を生み孫も儲うけて、塵功記にあるやうに、曾孫、玄孫、月々年々に繁昌し、是の家には猫さへ居らねば、世ざかり〳〵といふ歌を唄うたり、餅を搗いたり、輕業したり、様々の楽しみ暮しを爲をつた所、此の頃旦那が何を思ひ出したやら、俄に猫を飼はれ出したが、その猫が鼠を捕ること大上手で、我々は親を捕られ子を捕られ、娘を喰はれ女房を殺され、いやはや大變なことで御座る。是を此のまゝ捨て置くこ、我等も亦同じ様に、悲しい最期をせねばならず、さらばというてあの猫を退治しやうといふ事は、我々か力には迚も合はぬことぢやゆゑ、此の上は神佛の力を借る外仕やうがないと、鼠一統申し合せ、観音様へ歩みを運び、猫退散を祈るのぢや。』といひましたれば、

蟇は兩手を突きながら、愚鈍氣な顏をして、『ふう、そんならば鼠どの、お前方の身の上で、此の上もない恐ろしい仇敵となるものは、只その猫ぢやと思はるゝか。』と問ひましたれば、鼠は皆口を揃へて、『やれ〳〵怖やおそろしや。廣い世界に我々が身を亡す敵となるものは、猫より外には御座らぬ。』といへば、蟇は大きな口を開いて、只があ〳〵と笑ひながら、『さて〳〵お前方は、おろかなことをいはるゝものかな。お前方の身の上では、成程猫も恐ろしからうが、その恐ろしい猫よりも、まだ恐ろしい惡いものを、お前方は銘々の身に持合はして居るらゝが、それにはチトこも氣が付かぬか、人間の世界でさへ、利口なものや發明なものは、白鼠ぢやの、いや鰻ぢやのといひますけなが、それ程賢いお前方が、我が身に付いた敵は知らず、猫ばつかりを恐れらるゝは、去りこは笑止なことで御座る。』といひましたれば、

鼠は只きよろ〳〵して、『それは何こも合點が參らぬ。あの恐ろしい猫よりも、まだ恐ろしい惡いものが、我々が身に付いてあるこは、そりや又何のことで御座るか。』と問ひましたれば、蟇は眼をぱち〳〵させ、『その恐ろしい敵と申すは、何にも別のものでは御座らぬ。お前方の口の中に二本宛、付いてある、錐のやうな鋭い齒ぢや。あれがお前方の身を亡ぼす、恐ろしい敵ぢや程に、爰へ來て觀音樣へ猫の退治を願ふより、まあその向ふ齒を拔いて捨てさつしやれ。』といひましたれば、

鼠は一統口を揃へて、『そりやいよ〳〵合點が參らぬ。我々は口の中にあの強い齒があればこそ、戸障子でも喰貫いたり、正月餅の固いのでも、何の苦もなくしてやるから、命に繋いで居るといふもの、さすればあの強い齒こそ、我等が爲の身の寶劍、それにあの齒を敵とは、そりやごうも合點が行かぬといひましたれば、

太平樂舞樂の曲名より轉じて、勝手次第の語を吐くことをいふ。

蟇は喉を動しながら、『いや鼠どの、さういはれな。昔から猫を飼はれぬそちの內に、俄に猫を飼出したは、どうした譯ぞと、能くその本を推して見やれ。その本はお前方の齒節があんまり達者なから起つたことぢや御座らぬか。お前方は正直に天命の道を守つて、人間に害を爲す毒蟲を捕つて食つたり、人の防げにならぬやうな、こぼれ物や廢り物を拾うて食うて居らるれば、そちの內に何のまあ嫌ひな猫を飼ひませう。それにお前等が、我が儘な齒節の强いを賴みにして、腹の足りにもならぬことに、簞笥長持へ穴を明けたり、戸障子を食ひ貫いたり、飯櫃や重箱を嚙つたり、書物や掛物に疵を付けたり、人に對して樣々の惡行をせらるゝ上、少しも憚る氣色もなく、天井を駈廻つて、人の頭へ小便したり、きい〳〵ちう〳〵太平樂をせらるゝ故、今の旦那が、是ではならぬと、嫌ひな猫を連れて來て飼はるゝやうこなつたのぢや。さすれば猫より恐ろしい身の敵となるものは、お前方の向ふ齒ぢや程に、あの向ふ齒を拔いて捨て、以來はちとおとなしうさつしやりませ。さうさるれば仁者に敵なし。ニヤンにも恐ろしいことは御座らぬ。』と申したれば、

鼠は一統尤もと感心し、『ああ大賢は大愚の如しとやら、お前達を是までは、只おろかなものとばかり、心に侮つて居りましたが、床の下に生れながら、何時の間に學問して、さやうな道理を悟られたか。』と問ひましたれば、蟇は高ぶる氣色もなく、慇懃に手を突いて、『いや私は固より賤しい身分、その上愚鈍なものなれば、學問することもならねど、其處の道理は、私が身のこゝで知つて居ります。その譯は、我々が身の爲に仇敵となるやうな怖いものは何にも御座らぬ。そりやなぜなれば、私が家筋は、お前方も知らるゝ通り、先祖からの叮嚀筋ゆゑ、第一誰殿の前へ出ても、此の通りに兩手を突いて、つひに一度も腰を伸ばしたことも御座らず、その上

夏の暑さの頃は、縁の下も苦痛ゆゑ、暮頃にも成りますれば、納涼かたがた、縁の下をそろり〳〵這うて出て、前栽に納涼んで居れば、麁粗かしいおさんどんに天窓をぎゆつと踏まるゝことも御座るが、その時は私でも、まんざら腹の立たぬことも御座らねば、『エヱ此のおさんめ、おのれも丁度おれがやうに脊中に眼が付いてあるか。足元を見て歩け。』と言はうかと思ひますが、

前栽・庭の花ぞの、うゑどみのこと。

いや〳〵是もさうでない。なぜなれば、我が居るべき縁の下に屈んでさへ居たならば、こんな憂目に逢ひもすまいが、爰へ出たばつかりに、天窓をちやつとやられたのぢや。さすれば罪は五分々々ぢやと、心で心を警めて、ぐうとも言はず怺へて居ります　又子供衆の慰みに、折々煙草の吹殻を呑まされることも御座るが、是は又熱くもあり辛らうもあるゆゑ、『エヱ此の子供めは、なぜその様な悪い遊びを』と言はうかと思ひますが、是もよく〳〵考へて見ますれば、やつぱりこちらも不調法、何ぜなれば、初めから喰はるゝものか喰はれぬものか、とつくりと見定めた上喰ひ付けばよかつたに、あんまり狼狽へて喰ひ付いたゆゑ、こんな辛い目に逢はされたのぢや。さう見れば、是も半分はこちらから手傳うたのぢやと了簡して、何ともいはず吸殻を吐出して、眼ばかり白うしたり黒うしたりして怺へて居る。

米を淅す・米を洗ふこと。孟子に淅（カシヨネ）とある。

口は禍の門・孔子家語にあり。曰く、「口は是れ何をか傷る。禍の門なり。」とあり。

又、飯焚きのお杉どのが米を淅るゝ時、糠の粕でも貰はうかと、井の元へ這うて出て、白水の流るゝを丁度屈んで待つて居れば、意地の悪いお杉めは、態と私が天窓の上へ白水をさぶとかける。その時は、眼へ滲みて痛うもあり、うるさうもあるゆゑ、『エヱ此のお杉め、こりや、おれをどうし居るぞ。』と言はうかとも思ひますが、いや〳〵『口は禍の門。』とやらいへば、爰が大事の辛抱どころと、眼玉ばつかりくるりとひつくり返して、じ

つと堪忍して居ります。その通り何事にも、身を懲らし己を責めて慎んで居りますゆゑ、世界中に怖いものは何にも御座らぬ。その眼から見ますれば、お前方の利口發明もあんまり譽められたことでは御座らぬ。』と申す古い話が御座りますが、何と面白い話ぢや御座りませぬか。

孔子の語にも、『聰明睿智、之を守るに愚を以てす』と御座りますか、成程世界中が此の墓の樣な心持に成つて、唯々己に克つことを常の仕業にして居ればよいけれど、誰も此の鼠と同じことで、己が私慾や身勝手する心の、恐ろしいことにはチットも氣が付かず。唯向ふばかり恐れて逃げ廻るものが幾らもあるものぢや。

是を田舍の女中などの事でいうて見ると、何ぞ花見にでも出るか、芝居見物にでも行くといふと、千兩役者の舞臺衣裳にも負けぬ氣になつて、かの御法度の銀の簪や、瑇瑁の櫛笄を、亭主に隱して天窓に指したり、いろ

この話は餘り長いので讀者の便を考へ、中間でも時々行を改めて書くことにした。

聰明睿智云々　荀子宥坐にある語なり。

御法度の銀の簪　銀をかんざしとすることは、禁止になつて居た時代があつたのだ。奢侈を戒める爲なり。

瑇瑁　龜の屬で、熱帶の海に產す。これにて櫛笄の類を製す。之を鼈甲といふ。

八文字踏む　傾城が道中する時、足の爪先を内の方へ曲げて歩むことをいふ。

天上　一番上のものといふこと。

〳〵な派手なものを身に着飾つて、大路を八文字踏んで歩きながら、何を恐れるかと思へば、自然見廻はりの御役人へども出會はねばよいがの、見咎められねばよいがのと、そればかりに氣を揉んで、肝腎な恐ろしいものは、我が天窓に指したり、身に卷いて居るといふことが、どうしても合點が行かぬ。難儀なものぢや。

又丁稚の長吉は、おのれが買喰ひに、店の錢箱捜しながら、番頭の眼を恐れたり、手代の三助は、女中の臍に偸眼づかひしながら、旦那どのや、かみさんを恐れたり、そんな類は幾等もあるものぢやが、何と詰らぬものぢやないか。丁度盜人が人の物を盜み〳〵、御公儀の御成敗を恐れたり、博徒が、博奕打ち打ち、人の見る眼や人の聞く耳を恐るゝと同じ事で、皆かの鼠の御仲間ぢや。どうぞ本心知つて、世界中に恐ろしいものゝ天上は、唯我が心といふことを、しつかりと決定したいもので御座ります。

それに付いて、又人のよく言ふことぢやが、『金銀といふものは恐ろしいものぢや。何町の何兵衛は金銀に命を取られた』の、『いや酒といふものは怖いものぢや。喧嘩口論も怪我のあやまちも、大方は酒から起こる。』のといひますが、昔から金藏が人を切つたの、千兩箱が首縊つたのと言うたことも聞かぬが、酒樽が醉狂したの、酒德利がすつぱ抜きしたのというた事もない。あれ等は皆無心なもの故、何にも科はないけれど、あるが上にもまだ欲しいといふ慾心や、呑んだ上にもまだ呑みたいといふ意地ぎたない根性が、身を亡ぼす敵となるのぢや。

又貧乏人は、千兩富に通をぬかして、掛けては取られ、買うては取られ、尻の仕舞は鍋釜まで取られて仕舞うて、『あゝ富といふものは悪いものぢや。富に身代叩き上げた』と、是も鼠と同じことで、減多に富を恨みるが、あれは元、掛けさへせにや取られはせぬのぢや。それにたつた二朱か一分の元入して、何十兩の何百兩のといふ大枚な金銀を、骨も折らずに唯でしてやらうといふ横着な根性が、つい身代を叩き潰すのぢや。さう見ると、世界中に我が身の敵となるものは、唯此の己といふ私欲の心ぢや。その外に何も恐ろしい怖いものはない。古德の歌に、

定まりて山姥といふものはなし
心の變化これをいふなり

是はちと卑劣なことぢやけれど、現在こゝで私が、此の手の大指と食指とを合して此の樣に丸い輪をして皆樣に御目に掛け、『唯世の中は是ぢや〳〵といふ。』と、失禮ながら皆樣が、『ムム錢のことぢやの。』と思ひなさるに違ひはないが、此方らに錢といひはせぬぞえ。爰にはつい指がかう丸うなつたのぢや。それに錢とはどうして思ふなれば、そりや平常御前方の腹の中に、何をいふも金銀のことぢや。金銀さへあればといふものを持合はして

千兩富・富興行・富は富の略。無盡講の一種。千兩富は、千兩の富札に當ると。文化より天保頃にかけて流行したものなり。

二朱・一朱は六百二十五文のこと。

一分・今の二十五錢に當る。

山姥・深山に住む怪物。形人の如くにて、身のたけ一丈ばかりもありといふ。

御座るゆゑ、それがふつと飛出るのぢや。

その證據は、欲氣のない幼い子供に、かうして見せては錢とは思はぬ。そりや大方餅のことか饅頭のことかと外思ひはせぬ。又耳に聞くことでもその通りぢや。正月の元日に夜明烏の聲を聞いて、女中などは能くいふものぢや。『お萬さん、あれ御聞き、元朝の明烏は聲も長閑に勇ましいものぢや御座りませぬか。』といふが、是も元朝ぢやとて烏が別段に勇ましう鳴くでもないが、此方の心が長閑なゆゑ、長閑に聞えるのぢや。その證據は、秋の日の夕暮頃に、女中などが忙しがつて、『もう日が暮れるさうな。燈火の用意もせねばならず、座敷も掃いて置かずばなるまい。』『それ物干の干物よ。』『それ夕飯のこしらへよ。』と、何か氣の揉める時分に、かあ〳〵の聲を聞くと、『エエ小面の惡い烏めが、忙しない鳴き樣し居る。』と、あの聲が忙しう聞える。

又その内に大切な病人でもあつて、一家親類が寄集り、醫者の相談でもし居る所、土藏の廂へ烏が來て、かあ〳〵と鳴いて居ると、『あゝ烏鳴きが惡う御座る。どうもあれでは困つたものぢや。』といふけれど、その隣家には兒が生れて、『やれ〳〵嬉しや、初孫を儲けた。しかも丈夫な男の子ぢや。』と、家内中が目出たがつて居る時、そのかあ〳〵の聲を聞くと、『あれあれお萬、歡び烏が鳴きますわい。』といふ。烏の聲は何時も替らぬかあかあぢやが、此方の心の持樣で、長閑に聞えたり忙しう聞えたり、目出たう聞えたり、悲しう聞えたり、さま〴〵に聞える。一切唯心造というて、善惡邪正も、禍福吉凶も、實の所は向ふにあるではない。皆此方の心の變化ぢや。

そこで前段にも申す通り、此處に孔子樣が、『仁を爲ふこと己に由れり。人に由らんや。』と御懇に御示しなされました。ごうぞ誰殿も御志を御立

てなされ、此の石門へ弟入りなされて、御銘々の本分の心の御詮議をなさるゝことが肝要ぢや。

扨又その心の發用は、孔子様でも御釈迦様でも、視るか聽くか、言ふか、動くか、その外はないことゆゑ、孔子様が此の四ケ條を御擧げなされて、かの御弟子の顏回へ『非禮視ることなかれ、非禮言ふことなかれ、非禮動くことなかれ。』と御示しなされた。

そりやごういふことなれば、『何事を視るにも聽くにも、言ふにも、動ふにも、吾が心の中に省みて、是は私ではないか、是は身勝手ではないかと、一々吟味し、若し身勝手と氣が付いたら、何程見たく思ふことでも、じつと慾へて必ず視るな。何程聽きたく思ふことでも、じつと慾へて必ず聽くな、何程言ひたく思ふことでも、じつと慾へて必ず言ふな。何程動たく思ふことでも、じつと慾へて心ず動るな。』と御示しなされたのぢや。是は前

一切唯心造
事は皆心の物
すべて出る思ひ
ふらとは無
るいとは思ふ
ととの働き
皆心の心は
で、心より
外に物はなり
い物ふ、
唯心論
る。であ

道倫禪師林
の道倫は鳥窠
禪師の誤。鳥窠
ふ。今も鳳寺に鳥窠趾
林寺林師の故趾
禪師とい
とのあ
の道林禪師
白樂天と此
の問答は有
名な話で、
說教などに
よく引出さ
れるのであ
る。

白樂天、
名は居易、
香山居士と
號す。
唐の貞元十
四年進士に
擢でられ、

段の『己に克つ』の意味を、今一段引下げて、分り易いやうに御示しなされたので、一口に言へば、『萬事に我が儘すな。』と仰せられたのぢや。神道の教でも、佛道の教でも、何の教でも、只此の我が儘せぬの外は御座りませぬ。さう見ると道といふものは、元來いと易いもので、何にもむづかしい譯では御座りませぬが、しかしそのいと易いことが、一番出來にくいもので御座ります。

昔、唐土の道倫禪師は、白樂天が佛法の大意如何と問うた時、『諸惡莫作、衆善奉行。』と答へられたけな。是は『諸の惡を作すことなく、諸の善を奉行ふことぢや。』と言はれたので御座ります。そこで白樂天が、『それは三つになる童子でも能く知つて居ることで御座りますが、それを廣大な佛法の大意と言はるゝは、どうしたことで御座る。』と又問ひ返へされたれば、『三才の童子も知ることは易し。八旬の翁も行ふこと難し。』と示された

尋いで翰林學士となる。詩に以て名高し。大中元年卒す、年七十五歳。

●白猿　目市川團五代目市川團十郎ならん。狂歌に長じて名高い。尤も他に白猿といふ號の人もある。

●七種　これは春の七草のことなり。すずな、すずしろ、せり、なづな、ごぎやう、はこべ、たびらこの七つなり。正月七日の朝これを羹として萬病を除く儀式である。草なづな、唐土の鳥と日本の鳥と、渡らぬ先にといふて七草を叩くのである。

●中澤道二翁　道話の註に詳しくある。

こ申すこゝぢやが、いかさま知ることや言ふこゝは隨分出來易いが、その通りすることはきついむづかしい。昔の白猿が句に、

七種や口ほどに手の廻り兼ね

こいふ句が御座りますが、いかさま世に八人藝や十人藝はするものも多いけれど、只我が一人藝を人の得心するやうに能くするものは、中々ないもので御座ります。それに此の顏回は出來る覺えがあつたと見えて、『回不敏と雖も、請ふ斯の語を事とせん。』と御請をせられました。

是はどういふことなれば、『私は不敏なものでは御座りますが、此の御言葉だけは、守ることを生涯の仕事に致しませう。』こしつかりと請合はれましたこゝで御座りますが、何こ有難い心ぢや御座りませぬか、どうぞ御互に此の顏回の眞似なりともしたいもので御座ります。それに就いて爰にありがたい話が御座ります。

先年當舍の開祖中澤道二翁の存生の時、牛込邊かに住んで居られました、藤村何某こか申す仁は、至つて篤實な仁で御座つて、平常は物も聲高には得言はぬやうな人で御座りましたげなが、此の道を殊の外信仰致され、萬事行のよい人であつたと申すことで御座りますが、兩親には早く離れられ、兄弟もない人なれば、道二翁を師にも親にも兄弟にもこ憑み、何事があつても、先づその次第を道二翁へ委しく話し、翁の教を請けた上で、その通りを固く勤められる人であつたけに御座りますが、是等は實に感心なここで御座ります。

聖人も、『事に敏くして言を愼み、有道に就いて正すを、學を好むこいふべきのみ。』と仰せられましたが、誰もかうはありたいことで御座ります。

さてその人は、内儀に娘二人持つて居られた所、いつとなく病み付かれて、遂に五十四五才で終られましたげなが、その病中に家内の衆へ言はれ

聖人は孔子のこと。これ

事に敏くして云々論語學而篇にあり。

ますは、『我が此の度の病は、快氣の程も覺束なし。去りながら、先に道二先生の教に由つて、誠の道に至りたる御蔭にて、是まで一生を安樂に送りしことのありがたさ。その上生死の道にも疑なければ、何一つ心に掛ることもなし。是偏に先師石田先生はいふに及ばず、道二先生の御恩なり。されば我が亡くなりし後は、道二先生を師とも親とも、此の方とも思ひ、家事の治め方はいふに及ばず、世間諸事の駈引事、何に限らず、一々道二先生へ御相談申し上げ、先生の指圖の通りを致されよ。必ず〳〵自己の考を以て萬事を取計らふこと無用なり。』と遺言して終られましたげな。

そこでその家内の衆も、その遺言の通りを堅く守られ、姉娘への養子も出來、跡の相續もしつくりとして行かれるうち、妹娘も追々脊丈が伸びる所、その娘は性質も十人並で、何一つ言ひ分もない娘なれど、どうした生れあひやら緣遠うて、とう〳〵廿五六才まで緣付もなかつた所、やう

小舅小姑夫たるもの〻男の兄弟を小舅といひ、女の兄弟を小姑といふ。

此の邊餘り長い話故行を改めて讀者の見安いやうにした。

面はゆげ恥かしいやうな顔付すること。

う二十七才の年、さる方より貰ひを掛けられた所、その先方は、隨分折合もよい内なれど、舅姑もあり、小舅小姑もあり。その上繼子の三人もある、内なれば、誰にしてもまあ相談のむづかしい内なれど、そこが緣といふものか。

かの母親の言はるゝには、『年たけた娘なれば、もう花嫁さら出られまいから、所望に逢うたを幸に、遣るがよからう、行くがよからう。』と、内輪の相談もあらまし極つたゆゑ、先づ是も道二先生へ御相談申さんと、母親は娘を連れて、先生の許へ參られ、扨母親の言はれますは、『是なる娘も、此の度、何町の何某殿より貰ひを掛けられましたが、先方はかやう〳〵の家ゆゑ、餘り望みの方角でも御座りませぬが、年たけた娘のことゆゑ、何事も因緣ごと〻あきらめまして、遣はしたう存じますが、これは如何致しませう。』と言はれましたれば、先生の言はれますには、『それは先づ珍重な

附合ひまし
ましはまし
てとあるべ
き所であら
う。

ここで御座る。しかし舅姑もあり、小舅小姑もあり、その上繼子の三人もあるといへば、世間並でいふ時は、ちと六かしい家のやうなれど、いやまたさうしたものでも御座らぬ。そこは娘子の心一つで、善くもなれば惡しくもなるものゆゑ、爰はお遣りなさるもよからうが、先づ何はともあれ娘御の心得が大事で御座らが、娘御はまあ、どう心得て行かうと思はるゝか。』と問はれましたれば、

娘はちと面はゆげに手を突いて、『はい私が心得と申して、只今何もかうと申す考も御座りませぬが、先づ先方へ參りましたなら、舅姑御は隨分大切に致しまして、なるたけ孝行を盡しませうし、又小舅小姑は隨分信實を以て附合ひまし、三人の繼子をば十分可愛がつてやる積り。』と申したれば、道二翁、娘の顏をじつと白眼んで、『それは以ての外の心得で御座る。その樣な心得では、迚も此の緣は長久は仕ませぬから、これ御袋此の緣談はまあ止めにせらるゝがよい。』と言はれましたけな。

そこで母も娘も肝を潰し、『さやうならどう心得て參りますが宜しう御座りますぞ。』と申したれば、翁の又言はれますは、『言うて聞かすは易いことなれど、爰は娘御の一生の身の落着になる一大事の義ぢやによつて、ついと通り聞いた分のことでは、中々間には合はぬから、まあ篤と考へて見らるゝがよい。御袋も共々に考へて見て遣らしやれ。その上でいよ〳〵斯うといふ決定が出來たなら、又重ねて相談に連れて御座れ。』と言はるゝゆゑ、『さやうならば歸りまして、篤と考へました上、又伺ひに上りませう。』とその日はまづ歸られましたけながら、それから二三日して、又母子連れにて先生の許へ參られ、扨母親の言はれますは、

『此の間申し上げた娘が心得方は、甚だ宜しうないと仰せられましたが、成程この譯がどうやら分りましたやうなと娘も申します故、又今日つれて

上りました。どうぞ今一應御聞きなされてお遣りなされて下さりませ。これ娘そなたの考を今一應申し上げで見やれ。』と言はれましたれば、娘も亦手を突いて、『いかさま此の間申し上げましたやうに、舅姑御へ孝行を致しませうの、小舅小姑へは深切を盡しませうの、又三人の子供は可愛がつてやりませうのと申しましては、どうやら私が心にまだ隔があるやうで、せずともよいことを據なう致すと申すやうに聞えますかと存じます。それであなた樣が惡いと仰せられたので御座りませうかと、夜前もかゝさんと申し合ひました。それで是からさやうな了簡もさつぱりと捨てまして、只舅姑御は私が信實のとゝ樣かゝ樣ぢやと存じましたら、宜しう御座りませうか。又小舅小姑は私が實の兄弟ぢやと思ひまし、三人の繼子も繼子と思ひませず、私が身腹やぶつた信實の子ぢやと思ひませう。さやう心得ましては如何で御座りませう。』と言はれましたれば、道二翁大きに怒り。『そ

思ひまし
ましはまし
てとあるべ
きてあらし
が、しかし
中國邊には
かういふ口
語があつた
のであら
う。

言語道斷、
佛敎の語、
言葉に出
もてやうに
ないひなる
大いなし程
と。しかに
重に惡しき
意にのみ用
に惡しきし
居る。

れは又言語道斷な惡い了簡で御座る。女の身としてその樣な利口な了簡持つて居られては、何所へ嫁入せられても、尻の据わる期は御座らぬ。こりや此の間の心得よりは又一段惡うなつた。舅姑御を信實の親と思ふの、いや小舅小姑を實の兄弟と思ふの、又三人の繼子を我が產んだ實の子ぢやと思ひませうのと、そりや皆當座の出來合ひ了簡で、何れ末の屆かぬことぢや。これ御袋此の緣談は止めにせらるゝがよい。娘御のあの心得では、何れ長久はしませぬから。』こ言はれましたれば、親子とも膽を潰し、暫らく言葉も御座らなんだけながが、稍あつて涙を流し、

扨も〳〵御深切ありがたう存じます。しかしながら此の上は、迚も我々が考には及びませぬことなれば、只幾重にも御示しを願ひ上げます。』と申されたれば、道二翁につこと笑ひながら、『それは尤もなことで御座る。さらばその心得方を今示して聞かせませう。これ娘御近う寄つて篤と聞かし

ありべかゝり　あるべかゝりに同じ。

手當り次第といふに同じ。

此の邊の道二翁の教訓は今日の女子にも適當してゐる。

宜なるかな、一世の風教の權威者で常に聽講者が數百千人に及んだことや。

やれ。扨まあそなたの言はるゝ所、一と通り聞く時は、隨分尤もな事なれど、そりや皆世間並、ありべかかりの知れた了簡ゆゑ、今度の嫁入の間には合はぬ。それ故態とあのやうに嚴しく言うて工夫させたのぢや。併しまあ、あれ程にも能く考へを付けられたその段は感心致す。さてその外に一大事の覺悟といふは、別のことでも御座らぬ。只堪忍といふことで御座る。此の度かの家へ嫁入せらるゝは、只堪忍の行を勤めに行くのぢやと覺悟せらるゝがよい、その譯は、そなたも今年で廿七年、親の家風に馴染んだ娘、俄に他人の家へ這入れば、心に合はぬことも多く、辛いことはあり内なれば、いづれ長い月日には、湯殿の隅や雪隱の壁へ向ひて泣かるゝやうな、辛いことは幾度もあるであらう。さやうなことのある時でも、平常そなたの心の中に、何ぞ孝行らしいものか信實らしいものを持合はして居らるると、おれはあれ程にもするものを、婆樣が聞えぬとか、おれは是程にも思うて居るに、小姑がそでないとか、何れ向ふを恨みに思ふ心が出るに違はない。さういふ心が出たら最後、それが阿修羅の根となつて、遂には緣の切小口、一生流浪せらねばならぬ程に、必ず〳〵そのやうな孝行ぢやの、信實ぢやのといふ、利口な了簡はまあさつぱりと除けて置いて、辛いことのある度に、此所が大切の辛抱どころ、此の堪忍を勤めにこそ、おれは此の家へ嫁入つて來たのぢやと、只一筋に堪忍の行を勤めらるるがよい。それが正眞の活きた孝行、活きた信實ゆゑ、その通りありさへすれば、天下に敵なし。千秋萬歲の榮が出來る。』と言はれましたれば、

母子とも涙を流し、扨もく〳〵感心して歸られ、娘もその心得で先方へ行かれましたゆゑ、夫婦の仲はいふに及ばず、舅姑の仲も睦まじく、小舅小姑にも格別深切にして貰ひ、扨三人の繼子も實の子の樣になつきますゆゑ、家内に少しの物言ひごともなく、誠のにこ〳〵暮しで、遂に三十

阿修羅　梵語、非天の義、力强くして梵天、帝釋天と爭ひ、正法を滅ぼさんとする鬼。こゝは惡心惡事のことにいふ。

千秋萬歲の榮　千萬年までも永く續くこと。

見立てる　見送ること、世話をして死なすこと。

何年を經られますうち、舅姑も追々に死亡られ、夫をも見立られましたけなが、その内には小舅も小姑も皆それ〴〵に緣付き致され、相替らず深切に致し合はれ、又三人の子供は、皆それ〴〵に成長致されたゆゑ、惣領へは嫁を取られ、その次は他家へ養子にやられたのもあれば、嫁入せられたも御座りますけなが、どれもどれも孝行な衆で、その母御を殊の外大切に致され、家も益々繁昌いたしますゆゑ、後には母御は眞の樂隱居になつて、當舍へも絶えず出席致され、一生道を樂しんで居られましたけなが、何と有りがたい話ぢや御座りませぬか。

たつた一つの堪忍を守り詰められた德で、かやうな安樂な暮しが出來ました。佛法に、『娑婆即寂光淨土。』といふがやつぱり此の事で御座ります。扨その母御が自身の若い時、右の通り道二翁の深切な示しに逢うたこいふことを、毎々當舍で同志の人へ涙を流しで語り居られたと申すことで御座りますが、實にこれはありがたい示しで御座ります。是が即ち銘々どもの分際での克己復禮こいふもので、やつぱり仁を爲ふ人の道で御座ります。

娑婆即寂光淨土。此の世が即ち淨土だといふこと。

道も斯く活用せねば益に立たぬ。銘々どもは口と氣ばかり高くなつて、手足の不仁中風病も同じことゆゑ、道が皆乾物になつて仕舞ふ。どうぞお互に志を勵まして、かやうになりたいもので御座ります。

さてあまり長席で、さぞ皆樣御退屈、これにお懲りなされずに、又重ねて御出席。

心學道の話　第三編終

心學道の話第四編

前席

『孟子曰く、人の道あるや、飽食暖衣、逸居して教なければ、則ち禽獸に近し。聖人之れを憂ふること有り。契をして司徒たらしめ、教ふるに人倫を以てす。父子親あり、君臣義あり、夫婦別あり、長幼序あり、朋友信あり。』

これは誰殿も御衆内の小學にも出て御座ります。大賢孟夫子の語で、これは文面通り能く聞えましたことなれば、何も別段講釋致すにも及びませぬことなれど、銘々ごもの樣なうか〳〵ものには、結構な御誡ゆゑ、これを今日の御話の題に致します。先づ此の、『人の道あるや。』と御座りますは、

孟夫子・孟子を孟大子と聞いたことがない。ちと穩でないと思ふ。

凡て人といふものには、人の道を生れついては居らぬものか、誰も道は生れ付いてありながらと申す心で御座ります。

さて此の生れついてある譯は、毎々御話申す通り、天地の間へ此の如く形質を造つて生れ出ます程のものは、何でも神道でいへば活きた神、佛道でいへば活きた佛、儒道でいへば活きた天の御光明の御働で生れ出る世界ゆゑ、何が一つも道を生れつかぬものは御座りませぬ。まづ此の樣な扇子といふものが出來れば、此のやうに要こいふものが締つてあつて、廣げれば廣がり、疊めばたたまり、あふげば風を出すといふ扇子の道が生れつき、茶碗こいふものが出來れば、茶を汲んでも水を汲んでも漏らさぬやうにして、人の手を助けるといふ茶碗の道を生れつき、見臺には書物を載すの道、火入には火を入れるの道、何でもそれ〴〵の道を備へてあるものゆゑ、凡て此の樣なものを、皆道具々々と申します。

見臺・書見臺の略、本を載せて見る臺のこと。

尤もこれは人々の遣ふ勝手を先へ考へ、形を後から造つたものゆゑ、さもありさうなものなれど、天性自然に出來るものでも、考へて御覽らじませ。馬には脊中に重荷を負うて人を助けるの道があり、牛には首に物を掛けて曳くといふの道があり、犬には門を守るの道、猫には鼠を捕るの道、非情のもので言はうなら、梅の木は梅を生し、栗の木は栗をならし、古いこゝぢやが、昔から柳は綠に花は紅、此の道を易へうといふことはならぬ。人もやつぱりその通りで、昔の人でも今の人でも、男でも女でも、仁義禮智孝弟忠信、これが人々の生れついた本心の道ぢや。何にも當世流行る孝弟忠信や、昔の聖人が製作へて御敎へなさる仁義禮智の道ではない。

中澤道輔、中澤道二の子息にて、父につぎて心學を講ぜし人なり。

さるに由つて當門では、先づ此の本心を知ることを御勸め申します。本心知らぬと、道を聖人の製作ものの樣に思ふ。それが大きな間違ぢや。

己に先年京都の老友中澤道輔老人の、當地へ下られます序、道中筋の或御城下へ、數日滯留致されまして、此のやうな道の話が御座つた所、ある夜その所の御家中が四五人づれで、老人の旅宿へ參られ、中に年齡四十餘りの理窟めいた仁が、老人へ向ひて言はれますは、『此の間は御講話度々聽問致し、先づ以て大慶に存じます。それについてチト御尋ね申したい子細が御座つて、今晩推參致しました。別の儀でも御座らぬが、御流儀の心學は、全く宋儒の學と見えて、孟子の性善を專らに御信用なされ、仁義禮智も孝弟忠信も、皆人の生れついた道ぢやといふことを、まい〳〵御說きなされますが、その生れついた道と申すことが、甚だ以て不審に御座る。拙者どもの流儀で申せば、人の性といふものは、大抵惡なもので御座つて、性善に生れたものは百人に一人あるかなきか、その證據を申さうなら、世間にあれ程多い人に、善人といふものは甚だ稀なもので御座るが、惡人といふものは何所でも多いもので御座る。その上孟子の言はれたやうに、人

宋儒。支那宋代の儒者、程子、朱子等のこと。但し此の質問の通り、石門派の心學は宋儒を本として居て、王陽明など一向觸れてゐない。

此の性惡の議論は支那に昔からあつて、荀子などもその一人であるが、全く誤つた議論である。

の性が善なもので、仁義禮智や孝弟忠信を生れついて居るものなら、何にも教は入らぬ筈ぢや。夫に教の入るといふは、只今拙者が申す通り、人の性は惡なものゆゑ、その惡人を治めんため、古の聖人が、仁ぢやの義ぢやの、忠信ぢやのといふさまゞの道を製作へて教へられたものと見えます。それに貴老の心學では、やつぱり孟子の說を貴び、人の性を善なものぢやの、孝弟も忠信も皆人々の生れついた道ぢやのと仰せらるゝは、全體どうした譯で御座るぞ。爰に居らるゝ四五輩は、何れも拙者が門人で御座るが、此の御返答を承はらう。』と力み返つて問はれましたれば、老人のいはれまするは、

『それは〳〵よくこそ御尋ね下さりました。去りながら私は至つて文盲なもので御座れば、その宋儒とやら何儒とやら申す譯も存じませず。その上孟子の性善とやら申すことなぞは、人の話しに聞いたばかりで、讀んだことが御座りませぬゆゑ、何のこと〻も存じませぬ。去りながら此の心學では、古の聖人が人の性を善なものと御說きなされたことがあるゆゑ、人の性を善で御座るの。イヤ孝弟も忠信も人の生れ付いた道とあるゆゑ、生れついて居りますのと、昔の人の口眞似して、人に示しは致しませぬ。吾が本心を知り極め、その本心の發用に自ら仁義禮智も孝弟忠信も、皆具はつてあることをしつかりと見得けた上、その御話をするので御座れば、生れついたものと申すにちつとも間違は御座りませぬ。去りながらその意味は何程御話し申しても、只今貴殿の仰せらるゝ趣では、御得心は出來ますまい。然れば今晩お互に無用の言葉を費して、夜の明くるまで申し合うても、詮にいふ『水掛論』と。』か、何の役にも立たぬことゆゑ、先づ此の論は止めに致して、いよ〳〵貴殿の仰せの通り、人には道といふものを生れついては居らぬもの故、聖人の教があるのか、何れともその證據をしつかりと

現物で見得ますが宜しう御座る。それを近く見付けますには、爰に一つのよい仕やうが御座ります。しかしこれはチトをかしいやうなことなれど、

私は近日江戸表へ出立致しますが、その頃までに何れよりぞ犬を二三疋と猫を二三疋と貰ひ集め、來年の四月頃まで貴殿の御宅へ御預け申して置きませうから、近頃御厄介なことながら。その犬猫へ仁義禮智の五常の道理を説いて御聞かせ下さつたり、又孝弟忠信の誠の道を、御教へなされて下さりませ。さすれば來年四月には、私も又御當所へ歸ります筈なれば、その頃までにその犬猫が少しなりとも、五常の道理を辨へるやうになりましたり、孝弟忠信の誠の道を行ふやうにもなりましたら、それこそ貴殿の仰せの通り、生れついては居らぬものへ敎へてさすこと申すもので、私が申すのが間違といふものゆゑ、その時は私も速に手を下げて、貴殿の御弟子になりませう。』といはれましたら、彼の四五人も大きに閉口致された

と申すことで御座りますが、成程面白い示しぢや。

犬猫にも隨分眼もあり耳もあるけれど、何ほ人が仁義禮智の五常の道理や、孝弟忠信の行をいうて聞かしても說いて聞かしても、元來生れついて居らぬものゆゑ、聞きわけることが出來ぬ。さう見ると人こいふものは尊いものぢや、萬物の靈こいうて、衆理を具へて萬事に應ずる、結構な智惠といふものを生れついて居るものゆゑ、どのやうな賤しい人でも、文盲な人でも、いうてさへ聞かすれば、それは善いこと、それは惡いこと、それは無理ぢや、それは尤ぢやこいふことを明かに聞きわける。

そこでそれさういふ結構な本心を生れついた人の身でありながらといふ心で、爰に孟子が、『人の道あるや。』と申されたので御座ります。』さて『飽食暖衣、逸居して敎なければ、則ち禽獸に近し。』と、これは孟子のきびしい御戒ぢや。

●衆理を具へ●萬事に應ず●る註の論語說

朱子の註釋は心は衆理を具へて萬事に應ずるものなり。

朱子は心は衆理を具へて萬事出でずとはいつかしこれは王陽明の反説なり。

心は衆理を具へるといふのである。

と、理が外にあることになるからと惡いことのである。

そりやごうなれば、誰が身の上でも命のある間は、衣食住というて、身に着ることゝ、口に食ふことゝ、家に住むことの三つは、一つかけても、一日も身の保つことのならぬ大切なものゆゑ、それを一々爰へ擧げて、先づ飽くまで食ひというて、口には飲み食ひを十分にし、又暖に衣るというて、身には暑うないやう寒うないやう、その時々のものを分相應にこしらへて着て、又その上に雨露にも打たれぬやう、二疊敷でも三疊敷でも、吾が家といふものを造つて、その中に安穩に寢起して居ながら、それをありがたいことゝも、勿體ないことゝも思はず、只うか〳〵して居るを、逸居するといひますが、その通り衣食住の三つに、身は十分助けられてありながら、聖人の敎も聞かず、人の道を學ばねばならぬことゝも、勤めにやならぬことゝも思はず。只のらくらと暮らし居るものは、禽獸に近しさいはれました。禽獸とは鳥やけだものゝこと、近しさはやうなものぢやといふことぢやが、何とまあ酷い言ひ樣ぢやないか。

萬物の靈たる人を畜生同樣とは、如何に人をむごく言はうとて、そりやもし先生あんまりぢや御座りませぬかと、爰は一番お互に張込んで見にやならぬやうなものぢやが、よく〳〵吾が身に立返つて考へて見ますると、此の孟子のお言葉は、まだ〳〵よつぽど掛直がある。これを正札現銀かけ直なしにいうて見ると、畜生のやうなどころぢやない。畜生よりは遙に劣るといはにやならぬ。なぜなれば、畜生は形こそ畜生でも、畜生の道を知らぬ畜生は、畜生仲間に一疋もありませぬ。その上畜生は、口に食ふことや、身に着ることや、家に住むことを、人間のやうに十分にしては居らぬ。

先づ牛馬が、あれほど重荷負うたり曳いたり、荒い働きはするけれど、口に食ふものは高が知れてある。麥を食ふか、豆を食ふか、草を食ふか、飼葉を食ふか、糠か、麥空穗か、その外は世界の廢り物食うて働いて居る。

麥空穗麥を叩いて實を取つた殘り穗、こと。であらう。

それにまあお前さん方や私等は、朝から晩までこれ程の働きするか知らんが、口は食ふことを大相食うて居る。先づ米ぢやの麥ぢやのといふ五穀の類はいふに及ばず、その外の野菜ものから、魚や鳥の命まで取つて食うて、その上に桃ぢやの梨ぢやの、栗ぢやの柿ぢやのといふ五季折々の果物まで、餘さず漏さず爬込みますは、何と飽くまで食ひさいふものでは御座りませぬか。

それに又八九月の頃、庭の柿の木の柿が熟れると、鳥が來てつゝき居る。それをその家の主が見附けて、何といふかと思へば、『エヽ忌々しい盗人鳥、折角柿が熟れたと思うて、樂しみにしをるものを、うぬに取られてたまるものか、ソレ網を張れの、鳥おどし。』のと、滅多無性に煮え返るが、これもよく考へて見まするとと、鳥がものを言はいで仕合せぢや。自然鳥が物を言うて御覽うじ。そりやあちから理詰めしますぞ。

足納なぐさむこと、心をやること。京都の方言。

『エ、何ぢや。おれを盗人鳥ぢや。そりやお前どうした割合で言はしやるぞ。御前方の食ひものは、五穀から野菜まで十分に作つて食つて、まだその上に、おれらが樣な鳥や魚の命まで取つて食つて居らるれば、命を繋ぐに不自由はあるまい。おれらは又お前方と違うて、手足の揃はぬものなれば、農作をすることも叶はず。平生木の枝を住家として居るものなれば、このやうな木の枝に生つたものほどを、おれ等が爲の天の賜と足納して居るものを、それをお前等が我がものの顏に勝手次第にもぎ取らるゝは、おれらがものをお前等が反つて盗賊するのぢやないか。よー又その割でないにもせよ。此の柿の二つや三つせめておれらに呉れたとて、さのみお前方の食ひものゝ減るといふほどのこともあるまいに、扨もく〳〵お前等は、足ることを知らぬ胴欲な人達ぢや。チト恥を知らしやれ。エ、こゝな盗取人間めといふやらも知れませんが、自然鳥がその樣に理詰めごもして見たがよ

瞬欲　厭うことを知らぬこと、欲の深きこと。貪ること。

い。イヤハヤ左樣御尤ゞ、早々鳥に手を下げてあやまり證文でも書かにやならぬ次第ぢやが、烏はその樣な口も利かず、向ふの土藏の屋根へ逃げて、カア〳〵アホウ〳〵ゞ此方らを笑うて居るばかりで、マア〳〵お互に仕合で御座ります。

扨又骸に着るこゞでも、畜生は夏冬なしの毛衣一枚で、つひに前垂一つ宛てうといふ牛もないが、浴衣一枚着ようといふ馬もない。それにマア人間は、夏になれば帷子ぢやの、單衣ぢやの蚊帳ぢやの、莞莚ぢやの汗衫ぢやのと、暑さの凌ぎも十分する。冬になれば袷やら布子やら、夜は夜着やら蒲團やら、褥やら被卷やらで、寒さの凌ぎも十分する。そんならお互に暖に衣て居るといふものではあるまいか。

それから家居の結構は、尊い人は尊いやう、賤しい人は賤しいやう、分限相應の家造りして、まだその上に分限者は、亭ぢやの部屋ぢやの、數寄

分限者　富みたるもの、金持のこと。

亭　亭の字の唐音。園中又は丘陵などに立てる小さき家、あづまや。

部屋　奥の部屋などのこと。

數寄屋　茶の湯などをするための小さき庵。かこひ茶寮。

屋ぢやのと、滅多無性に建てひろげ、多くの天物を費して居りますが、それでも肝心な道といふものがないと、その中に顔をしかめて、時節が惡いの、世が末ぢやの、ヤレ家相ぢやの、人相ぢやの、それからそろ〳〵蠻が入り出すと、イヤ死靈ぢやの、活靈ぢやの、運ぢやの、肩ぢやの、星ぢやの、崇りぢやのゞ、己が愚痴を向ふへにらむ。眼ばかりギロ〳〵して、手足のかなはぬ中風病みか狂人を見るやうに、大飯食うてはシクリ〳〵ゞ泣いたり嚬んだりするばかり、何の役にも立たぬのみか、大きな世界の厄介ものぢやが、何とそれでは詰まらぬものぢやないか。

元來人はそのやうに大飯食うては、ハアスウ〳〵狼狽へに來た世界ぢやない。さう見ると、私が申す畜生よりは遙に劣ると申すのが、正眞掛直のない所ぢや。しかしこりやお前さん方のこゞぢやないぞえ。皆私が身の懺悔ぢや。さるによつて、人は只々人の道をあきらめて、その道を命限り根

限り勤め行ふより外、仕樣はない。

その又道とはどうしたことぞ。『性に率ふ之を道といふ』と、子思は中庸にお說きなされ、『道とは性に率ふのみ。』と朱子もいうて置かれまして、銘々我が生得の性のまゝ勤め行ふが道ぢや。去りながら、その性といふものを、元來マアどのやうなものゝも此のやうなものとも、皆目知らないでは率ふ道が知れぬから、それで當門では、先師石田先生や手島先生が、『先づ我が性を知れ。』の『本心を知れ。』のと、誰が賴みもせぬに、一向骨を折つて勤められたもので御座ります。

しかし、その又『性を知る。』の『本心を知る。』のと申すことが、何もその先生方の今更製作へて言まれたことでは御座りませぬ。己にそのことを孔子は、易に、『理を窮め、性を盡して、命に至る。』とも御說きなされ、孟子は、『その心を盡すものはその性を知る。その性を知れば則ち天を知る。』と

墾音はプン、モン、玉に裂けたる條あること。

肩ぢや　鳩翁道話に、肩のわるい夫婦とがいふことがある。關西の方言であらう。

子思中庸を作つた人、孔子の孫である。

性の善惡は孟子の說と告子の說と楊雄の說とは善惡混ずと韓退之の說とは、上中下の三品あると說く。その他、善惡なしと說くものや、いろ〳〵の說がある。

も說いて置かれました。

それにまた、その性の德を、『善なものぢや。』の、『イヤ惡なものぢや。』の、『イヤ善でもないが惡でもないものぢや。』の、『イヤ〳〵善惡は混じたものぢや。』のと、昔の漢土の學者衆が、銘々さま〴〵に性を論ぜられましたのも、畢竟その性といふものを、元來どのやうなものゝいふこと、自身に知つて居らいでは、率ふ道が分らぬから、そこでその通り色々に性の論をせられたので御座ります。

さすれば、此の性を知るといふことには、しつかりゝ昔から、その證據のあることで、何にも替つたことでも奇妙なことでもありやしませぬから、どうぞ誰殿も御志を御立てなされ、御銘々の性を知る御修行なさるが肝要ぢや。

しかし最前から、こんなことばかりいうて居るゝ、女中方や若い衆は、

何ぞ餘所のことか、他のことを聞くやうに思うて、滅多に、ふなり〳〵居眠りしたり、欠伸ばかりして御座るが、その欠伸もふなり〳〵も、やつぱり性の發用ぢや程に、大切な時日をうか〳〵せずと、こつくりと身に立復つて吟味して御らうじませ。頓阿法師の髑髏の贊に、

かへし見よ己が心は何物ぞ
色を見聲を聞くにつけても

サア何物ぞ〳〵。お前さん方も私も髑髏に違ひはないが、最前から此のやうにバチャ〳〵いうたり、バチャ〳〵聞いたり、をかしければ笑ひ、悲しければ泪を流し、天窓を掻いたり顔を撫でたり、此の髑髏の働らくは、元來マアどうであらう。色を見、聲を聞くに付けても、チト吟味して御らうじませ。

しかし又此のやうに、滅多に工夫の吟味のといふと、自然狼狽へた御方

頓阿法師。俗名は一階堂貞宗。有名な歌僧。兼好、淨辨、慶運と共に和歌の四天玉と稱せらる。元中元年寂す。八十四。

髑髏。しやれかうべ。人の死骸の雨風にさらされて骨となつたもの。

ごもには、オットよし〳〵心得だ。おれもこれから、その本心とやらいふものを、何でも一つ尋ね出さうと、家へ歸つて、土藏の二階や納戸の隅で、質に取られた阿呆を見るやうになつて、線香立てたり、手を組んだりして、あれであらうか、これであらうか。こゝか其所かと、滅多無性に思案分別をひねくり舞はす人があらうも知れぬが。そりや提燈點して、暗がりを見附けうと尋ねまはるやうなものゆゑ、百年かゝつて工夫なされても、迚も分りはしませぬから、御志の御座る御方は、當門へ御入りなされ、先師石田先生御工夫の、大學の致知格物の御手引に御由りなされませ。

しかし又かくいうても、世間には大悟徹底濟し顔の我慢菩薩もあるものゆゑ、さういふ人がこれを聞くと、『エ、何ぢや、心學の何が見るかの、何が聞くかの。イヤ大學の致知ぢやの格物ぢやのと、そりや何でもない知れたこと。そんな鈍い狹い修行が、何の役に立つものか。』と、自身の眼の狹

致知格物。五此說は十餘通あるが、朱子は我が知識をみがき究めて事物の道理に達するといふ義なり。格を至るとしたのだ。

大悟徹底。お悟りの極意を盡し顔付をすること。

いこゝには、さらりさつぱり氣が付かず。滅多無性に虚空なこゝや大きなことを言ひさへすれば、よいかゝ思うて、自心佛といふものは、そんな小さいものぢやない。天地萬物一體空、その空破れて直指を得る。

三界に須彌も四州も打ちこんで
喉にさへずぐつゝ呑みけり。

その眼から見る時は、天地と雖も蚤の卵、無量無邊の眞空佛などゝ、無性やたらに虚空を睨んで、何時の間にやら、足下の下駄と草履を穿きぢがへるやうなこゝしたり、天井の埃拂ふことばかり習うて、疊の上の掃除するすべさへ知らぬ人もあるものぢやが、そりや皆昔の智識高僧達が、此の世界の凡夫ごもは、かの色身の執着から、種々様々な夢を見て、魔はれて居るゆゑに、その眼を覺ましてやらうとて、都卒ぢやの、空寂ぢやの、イヤ八識ぢやの、九識ぢやのと、滅多やたらに放された空鐵砲の音に魂消て、

- 自身佛
- 即身是れ佛
- といふやうなもの、悟れば則ちこれ自身の佛身なるを知る。譬曲である。放下僧にあり。
- 三界、過去、現在、未來のこと。
- 色身、執着色身は外形身のこと、體のこと。欲望に執着すること。
- 都卒、六欲天中の一にして第四重の天なり。夜摩天の上に在りとの天に在るもの五欲の鏡に對して喜樂集多く、事集して遊樂す、故に喜樂集とも義譯ず。
- 八識、眼、耳、鼻、舌、身、意の六識に、阿賴識、末那識の二識を加へていふ。
- 九識、右の八識と末那識、阿賴耶識、菴摩羅識、をいふ。

生氣失うて居る人達ぢや。

失禮ながら此の御社中は、さういふ人の眞似を必ずなされますな。物を洗ふ水瓶には、水の垢がへばり付き、垢をおとす糠袋には、糠の粕が殘るこやらいふことも御座りますが、敎も丁度その通り、佛ごいへば佛に縛られ、悟りといへば悟りに迷うて、肝腎なおのれ〳〵の勤めにやならぬ孝弟忠信の道を餘所にしたり、大切な天命の家業職分をば捨て置いて、虚空を見詰めて死急ぎする狼狽へものが、折々は出かけるものゆゑ、それを昔の達磨大師も氣の毒に思はれたやら、『世塵を捨てゝ道を求めんと欲するものは、恰も兎角を求むるが如し。』というて、今日の世の勤の外に、別に道こいふものを尋ね求むるは、丁度有りもせぬ兎の角を尋ぬるやうなものぢやとて、大きな眼玉をむき出して戒めて置かれましたり、又孔子様も、『隱れたるを索め怪しきを行ふ、後世述ぶることあらん。吾は之を爲ず。』と警め

達磨大師前に出づ。

此の邊、賴杖翁が鳩翁よりも佛教に通じてゐる所が分るのである。

求隱云々中庸十一章にあり。

六根、耳、鼻、舌、身、意の六根をいふ。

六根の底が拔けて我意わがまゝの欲望がなくなつてしまふこと。

てお置きなされました。

それぢやによつて、當門の石田先生や、手島先生も、『そんな虛空を搜し歩け。』の、『大きなことを言ひ歩け。』の、『剛强うなれ。』の、『人に負けな。』のといふやうな、龐忽の敎はなさりませぬ。去らばと申して當門でも、かの小成に安んずるとか申すやうに、屈んでばかり居るがよいと申すわけでは御座りませぬ。隨分、德には進みもし、上達もせねばならぬことぢやが、上るというても、滅多に利口になつたり、發明になつたりすることでは御座りませぬ。唯々何にも知らぬ唯の親仁になりますのぢやから、まあ〳〵足下の近い所の低い修行から精出してするがよい。

さうすると何時の間にやら、正眞におれが〳〵の六根の底が拔けて、さても〳〵廣大なありがたい世界ぢやといふことが得心が出來ますゆゑ、此の孟子の飽食暖衣の御辭が眞實にありがたうなる。さうないと、なんぼ耳、

三千世界一大三千大千世界の略、廣漠たる一切世界の稱。

光明遍照云々如來の眞身より八萬四千の大なる光明を放ちて、その光明中に念佛の衆生を攝取して捨てたまはざるの謂なり。

法然上人、名は源空、童名を勢至丸といふ。

に此の御言葉を御聞きなされても、口に御讀みなされても、どうやら餘所のことのやうになつて、今一際身に染みませぬから、眞實に道に至ることが出來にくい。

それを一つ佛法のことでいうて見ますと、まづ日蓮宗では、此の世界の惣〳〵りを、『一天四海、皆歸妙法。』というてあつて、此の三千大世界は、皆妙法の中の活動ぢやというてあり、又念佛宗では、『光明遍照十方世界、念佛衆生、攝取不捨。』というてあつて、活きた阿彌陀の光明は、遍く十方世界を照して、お前さん方も私も、その御光明の中に攝ひ取つて、助けぬいて御座るけれど、こちらが彼の念佛の衆生といふ六根の底の拔けた眞實の信心といふものにならねば、その御光明を我から隔てるゆゑ、何時までも成佛することが出來ぬから、それで念佛の衆生だけを攝ひ取つて、捨て給はずというてある。その心を讀まれた法然上人の歌に、

崇德天皇の長承二年に生る。美作の人。淨土宗の開祖。建暦二年八十にて寂す。圓光大師。

吉田の兼好。法師。後醍醐天皇の時の人。頓阿、淨辨、慶運と共に和歌の四天王と稱せらる。

徒然學兼好法師の著。文章が非常によく出來て居て、後世長く愛讀せらる。

押領使。地方を領するもの。一郡一鄕位の所の領主なり。

土おほね。天根のこと。

月かげの到らぬ里はなけれども　ながむる人の心にぞすむ

さう見まするこ、お互に何れの道へ蹌み込んでも、只我が心を助かるより外に仕樣はない。心一つを助かつて見ると、彌陀の光明が即ち我が心、我が心が即ち彌陀の光明なるゆゑ、これを『入我我入、機法一體。』ともいへば、又『彌陀同體の悟りを得る。』ともいうて、その身そのままの活佛ぢや、又誰であらうとも、心さへ助かれば、形の上の助かつてあることは、どこ一つ助からぬ所なかりけり。たすかりぬいて居りまする。その助かつて居ることを、昔吉田の兼好法師は、徒然草といふ書の中へも書いて置かれました。それを一すお話し申しませうか、

まづその文言は、『筑紫に何がしといふ押領使なんどいふやうなるものゝありけるが、土おほねをよろづにいみじき藥なりとて、朝ごとに二つづつ燒きてたべけること、年久しくなりぬ。或時館のうちに人もなかりける隙を計りて、敵襲ひ來り、かの押領使を責め圍みけるに、館の中に兵二人出で來て、命を惜まず戰ひて、皆追ひかへしてけり。いと不思議に覺えて、『日頃ここにものし給ふとも見ぬ人々の戰ひし給ふは、如何なる人ぞ。』と問ひければ、『年頃たのみて朝な〳〵めしつる土おほねにてさふらふ。』といひて失せにけり。』ここれまでが兼好法師の作りまうけられた譬へ話しで、至極ありがたい意味のある話しで御座りますが、それから又その文の續きに、『深く信を致しぬれば、かかる德もありけるにこそ。』といふ示しの一句が添へて御座りますが、これが誠に此の一章の眼目になる至極大切な辭で御座ります。しかしながら、此の文言は、かやうに讀んだばかりでは、女中方や子供衆の耳へはチト入りにくいによつて、これを能く分るやうに、一と通り御話しに致しませう、

先づこの筑紫と申すは、九州九ケ國の惣名で御座ります。その九州は肥後であつたことか、肥前であつたことか、日向か大隅か、その所は聢と何所と申すことも知れませぬと見えますが、その所に、名も何こいふ人であつたやら、昔、押領使などいふやうなものが居られましたのぢや。此の押領使と申すは、昔、その土地を百石にもせよ二百石にもせよ、我が力で攻取つて、その所をわが領分にして、何不自由なう暮して居る人のことで御座りますが、この人が丁度マアさういふやうな安氣な暮しをして居る人であつた所、よつほど正直な人であつたと見えて、誰に聞かれたことぢややら、土大根というて、畠から引いて來たまゝの土の付いた大根を、二本づつ燒いて食へば、人の身に此の上もない結構な藥になるげなというて、毎朝々々、二本づつ燒いて食はれたことが、中々一年や二年のことではなかつたと見えますが、諺にいふ、『鰯の頭も信心から。』こか。或時不思議なこ

押領使 杖翁の說明は中々の要領を得て著るる。徒に此の草稿と詳しく說いてあるそれは卯花園漫錄を引ふて、昔物語に押領使といふことあり。これを大國の司にもつたるふ人やらに思ふなんが、左はなんこれはすを領ずるまでの儀。

にもあらず。唯一二郷を領するなり。末代の小城主又は地頭などいふ類なりを見るべし。

鰯の頭も信心から 毛吹草又は東海道名所記等にある。

とが御座りましたぢや。

そりやさうなれば、或日かの人の館の内には、家内を始めあまたの家來もみんな、何所ぞへ出て行かれたさうで、廣い館に彼の旦那殿がたつた一人留守番をして居らるゝ所、俄に八方より敵が起つて來て、彼の人の館を目がけ押よするけしきなれば、彼の人も是はと驚き、身覺悟して待たるゝ所、敵は難なく責入つて、彼の人を追つ取卷き「サア〳〵そなたの命を取るぞ。」と、前後一度に打つてかゝればかの人もこゝぞと思ひ、力ありだけ働いても見らるれど、何をいうても多勢に無勢、遂に敵に組伏せられ、已に命も危き所、不思議なるかな、館の内に黑裝束した大の男が、忽ち二人あらはれ出で、組ふせて居る敵を押しのけ、その中へ分け入つて彼の人を後に圍ひ、前に大勢の敵を引きうけ、我が身の斬らるゝ事も厭はず、命を捨てゝ彼の人を助けんと、必死になつて働きますゆゑ、敵もこれにはたま

りかね、蜘蛛の子を散らすやうに、八方へ逃げ散りましたぢや。

そこで彼の押領使は、不思議な命を二人の兵に助けられたものゆゑ、扨も〳〵とありがたがり、涙を流し手をついて、かの二人へいはれますは、

『私は只今は計らずも大勢の敵に圍まれ、已に命を取らるゝ所、不思議に御兩人御出で下され、御命をも惜みたまはず、私が身代りに御立ち下さらんと、御働き下されし御蔭によつて、不思議な命を助かりました。さすれば誠にお前樣方は、我が身の爲の命の親樣、有りがたう存じます。去りながら只今まで、つひに一度も此のあたりで御見受け申したことも御座らず、眞の見ず知らずの御方で御座るに、今度只今此の通り御銘々の御命にかへられて、私を御助けなされて下さるは、どうした譯で御座りますぞ。シテ又御名は何と申し、何處の御方で御座りますか』と丁寧に問はれたれば、かの二人の兵が、口を揃へて言ひますやう、『去れば我々兩人は、何も外の

ものでは御座りませぬ。御前樣が此の年頃頼みに思うて、毎朝々々燒いて御あがりなされます大根等で御座ります。」といふかと思うと、搔消すやうに失せて仕舞うたと申す話で御座りますが。こりや何と不思議な話ぢや御座りませぬか。

全體マア大根でも、その樣に信心して食ひましたら、さういふ命の危い時、出て働くで御座りませうか。いかに信心したというても、大根がその樣に出て働きはしさうもないもの、そんなら又兼好法師が徒然草に書いて置かれたは、どうした譯で御座りませう。ちと不審打つて御らうじませ。

しかしかく申すと、此の御席の皆樣が、さればどうも、合點が行かぬ。なんぼ信心の德とはいうても、大根が出て働いたとは、あんまり奇妙な怪しい話ぢやと思ひなさるに違はあるまいが、こりや何にも奇妙なことでも怪しいことでもありやしませぬのぢや。これは畢竟御前さん方や私等が、此

の頭のてつぺんから足の爪先まで、此の身此のまゝ、天の御光明にひつ包まれて助けられて居る譯を、どうぞ知らせてやりたいといふ、兼好法師の老婆親切から作りまうけられた、譬へ話で、何にも昔本眞にあつた事ではない事こ見えます。

なぜといふに、是が正眞にあつたことで、何ぞ証こした證據でもあることなら、先づ此の文の書さはじめに、筑紫の國に肥後なら肥後とか、薩摩なら薩摩こかの、何郡の何村に何尉何某といふ押領使があつてと、かうしつかりと書いてありさうなものぢやが、本眞にあつたこではない、眞の假の譬へばなしの證據には、只筑紫にというてあるばかりで、所を何所としつかりというてもなく、その上その人の名も、誰こきまつたこともないことゆゑ、只何某の押領使なんどいふ樣なるものこばかりいうてある。

さう見ると、その筑紫の國の押領使なんどいふやうなるものとは、全體まあ誰がことであらう。そりややつぱり、今日の御前さん方や私等がことぢや。

老婆親切思ひ過したる心ぞへ。親切すぎた心。老婆のくどくしい親切よりいふ。

かういうても疑い深い人は、ハテナそれはどうも合點が行かぬ。おれらが方へは、遂に一度もその樣に敵も攻寄せたこともないが、大根が出て働いたここなどは、夢に見たこともないと思ひなさらうが、それがやつぱり彼のうか〳〵のお蔭ぢや。そこでここに兼好法師が、『深く信を致しぬれば、かかる德もありけるにこそ。』こ深切に示しの辭を添へられました。

お前さん方でも私でも、深く身前へ立ちかへつて信心して見ますること、さういふやうな奇特は、時々刻々にあることで御座ります。その譯は、誰が身の上にも、朝から晩まで右のやうに、命を取りに來る敵が幾らあるやら知れませんが、その恐ろしい敵の中に、先づ一番の恐ろしい大敵といふものが、飢といふ敵ぢや。どんな御位の高い御歴々樣でも、又賤しい奴で

も、日には三度四度ほどづつ、此の飢といふ大敵が、サアそなたの命を取るぞと、何所からか攻寄すると、ごうやらお腹がヒヨコ〳〵して、何ぞ食物がほしうなる。それがもう敵の先手へ見えたのぢや。

それから段々時刻が移ると、後には息がせか〳〵したり、眼がちらついたりして、『おりやモウどうも堪らぬ。』といふやうになる。その段には、何ほ親切な親兄弟が側に居ても、また忠義の家來が幾人居つても、迚も加勢することも出來ねば、身代りに立つことも出來ぬゆゑ、丁度彼の押領使が廣い館にたつた一人すわつて居ると同じことで、何れ命を取られにやならぬ。誠に危い所ぢやけれど、さういふ難儀な危い所へ、忽ち姿を現はして身代りに立つものは何であらう。先づ米ぢやの、麥ぢやの、豆ぢやの、小豆ぢやのといふ五穀の類はいふに及ばす、その外の野菜もの、茄子ぢやの、胡瓜ぢやの、白瓜ぢやの、南京瓜ぢやの、冬になれば、胡蘿蔔ぢやの、牛蒡ぢやの、芋ぢまの、蕪ぢやのと、大根ばかりぢや御座りませぬぞえ。その時々のものが出て、おのれ〳〵が命を捨て、鼻の下の此の穴へ飛び込んで呉れればこそ、お前さん方も私等も、不思議な命を助けられ、かうして活きて居ますのぢや。

それに又アノ大根といふものは、漢土では人參といふこやら言ひますが、野菜物の惣大將、七五三の御料理も大根が出ねば調はぬけれども、さういふ廣大な德を備へたものなれど、身分をも高ぶらず、何國の浦でも澤山に出來るもので、世界の調法するものゆゑ、その一つの恩をあげて、一切の物の恩を知らさう爲の、兼好法師の作文と見えます。何とマアさう見ると有りがたいことぢや御座りませぬか。

それから又冬向は、鶴やら、雁やら、鴨やら、黄鷄やら、樣々の鳥が出て、人の爲に命を取られたり、又毎日々々海河から引きあげらるゝ數萬の

七五三の御料理　祝儀に用ふる料理のこと。婚禮等の時に用ふ。

魚でも考へて御覽じませ。誰が爲にあのやうに惜しい命を取らるゝぞ。あれがみんなお前さん方や私等が身代りに立ちますのぢや。さらばというてそれが皆その物その物のあたりまへゝも思はぬことぢやぞ。

天の物をお生みなさるに、誰が爲の彼か爲のといふ立て分けしてお生みなさるのではないけれど、大は小に養はれ、小は大に制せらるゝが自然の道理で、此の通り助けられて居ますのぢや。さう見まするゝお互に、此のたべ物ばかりの御恩でも、大抵ありがたいことぢやない。うか〳〵思ふと實に罰があたりますぞ。

扨又二番に押寄するかたきには、凍えるゝいふ敵もある。此の敵に出會うても、誰でも命を取られにやならぬが、その時は又、綿ぢやの、蠶ぢやの、毛織ぢやの、紙子ぢやのゝいふものが、どつこいやらぬと現れ出て、人の爲に命を捨て、その大敵を防いで呉れる。これをあの毎年出來る綿木に成つても考へて御らうじ。折角美しい白いものをふつさりゝ生らしたと思もやア、人に擇られ、又生らしたゝおもやア人に擇られて、皆お前さん方や私たちが骸へ來て着せて居る。實に、

世に着せて裸でくらす綿木かな

とやらで、主の綿木殿は野原に立つて裸の行、犢鼻褌一つも當てゝは居らぬ。又蠶などいふものは、人の着だけ一枚に、八萬四千何百とかの命を取らねば出來ぬとかいひますが、さう見るゝ、小袖一枚裏表、中の綿から絲からでは、何十萬の命を取るやら知れませんが。何とまあ不便なものでは御座りませぬか。別けてお若い女中などは、爰をよくお考へなさるがよい。

扨又三番目の敵といふは、雨露や雪霜に此の身軀を打たれたら、斃れ死でもせにやならぬ所、山に出來た松の木ぢやの、杉の木ぢやの、欅ぢやの、檜ぢやのといふ、さまゞの大木が人の爲に身を切られ、あのやうに柱に

小袖。小さい袖の衣物。又絹の綿の人の稱。

なつたり、鴨居になつたり、敷居になつたり、座板になつたりして、その大敵を追掛ひ、雨の降る日も風の夜も、此の通り樂々に寢起をさせて呉れますが、何ミマアありがたい事ぢや御座りませぬか。古歌に、

天地の中に生えたる草も木も
神の姿と見つつ恐れよ

さう眼を付けて見まするとアノ一本の柱でも、大抵有りがたいものぢやない。アノ柱が此の屋屋を持つて居て呉れませぬと、お前さん方や私等が、代り番手に擔いて居らにやならぬ。さうしたら大抵やかましい事ぢやあるまい。『ヤレコレ誰ぞ早く代りに來ぬか。おれはもう最前からかたいで居るから、此の骸が折れるやうなに、どれも〳〵氣の利かぬ奴等ぢや。』などと、常住小言だら〳〵で、嘸やかましいことであらうが、あの柱は小言も言はず、その上給金取らずの只で、アノまあ重いものを、年中かたいで居て呉れる。

しかしこりやあの柱ばかりの事ぢやないぞえ。一切萬物が只で人の爲に命を捨てる。どのやうな發明なお三どのでも、摺鉢へ味噌を入れて、握り拳で磨つて御覽うじ、二三遍も使うたら、手はないやうにならにやならぬ所、摺子木といふ親切ものが、そこへニョッと現れ出て、その身を削つて、お三どのの手を助ける。

昔、親鸞上人、越後國御修行の時、あるものが此の摺子木の繪を書いて、これへありがたい御示しをなされて下されと申したれば、その時、上人の歌に、

身を削り人をば救ふすりこ木の
此の味知れる人ぞ貴き

となされたといふことぢや。成程摺子木々々々といへば、何でもないもの

鴨居　前に註せり。

座板　板敷のこと。

親鸞上人　幼名は若松丸、後に改む。京都の人、九才の時、慈鎮の弟子となり、後學び法然に教を受け、綽空と號す。僧侶の妻帶を禁ず。肉食妻帶を患へ、自ら布教す。一二年。長寿弘寂十九年。向宗の開祖。

のやうに思ふけれど、これにも信を起して見ると、廣大な功德がある。

又クラ〳〵煮える茶釜の茶へ、手を突つ込んで汲んで御覽じ、忽ち手は燒腫して難儀をせにやならぬ所、柄杓さいふものが出て、熱湯の地獄へ落ちて、お三どの〻身代りする。また寢やうと思へば枕が助け、冬は夜着や蒲團やら、火燵やら火鉢やら、夏になれば蚊遣りやら蚊帳やら、雨が降れば傘が助け、路が惡るけりや足駄が助け、足袋やら草履やら、扇子やら手拭やら、鼻紙やら楊枝やら、鬢附やら元結やら、迚も一々言ひ盡されることでは御座りませんが、さうしますると、お前さん方も私も、此の世界にある程の物の命を取盡し、飲盡し、着盡しする筑紫の押領使なんぞいふやうなものに違はないが、何と有りがたいことぢや御座りませぬか。

心爲にあらざれば云々大學の語なり。

これがみんな前に申しかけた活きた阿彌陀の光明が、遍く十方世界を照して一切の物と形質を現はし、御助けなされて下さるのぢやが、是程お助けなされてあつても、第一の此の方の心一つが助からぬさ、『心爲にあらざれば、視れども見えず、聽けども聞えず、食へどもその味を知らず。』とやらで、やつぱり『何が濟まぬ。』の、『角が足らぬ。』の、『イヤ惡世界ぢや。』の、『苦の土ぢや。』のと、何から割出していふことか、狂氣を見るやうに、朝から晩まで顏を顰めて、苦しみ暮しをせにやならぬが、何さ殘念なものぢやないか。

ぞうぞ誰殿も御志を御立てなされ、當門へ御入りなされて、御銘々の本心を御知りなされ、正眞の信心者といふものにお成りなさるがよい。さうすると、それが誠念佛の衆生さいふものに成るのぢやゆゑ、さりもなほさず、彼の筑紫の押領使で、一切萬物が、皆こちの身代りして居るさいふことが聽りと知れる。しかもそれがみんな只ぢや。扨その只について、愛に面白い話がある。

或夏の頃、十四五歳の前髪の子が、桃の葉を藁で束ねて、或町を『桃の葉アエ、桃の葉アエ。』というて賣り歩き居つたら、向から又魚賣が魚籠へ魚を入れて、『鰯ヨウ鰯、たひ。』というて來かゝり、彼の桃の葉を見ていひますは、『コウその桃の葉は幾らか。』といひますと、桃の葉賣りが、『コリヤ一把が八文ぢや。』といひます。『ソリヤ滅相な高い桃の葉、四文に負けよ。』といひましたら、『イヤそれでは損が行く。』といひます。『ナニ損が行くものか。そりや大方何所ぞの桃の木の葉を只で取つて來たのであらうが。』といひましたら、桃の葉賣りがいひますは、『オ、此の桃の葉は、山の手へ行つて只で取つて來たのぢやが、さういはつしやれば、お前のそこに擔いで御座る鰯も只であらうが。』といひましたれば、魚賣りは大きに腹を立て、『ナニ此の鰯が只であるものか。コリヤ問屋から請けて來たのぢや。』といひますと、桃の葉賣りが言ひますは、『その問屋へは何所から持つて來た。』ソリヤ海から捕つて來たよ。』『その海へは金銀でも入れて捕つたのか。』といひましたら、『イイヤ只捕つたのぢや。』というたけな。何と面白い話ぢやないか。

此の鰯が何貫ぢやの、何百ぢやのといひますが、その何貫も何百文も、皆人間が捕つて助かるので、海や鰯は一文も取りやせぬ。眞の只ぢや。山も只、川も只、木も只、草も只、米も只、麥も只、牛も只、馬も只、只より安いものはないが、それから算用して見ると、どう見てもかう見ても、さしたる直うちもない癖に、滅法界に高直いものは人間ぢや。飽まで食ひ、嗟に衣て、まだその上に花見ぢやの月見ぢやの、イヤ亂舞ぢやの、茶の湯ぢやの、女中方は芝居ぢやの、淨瑠璃ぢやの、イヤ瑇瑁ぢやの、珊瑚珠ぢやのと、滅多矢鱈に相場は高ぶるが、その癖、その代呂物には、大分損物が多い。親に不孝したり、主人に不忠したり、夫婦喧嘩や、兄弟いさか

亂舞。能の演劇の間に舞ふもの。つぶともいふ。

ひなどいふやうな大きな疵は、忽ちに世間の眼にも立つものゆゑ、大抵は慎むが、唾をついたり、物に裏表したり、家業になまけたり、商賣に無理したり、又女中方は短氣にあつたり、氣儘をしたり、恪氣したり、頬ふくらしたりする位の小さい疵は、當分世間の眼にも立たぬものゆゑ、『マア此の位のことはよいわ。』で置くことが多いものぢやが、全體マアどういふ了簡ぢや。

『天の生ずる所、地の養ふ所、人より大なるはなし。』と孔子様も仰せられて、お前さん方も私も、世界萬物作り取りの押領使に違ひないから、此の上は御互に身分の相場をぐつと引下げ、『父母全うして之を生み、子全うして之を歸へす。』と孔子様の仰せられたやう、身も心も正しうして、前にいふやうな疵は改め、親へは孝、君へは忠、夫婦の間は和合し、兄弟の間は睦じく、その外世間の交りや家業の勤めにも、隨分疵のないやう、此の代呂物に念を入れるが肝要で御座ります。先づ一服上りませ。

此の邊の文章は緊張して且つ君子仁人の言として尊重するに足る所の文である。

代呂物こゝは矢張り心學のことを指す。

助けどころぢやない
助けるどころぢやないところである。

後席

扨前席にも段々御はなし申す通り、人は萬物の靈と申して、一切萬物の中の親玉、犬や猫とは違ひますから、一切のものゝ命を勝手次第に取りつくし、飲みつくし、食ひつくし、着つくし、まだその上に、眼には見つくし、耳には聞きつくし、鼻には嗅ぎつくし、口には言ひつくしする、實に自由づくし、結構づくしの押領使といふものゆゑ、丁度それだけ身の勤めも、萬物に勝れて、天の生々の心を受けつぎ、親へは孝、君へは忠、夫婦は和合し、兄弟は睦じましく、他人の交りには信實を以て交るの、五倫の勤めは言ふに及ばず、士は士の道を勤めて世界を助け、農人は農人の道を勤めて世界を助け、職人は職人、商人は商人、醫者は醫者、出家は出家

と、銘々それ〴〵の道を勤めて、此の世界を相互に助け合はねばならぬもので御座りますに、道を知らぬと、助けどころぢやない、前にも御話し申す通り、畜生よりは遙に劣つたものになつて、親へは不孝したり、主人へは不忠したり、夫婦喧嘩したり、兄弟喧嘩したり、唾をついたり、人を詐したり、種々様々の悪いことをして、大きに世界の妨げするから、そこで昔の聖人か、深くそれを御歎きなされ、『契をして司徒たらしむ。』というて、衆の人の中から人の道を明らめた契といふ人を擇び出して、世上の人へ人の道を教へる司徒といふ官をいひつけ、教ふるに人倫を以てすというて、先づ人の交りには、それ〴〵の次第のあることを御教へなされたと御座ります。

契。堯帝の臣にして賢人なり。

司徒。周代の教育を司る官の名なり。

その人倫とは、人の序を申すことで、平たくいへば、人の交りにそれぞれの次第のあることで御座ります。その又次第といふは、爰に一々いうてある。父子親あり、君臣義あり、夫婦別あり、長幼序あり、朋友信あり、といふ五ツぢや。此の先づ『父子親あり。』といふは、親子は固より血肉一體のものゆゑ、隨分親愛が厚うなければならぬといふことぢや。その親みといふは、たとへていへば、紙や手拭のやうなものを水に浸したやうなもので、その浸したものと水とが、ひつたりと浸みあうて、これを後から別々に引きわけうといふことは、どうしても出來ぬやうに、親は信實に子を可愛う思ひ、子はまた親御を信實に愛しう思ほして、親子相互に可愛いの心が行きあうて、一體になりきつて居る。これを父子親ありといひます。

曾參。孔子の弟子にて至つて孝行の人。亦學德勝れたる高弟なり。

昔、孔子の御弟子の曾參といふ人は、至つて親に孝行な人であつた所、或時山へ薪を樵りに行かれましたに、留主には母親が一人留主番して居らるゝ所。そこへ曾參の親しい朋友が來られたゆゑ、母親の心には、それをどうぞ饗應たく思はれたやら、我が子の曾參に、どうぞ早々歸つて來よか

勝手。臺所のことなるべし。

二十四孝。元の郭居業の作といふ。（山崎美成の説）

しさ、心の中に曾參のことを思ひつめ、勝手に立つて指を嚙んで居られたら、その心が山に居らるゝ曾參の胸へこたへて、頻りに胸さわぎがしますゆゑ、仕事をやめて内へ歸つて見られたら、もう朋友は歸られた跡であつたと申すことも御座りますが、常々親子が一體になりきつて居らるゝゆゑ、その通りのことであつたと申すこゝが、二十四孝の中にも出て居りますが、是が則ち父子親ありと申す所で、親子は全體、誰も此のやうになけらねばならぬものと見えます。その所を讀んだ古歌に、

雲井より芦間にかよふ聲すなり
子を思ふ鶴も思はるゝかな

扨又君臣義ありといふは、主從は元、他人こ他人の寄合ひゆゑ、相互に義理といふことを忘れてはならぬといふことぢや。

その義理こいふは、先づ主人たるものは、一たび人に我が身を主人と頼まれたるものなれば、いつまでもその義理を忘れず、その使はるゝ家來を我が子の如く可愛がつて、どうぞそのものゝ難儀のないやう、行末そのものゝ身の立つやうにと心を付けて使うてやる。それが主人たるものゝ義理といふものぢや。

昔、唐土の陶淵明といふ人は、我が子を修行のために別莊へ住まさせて自炊させて置かれた所、その年も追々寒空にもなつて來れば、さすが恩愛の悲しさ、我が子の自炊するを不便なことに思はれ、一人の小男を抱へてやられましたに、その時、子へいうてやられました書簡の文に、『汝旦夕の費、自給するこゝ難しと爲す。今此の力を遣りて薪水の勞を助く。亦人の子なり。善く之を遇すべし。』こ書いてやられましたけな。その心は、『そなたも此のごろは、朝夕の食ひものを自給にせらるゝは、嘸難儀にあらうから、今此の小男を一人抱へてやる程に、山に登つて薪を樵つたり、谷に下

陶淵明。支那六朝の宋の人。博學にして文を能くす。性菊を愛す。靖節先生と號す。元嘉四年卒す。年六十三才。

此の力。力とは勞働者のことにて、召使男のことである。

人の君としては云々　大學の語。

吉川惟足　江戸の和學者、京都に行き、卜部侍從に學ぶ。會津、紀州二侯最も崇敬を加ふ。元祿七年死す、年七十九才。吉川をしかはとよむ人もあるが、きつかはの方が正しい。

りて水を汲んだりすることは、此のものにいひ付けてさせられよ。しかし又此のものも親のためにはやづぱり可愛い子ぢや程に、その親の心には、丁度只今此の方が其方を不便に思ふやうに、不便に思ふに違ひはないから、その心根を思ひやり、隨分いたはつて、あいしらうて遣うてやれ。』と申すこと、ここで御座りますが、何ごとありがたい心入れでは御座りませぬか。是がまこの、『人の君としては仁に止る。』といふ所で、主人たるものゝ常の心とせねばならぬことで御座ります。その心をよんだ吉川惟足老人の歌に。

心せよ使ふも人の思ひ子ぞ
我が思ひ子に思ひくらべて

扨又家來たるものゝ心得は、先づその身が譜代のものならば、三代相恩というて、その身ばかりぢやないぞ。先祖代々君の祿を頂戴して、それで命を繋いで來て、その恩澤の中から、親も我が身も生れ出たものなれば、此の

三代相恩　親代々より主君の恩澤に預つて居ることをいふ。

譜代　敷代、君の家に仕ふる臣下、世臣。

人の臣としては敬に止まる　大學の語なり。

御恩の廣大さは、中々以て口に言ひつくさるゝやうなことではないゆゑ、天窓のてつぺんから足の爪先までといはうか、命までも我がものではない、丸で御主人のものなれば、たとひ天地はひつくりかへり、此の世は盡きてしまふとも、その恩義を私に易へうといふことは、どうしても出來ぬことゆゑ、君の爲には身命を擲ちて忠節を盡さねばならぬことは、固より當然のことなれど、たゞへ譜代の身でもなく、一季半季の奉公人にもせよ、一たび主人をわが主人と頼み、我が身を主人へ任せきつたものなれば、いつまでもその義理を忘れず、その主人を大切に親の如くに敬ひ、何をするにも御主人のためになるやう、どうぞ御主人の御心に違はぬやうにと、信實を盡して、不禮不奉公のないやうに慎む。これが『人の臣としては敬に止まる。』といふもので、家來たるものゝ義理といふものぢや。

慎じて此の世界は、義といふものゝたつた一つで、他人同士の寄合ひも、

親子のやうにひつたりと一體になるものゆゑ、爰に、君臣の間には、『義ありといふてある。

昔、八嶋の合戰に佐藤嗣信といふ人が、主人義經公の身がはりに立つたり、近くは四十七士の讐討など、皆平常が、義といふものゝたつた一つで、主從が一體になりきつて居たから出來たものぢや。その心をよんだ古歌に、

天津空曇りなきまで照る月の
うつれる水の影もにごらじ

扨又夫婦別ありといふは、夫婦も前にいふ主從と同じやうに、他人同士の寄合ひなれども、これは元、陰と陽とが寄合ふのぢやゆゑ、丁度水と火が寄合ふやうなものぢや。惣して水と火は、元來仲の惡いものゝやうに思ふけれど、アレハ仲の惡いのぢやない。仲の善過ぎるのぢや。なぜなれば、陰と陽とは裏と表で、元が一體のものゆゑ、一つ所へ寄合はすととんと一つになつて仕舞ふもの、その證據は、水と火を一つ所へ寄せて御覽じ、水の方の勢が强うて、火の方の勢がよわいと、その弱い方の火が形を消して、ヂユウンといふて水の方へ這入つて仕まひ、又火の方の勢で强うて、水の方が勢が弱いと、その弱い方の水が、又ヂユウンといふて、火の方へ這入つて仕まふ。もし又水の勢と火の勢が同じやうで、一つ所へ寄合つたら、その時はガラ〳〵バチ〳〵雷の鳴るやうに鳴つて、大抵やかましいことぢやない。

夫婦が丁度そのやうなもので、元來があんまり中の善過ぎるものゆゑ、何事にも互に心安だてをして、用捨遠慮といふものを仕ませぬから、銘々の言ひたいまゝをいうたり、仕たいまゝを仕合ふやうになつて、遂には夫婦喧嘩が出來たり、去るの居ぬのといふやうな、さまゞの物言ひ事が起る。そこで爰に、『夫婦の間には、『別あり。』というてあつて、別といふは、

佐藤嗣信。
佐藤忠信の兄。陸奥國屋島の人。能登守に役に敎經に射られて死す。

天津空の歌。
澄み切つた中天に輝いて照りたる月影を宿しるしの誠にあらは美しきかな。

行きかよふ。の歌。しづはた帯は、しづはたにて仕立てたる帯のこと。しづは古の織物の名で、織横糸を色どり染めて亂れたるあやを織り出せるものである。しづは倭文機と書く。此歌の意は、山田の水番や何かで見廻りしてある夜も晝も寸暇もなく山田に行き

夫婦の間はそれ〴〵の差別あるものぢやといふことで、先づ、男は男らしうして外の勤めを第一にし、女は女らしうして内の勤を第一にし、扨朝夕の身の取まはしから言葉遣ひまで、お互に心づかひ仕あうて、禮儀を正しう仕合はねばならぬものぢやといふことぢや。その心を讀んだ古歌に、

行きかよふ山田守る男ぞいとまなき
賤はた帯の解けし夜の間も

なる程、夫になれば夫だけの苦勞、女房になれば女房だけの苦勞、銘々それ〴〵の苦勞はあるものゆゑ、隨分夫は女房の心を思ひやつて勞はつてやり、又女房は夫の心を思ひやつて、なりたけ親切を盡さねばならぬもので御座りますが、そのうち前にも申すやうに、夫は火の樣なもの、女房は水の樣なものゆゑ、その水は隨分夫の火の勢に遣はれて行かねば、何事も成就しませぬものぢや。

通ふことをよんだのである。

大服。藥の包の大きいもの、分量の大いもの。

桂枝。熱帶地方に産する桂木の皮で藥用とするもの。その枝の皮を桂皮といふ。

茯苓。植物、黒松の根株の邊に日生し、拳の如き塊を爲す。藥用となる。

そりや日々の喰ひ物ごしらへでも考へて御覽じ、火を以て水の方を制しさへすれば、湯も湧く、茶も煮える。飯も焚かれる。菜も煮える。餅も搗かれる。酒の燗も出來るしで、ごのやうな御客でも出來るけれど、水の方から火を使はうとすると、何時でも火は消えてしまふから、何にも御料理は出來ぬ。それで、火鉢の火を仕舞ふか、炬燵の火を仕舞ふか、臺所や風呂場の火を仕舞ふか、何でも事の仕舞でなけりや、火の方へ水を持つては行かぬ。夫婦の間も丁度それと同じことで、夫の火に女房の水が遣はれてさへ居れば、世帶も立ち、家も榮え、家業も繁昌しますけれど、女房の水から、夫の火を使うて居ると、遂には家も世帶も皆御仕舞になつて仕舞ふ。大事なものぢや。それに就いて爰に御話が御座ります。

既にある所に小さな御醫者があつて、相當に藥取もあり居りましたが、そこの内儀が音に聞えた口利で、ある時御醫者が調合場へ出て、藥の調合し

て居らるゝを、かの内儀が勝手から覗いて見て、『モシその御藥は何所へ御遣りなさるのかえ。』と問はれますゆゑ、『是は裏町の權四どのゝ内儀の藥ぢや。』といはれましたれば、かの内儀のいはるゝには、『フ、あの權四の貧乏人、あれの嗅の藥なら、そのやうな大服になさるゝには及ぶまい。その上此のごろは桂枝が滅相高直ぢやないか。その高直い桂枝をマアそのやうに入れるといふことがあるものか。御前は全體何事にも見合せがなくてどうもならぬ。シテ甘艸もあまり多い。もちつと御減しなされいな。その代りには茯苓が此のごろ滅相不直いげな。あれを多分ご御入れなされ。』と、大きな聲して言はれましたれば、かの醫者も餘りのことゆゑ、何たる返答も得せずして、『アヽ誠に女子と小人とは養ひがたしぢや。』と、獨言のやうにいはれましたれば、

かの内儀の心には、その小人といふことを肴を食はぬ精進のことかご思ひ、養ふといふことを、糊口ことゝでも思はれたか、御醫者の顔をじつと白眼んで、鼻を吹いて言はれますは、『フ、お前はそんなに言はつしやらうが、私は元來女でも、精進することは大嫌ひ、一年三百五十餘日、肴がなくてはお飯も食はず、酒も飲まず、月に一度の親の日でも、精進したことは御座らぬ。その上お前は私が口を養ふやうに言はつしやるが、こちの内は今のやうに私が氣を配ればこそ、マア此の位で通られる。お前任せにして置いたら、私を養ふどころぢやない。お前の口から養ひがたしぢや。そんな出來し顔置いておくれ。それ又その藥も桂枝が多い。蜜柑の皮にな と替へなされ。』と、表に人の聞くも構はず、口の附いてあるに任せて、ベチヤリクチヤリ言はれますを、藥取の人が聞いて、内へ歸つて話しますゆゑ、一口二口ごその評判が高うなつて、

『アノお醫者は、御内儀がいつでも配劑せらるゝげな。それではどうも氣

女子と小人とは云々論語陽貨の篇にあり。

精進精力を集めて道に進むの義。

佛教の語。身を清め物忌なすること。轉じて膳部に野菜を用ふること。

糊口すぎ、世渡りのこと。

味が悪い。マアあの御醫者の御藥は飲まぬがよい。』といふやうに、何所が何所までもなりますゆゑ、いつとなくぐり〳〵と藥取がないやうになり、遂には身代お仕舞になつて、此の頃は何所へ行かれたことぢややら知れぬやうになりましたげな。さう見まするとと、實に女房は大事なものぢや程に女中方は爰の道理をとつくりと御合點なそれ、唯々にこ〳〵あい〳〵の勤を第一にして、御亭主の火を消さぬやうに御用心なさるがよい。

扨又『長幼序あり。』といふは、兄弟といふものは、身分に自ら前後のあるものゆゑ、假初にもその次第の亂れぬやうにせねばならぬといふことぢや。その次第といふは、兄は自ら前に生れて出たものゆゑ、上に立たねばならぬもの、弟は又後に生れて出たものゆゑ、下に附かねばならぬもの。ソコデ兄は上にあつて尊い、親のやうなものゆゑ、弟を我が子の樣に可愛かつて敎へ導いてやらねばならず。弟は又下にあつて位の卑い、子の樣なものゆゑ、我が兄をば親の樣に敬ひ愼んで、その下知に違はぬやうに勤め行はねばならぬものぢや。假令兄弟が幾人あらうとも、次第〳〵にその序の亂れぬやうにせねばならぬものぢやゆゑ、長幼は、『序あり。』というてある。その心をよんだ古歌に、

春毎に梅よりつぎて咲く花の
　木末あまたの折りふしぞなき

兄弟はその通りになけらねばならぬものぢやが、遠い田舍などでは、兎角さう行かぬが多い。親が死んでまだ五十日も立たぬ内に、はや兄弟は家督論なぐいふやうな事するもある。兄が、『おれは此の家の惣領ぢやから、此の家屋敷も株家督も、みんなおれが物ぢやから、おれが自由にするといふ。』と、弟はまたそれを聞いて、『どつこいおれも親の子ぢや。さう甘くはやらさぬ。』と、互に拳を握りあうて、欲の劍の鎬を削り、果は御上へまで御

鎬を削り
刀劍の刃の部に鎬といふものがある。切合ひの時は互に此の鎬を削りあふのでいふ。

兄弟等も天窓を云々　役人に頭をたゝかれること。

兄弟は他人の始め　老蘇族譜引にいふ、兄弟はその始め一人の身なり。悲いかなとあり。（鶴林玉露）

厄介を備へるやうなものもあるものぢやが、何とマア氣の毒なものぢやないか。

兄弟は形こそ別々にわかつてあつても、同胞というて、同じ血肉を分けた一體のものぢやゆゑ、親の骸でいうて見ると、右の手と左の手のやうなものぢや。それが僅の欲のために、兄弟いさかひなぐするといふは、丁度親の右の手と左の手が喧嘩して、骸を左右へ引裂くやうなものゆゑ、それをお上へ持つて出ると、そのマア不孝の罪ばかりも中々輕いことではないから、持つた財は御取上げになつて、御封印を付けられたり、喧嘩兩成敗に、兄弟等も天窓をピシヤリと御打撲なさる。

その時にやう〳〵眼が覺め、ア、詰らぬことをした。アノ樣なことをせねばよかつたの、ア、いふことを言はねばよかつたのと悔んだ所が、屁ひつた後の尻すぼめ、人柄の惡うなつたと世間の人が相手にせぬやうになつ

君子敬して失ふことなく云々　論語顏淵篇にあり。司馬牛が兄弟なきを憂へたる所にあり。

此の「兄弟は他人の始め」の議論はちとこゞつけである。俚諺にはかういふ反面の理を述べた者が、多いので、そこで俚諺の面白味があるのである。何もか

たばかりで、何の役にも立たぬのみか、大きな生涯の邪魔になることぢやが、それが畢竟人の道を知らぬから、かの諺にもいふ、『兄弟は他人の始め』なぞいふことを、得手に受違へるから起つたことぢや。此の兄弟を他人の始めといふことには、大分面白い譯のあることゝ見えます。

その譯といふは、始めとは首といふこゝろで、兄弟は他人の首、他人は兄弟の末ぢやといふこゝろで御座りませう。世界中に一向の他人といふものはないやうなものゆゑ、論語にも、『君子敬して失ふことなく、人と恭しうして禮あらば、四海の内皆兄弟なり。君子何ぞ兄弟なきことを憂へん。』と子夏も司馬牛へ言はれました。假令實の兄弟でも、道がなければ他人と同樣になり、亦道さへあれば、他人も兄弟と同じやうになるゆゑ、他人の交りはやつぱり兄弟の交りに倣うて、我より目上の人や、年の多い人は、我が兄のやうなものゆゑ、兄を敬ふ心を以て敬ひ、又我より目下の人や、

年の少い人は、わが弟のやうなものゆゑ、我が弟を愛する心を以て愛し導いてやらねばならぬものといふことで、兄弟をば他人の首ごいうたものごと見えます。それを兄弟はもう他人のうちぢやから、どうしてもよいものぢやといふことかと思ふゆゑ、遂、前のやうな大間違がおこる。そこで、人は只々本心知つて、天地と我と同根、萬物ご一體にして、その一體のうちに自ら貴賤尊卑の差別あることを、よく合點せにやなりませぬ。

惣體、世界は元が一體のものゆゑ、よく萬殊ごわかれて用をなすで御座ります。又萬殊と別れてあるものゆゑ、一體といふことをも知らにやならぬのぢや。

それを譬へていうて見ると、丁度此の骸のやうなものぢや。此の骸も、元は一體のものなれど、頭は上にあつて貴いもの、足は下に附いて賤しいもの、手にも自ら左右のかはりがあつたり、身にも腹ぢやの脊ぢやの、肩ぢやの腰ぢやのといふそれ〴〵の差別があるやうなものぢや。そこでこれを人倫のことに譬へていうて見ると、頭は上にあつて貴いものゆゑ、これは先づ主人や親や、夫や兄やのやうなもの、又手足は自ら下に附く賤しいものゆゑ、これは家來や子や、女房や弟の樣なものぢや。それで今日の五倫の交りも、丁度此の骸の働く通りにならねばならぬ。誰殿も此の骸の働くことに、ヨウまあ氣を附けて御覽じ、何時でも此の手足を遣ふには、此の天窓から先へ動いて致へる、それから手足がそれへ連れて、次第〴〵に働くものぢや。

先づ朝起きるにでも、頭が先へニョッと起上ると、それから手足が追々に附いて起きるし、また夜寢るにでも、頭が先へふなり〳〵仕だして、寢ようこすると、それから手足が助けて寢させ、繼いで自身達も銘々寢るが、その寢た間も、手は大切な頭のことを忘れはせぬこ見えて、折々天窓を見

うこぢつけて說く必要はあるまい。

萬殊と一體

いろいろに異つて居るがその本は一體から出たもの。

一體分身本は一つで二つに分れて働く義。

舞に行き、搔いたり摩でたり按つたり、さま〳〵に介抱する。是が誠に孝子が親に事ふる仕方といふものぢやが、何と親切な仕様ぢやないか。

また晝起きてうつかり坐つて居る時でも、何ぞ頭へ物が落ちかゝつて御覽じ、アッと思ふ間もないに、手が行つてチャッとさへる。これかこれ前にお話し申した、屋島の合戰に、佐藤嗣信が、能登殿の矢先に立つて、主人義經公の身代りに立つたと同じ道理で、一體分身の働きといふものぢやが、何と奇妙ぢやござりませぬか。

それから又かやうに坐つて居て、若しアノ棚の重箱でも下さにやならぬと思ふ時は、先づ頭が先へ棚の方をきつと見上げると、それから足がオッと心得て立ちあがり、天窓の向いた方へすらり〳〵と歩んで行くと、手がちやんと心得て、棚の重箱を取りにかゝるが、それでも自然手が届きかねると、足がやつぱり心得て、足先をつま立て、サア〳〵取りやれと、手の

そくふこと

そけること、手入れすること。これは療治することをいふ。

届かぬ所を助けてやる、おれが役前はモウ濟んだからというて、知らぬ顏をしても居らぬ。何と深切なものぢやないか。

それから又側まはりにある煙管か煙草入でも取らうと思ふ時、手がもうちつと届かぬわいと思ふ時は、何時でも足が心得て、いざりよつて手を助けてやる。その通り足の手を助けることは、日に幾度といふ限りがないゆゑ、手が又その御禮に足を助けてやることが、何程あるやら知れぬ。先づ痒ければ搔いてやつたり、痛ければ摩つてやつたり、冬向足袋を脫がしたり穿かしたりするも、手がしてやるし、垢切をそくうてやることを手がしてやる。また風呂へ這入る時も、湯の加減のあついぬるいは、先づ手が先へ入つて見て、『オットよし〳〵、これなればモウよからう、サア〳〵這入りやれ。』というて入れてやる。これが誠の和合の道といふものぢや。何と睦まじいことぢやないか。

それから又庭へでも下りて草履でも穿く時には、人の草履と穿きたがへぬやうには、天窓が先へ吟味してやり、また道を歩く時にも、此の道あの道といふことを、天窓が先へ見て教へると、足がその通り運んで行く。自然天窓がキョロ〳〵餘所見でもして油斷すると、ツイ足が水溜りへ踏んごんだり、馬の糞を蹴散らしたり、樣々の不調法が起る。そりや足の不調法とはいへど、やつぱり天窓の油斷から起ることぢや。

さるによつて、人も人の頭に立つ主人ぢやの、親ぢやの夫ぢやの兄ぢやのといふ御頭役のものは、よつほど物事に心遣ひせにやならぬ大事なものぢや。

して又此の手足といふものは、實に平生素直なもので、遂に一度も天窓の下知に背いたといふことがない。何時でも天窓の下知の通り動き働いて勤めて居る。これが又背いて御覽じませ。それこそ此のお江戸の御方の平常口癖のやうに言はつしやる『大變。』といふものぢや。なぜなれば、天窓があの棚の重箱こ向いた時、手が庭の草履を取らうとしたり、天窓が庭の草履と向いた時、足が棚の重箱の方へ往て御覽じ、そりや忽ち首と胴とを捻切らにやならぬから、これより上の大變こいふものはない。

人の交りも丁度その通り、子が親に背いたり、家來が主人に背いたり、女房が夫に背いたり、弟が兄に背いたり、下こして御上の下知に背いたりするは、皆世界の首と脚とを捻るのぢやゆゑ、これが誠の大變というものぢや。それで此のやうに大變〳〵と申すのぢや。

それぢやによつて、人は只我が本心を知り極め、萬殊にして一本、一本にして萬殊なる譯を能く合默せにやなりませぬ。さうないこ、一向の他人こさへいへば、何ぞ敵同士の犬か猫かのやうなものぢやこ思ふゆゑ、つい人を突倒しても金をしてやらう。人は轉けても倒れてものといふやうな恐

倒れてもの字は此のもの餘計のやうである。

芦間よりの歌　おのれのみやはの、反語である。即ち自分斗り獨り餌を求めあさり求めやうやうさいやは矢張友を呼んで餌をはせぬ呼ぶを延ばすのだとあるいふ意ばべていつたので、即ち延ばすといふのである。

ろしい氣が發る。そこで爰に朋友の間は、『信あり。』というてあつて世間他人の交りは、假初にも嘘いつぱりのないやう信實を以て交らねばならぬものぢやというてある。

愈じて世界の交りは、相互に力を盡して助け合はねばならぬ世界ゆゑ、人こいふ字を御覽じませ、相互にすがりあつて立つた文字ぢや。その心を讃んだ古歌に、

芦間より友よばふ聲のあはれなる
おのれのみやはあさる雁がね

賣人は買人の御蔭で助かり、買人は賣人の御蔭で助かり、貧乏人は金持の御蔭で助かり、金持は貧乏人の御蔭で助かり、道中の雲助は、毎日駕籠を舁いで、足の弱い旅人を助けるゆゑ、また足の弱い旅人は、駕籠に乘つて足の達者な雲助を助ける。旅籠屋は御客を助け、御客は旅籠屋を助け、按

木の實をば猿の歌　遺歌百人首にあり。それ仁者は云々論語雍也篇の語。

摩取りは足痛を助け、足痛は按摩取りを助ける。何と面白い世界ぢやないか。

木の實をば猿に食はせて猿にまた
此の身食はせて貰ふ猿引

さう見ると、此の世界はどうしても、我一人立たうといふことは出來ぬゆゑ、孔子樣も、『夫れ仁者は、己立たんと欲せば人を立つ。己達せんと欲せば人を達す。能く近く譬を取る。仁の方といふべきのみ。』と御弟子の子貢へ御示しなされました。

世の交りぱ何事も我が身の上を規矩にして、人の身の上を思ひやり、どうぞ人の爲になるやう、世界の爲になるやうにと、精出して、人を助けることをするがよい。さうさへすれば、いつの間にやら我もちやんと助かつて居る。

菩薩世界慈悲深い世界。

人を呪詛へば人をいのれば、いのられた人は病を受けて死んで仕舞ふが、その報いが來て自分も亦死ぬことになるとの意である。

理強きは云々可笑記にあり。

それを譬へていうて見ると、渡守のやうなもので、多くの人を向の岸へ渡す〳〵と思ふうちに、何時の間にやら我もちやんと渡つて居る。何こようしたものぢやないか。さういふありがたい菩薩世界へ生れながら、人を突倒しても金をしてやらうの、世界の妨して居ながら、我一人助からうのと思ふは、チト尾籠な譬ぢやけれど、結構な茶の湯の席へ呼ばれて、床には珍らしい古筆な掛物をかけ、爐には善い匂ひの薫物して、扨行儀正しう茶の手前でもある所で、大きな屁を放るやうなものゆゑ、後には誰も相手にするものはないやうになる。

それぢやによつて昔から諺にもいふ通り、『人を呪詛へば穴二つ。』で、人に損でもかける氣が起つたら、我が損することを思ふがよし。人を陷す氣が起つたら、我が身の陷つることを思ふがよい。『理のつよさは非の一倍とやら。』で、勝つた方が負けになり、負けた方が勝になる。そりや彼の若い衆が首引するのでも御覽じ、双方首へ綱をかけて、足こ足こを蹈張り合うて、互にウン〳〵引合ふ内に、勝つた方はいつでも仰向けにトンと倒れるが、負けた方はいつでもちやんと起つて居る。丁度世界があの通りなもので、昔から人を倒したものゝ、その身の立つた覺えなし、人を呪詛つたものゝ、その身の榮えた例しはない。

それぢやによつて、此の世界は、誰も命のあらんかぎり、只我が受け前の道を守り、何をするにも世界のため人のためにと、此の身を使ふより外しやうはない。もしその心を失うたら、形は人でも心は畜生ゆゑ、一向人に生れた所詮はないやうなもので御座りますが、銘々どもは實に恥かしいもので御座ります。それについて茲に感心な話が御座ります。

これは近頃大阪にあつた事で御座りますげなが、同所のある朋友が難波橋筋の、備後町邊を通り居られましたら、年の頃五十歳ばかりの乞食が、

折檻　戒めとらすこと。せめ打つこと。

十四五歳の乞食の子を囚へて、髻を取つて地に押付け、上に乗つて言ひますは、『おのれ爰な畜生め、おれが平常いふことを、おのれは何所へ聞きつたぞ。そのやうな根性では、何づれおれ等が首へまで綱をかける奴ぢやゆゑ、そのまゝには捨置かれぬ。』と、握り拳をふり上げて、嚴しく折檻致しますを、側にまた年の頃四十ばかりの女乞食が、丁度立つて見て居ながら言ひますは、『それ見よ常々爺さんのいはつしやること、性に入れて聞かぬから、今のやうな眼にあふのぢや。おりやモウ何にも言はぬぞよ。』といふばかりで、更に取りさへる氣色も見えませねば、彼の男も益々聲をふるはして、

『扨も〳〵憎い奴、どうしてやつたら腹が居よか。』とキャツ〳〵といふを耳にもかけず、蹈んづ蹴つつの目に合はせますゆゑ、往來の人もだん〳〵立ちどまり、丁度見て居りますうち、あまり嚴しく打据ゑますから、かの朋友も見るに忍びず、側へ寄つて言はれますは、『コレアヤア待て、そのやうに嚴しくするには、定めて何ぞ譯もあらうが、おれが挨拶してやるほどに、マア堪忍してやれ。』と言はれましたれば、かの乞食が申しますは、『イヤ御旦那、ありがたうは御座りますが、放つて置いて下さりませ。こんなものを生かして置いては、どうも夜の目も寢られませぬ。』というて泪をこぼし齒ぎしりして、益々痛める氣色ゆゑ、外の人も口々に、『夫れはさうであらうけれど、今日のところは我々が言葉に免じて赦してやれ。』といひましたれば、かの乞食は泪ながら土に手をつき、

『捨て置かれませぬ奴なれど、御旦那方がそのやうに御挨拶下さるゆゑ、先づ今日は赦してやりますが、扨も〳〵なさけない奴で御座ります。御聞きなされて下さりませ。最前此の奴が此の所で、美しい餅を十ばかり、出しては食ひ居ります。その餅は私が蹲々見覺えのある餅で御座りますゆゑ、

申合ひまして
合ひまして
といふべき
所であるが、中國邊の言葉であらう。

何所で貰うて來たのかと問ひましたれば、御堂前の北の辻に辻見世を出して御座る餅屋さんに貰うたと申します。『それは合點の行かぬこと、商賣になさるゝ餅を、その樣に澤山に乞食に下さる筈はないが、盜んで來たのぢやないか。』と根を推して問ひましても、貰うたに違ひないと申しますゆゑ、さりとは不審なことゝ存じ、あれなる噂とも申し合ひまし、ごうも安心が出來ませぬゆゑ、前刻御堂前へ參りまして、其所の樣子を伺ひますれば、餅屋さんの言はつしやるには、『さて〳〵油斷のならぬことぢや。さつきにチト用があつて此所を一寸明けた間に、遂餅を十ばかり盜まれた。これは定めて此のあたりをうろつきまはる乞食の子供であらうか。』と隣見世の婆樣と話合つて御座りました。それを聞く私の胸の中の口惜しさ。そりやこそおのれと此所へ歸り、いろ〳〵責めて問ひましたれば、やう〳〵盜んだことを白狀致しましたが何ごまあ御覽じませ。情ないこぢや御座りませぬか。私も只今こそかやうな乞食は致しますれど、元は遠國の小百姓、親の代から不仕合で、持高には離れます。村中へ雇はれて、その日〳〵を送りますうち、如何なる過去の因緣やら、夫婦ともに長のわづらひ、少しばかりの諸道具や、鍋釜までも賣り拂ひ、種々と養生いたしまして、命程は助かりましたが、御覽の通り夫婦とも、手足の弱い骸となり、何うすることも出來ませねば、村中の厄介になりますも氣の毒と、四五年前から國を出て、かやうなさもしい乞食となり、人樣の門に立つて、御餘りを貰ひますが、つひに人の物、塵一本、箸片々盜んだ覺えは御座りませぬ。その上、人と生れながら、盜みしてもよいものなら、此の樣な形をして、さもしい乞食は致しませぬ。極寒の冬も薦一枚、缺椀持つて門に立ち、悪い目や、ひもじい目の憂き艱難を致しますも、畢竟盜みをせまいが爲、それ故にアノ奴にも、明け暮れいうて聞かせますは、かやうに乞食になり下るも、好

巾着切・往來の人の懷中物を切り取るものスリのこと。
萬引・買ふさまをなして人目を掠めて、その寶物を盜むこと。
追放・刑罰の名。その土地を追拂はるゝこと。
遠島・刑罰の名、志摩、伊豆の七島、肥後の天草、佐渡、隱岐、壹岐などに流すもの。死罪よりも輕く、追放よりも重し。をんる、島流し。
命冥加・死ぬべかりし命が意外にも助かつたること。
志士仁人は・云々論語衛靈公篇の語。

んでなつたことでもなく、段々の不仕合が、積り〳〵てかくの仕合せ、天命の乞食なれば、只正直の乞食せよ。必ず他を羨やむな。形に乞食はすると、心に乞食はしてくれな。からだに薦は着るとても、心に薦を着てくれなと、常々いうて聞かせますに、それにマァあの奴めは、何所へ聞き居りましたやら、最前もその樣な大それたこと致しました。『三歳子の心が六十まで。』と、小さい時からあの樣な惡根性持ちましては、何れ後には巾着切、店替ぢやの、萬引ぢやのと、段々手が廻り出すゝ、つひには人樣の手にかゝり、打殺されるは知れたこと、よしそれまでには行かずとも、御公儀樣の御手にかゝり、追放ぢやの、遠島ぢやのこいふ、樣々の御厄介を備へる奴に違ひはないゆゑ、いつそそれまで活け置いて、人樣の手を借らうより、私が手にかけて殺して遣らうと存じましたが、あの樣にあなた樣方が仰せられて下さりますゆゑ、今日程は赦してやります。ア、命冥加な奴で御座ります。コレ〳〵おのれも爰へ手をついて御禮申せ。』『ア、有りがたう存じます。』と夫婦互に顏を見合せ、泪をホロ〳〵こぼしましたら、見て居るものも感心して、泪をこぼさぬものもなく、持合せの御錢なご出してやるものも御座りましたと申すことぢやが、何と感心なものもあるものぢやな。

形は見にくい乞食なれど、心は清い君子大人、からだには薦を着ても、心には錦を着て居る。是が即ち孔子の仰せられた、『志士仁人は、生を求めて以て仁を害することなし、身を殺して以て仁を成すことあり。』と申すもので、眞の大丈夫といふものぢやが、是についても銘々どもは、實に恥かしいことで御座ります。

形の上には、飽まで食ひ、暖に着て、まだその上に雨露にも打たれぬやう、銘々身分相應に結構な家造りして、その中に寢起をし、そのあひ間に

は、餅やら菓子やら酒やらで、樣々の氣炮じ、それが足らいで、花見ぢやの、遊山ぢやのと、榮耀の飽々して居ながら、それを有りがたい事とも思はず、あれが足らぬの、是が欲しいのと、年中不足たらぐ〳〵で、心の乞食をするといふは、何と淺ましい根性ぢや御座りませぬか。實に、『禽獸に近し。』と孟子の言はれましたも尤ぢや。

さういふ乞食根性ゆゑ、身の行もそれに似て、不忠不孝のことが出來たり、夫婦あらそひ、兄弟いさかひ、他人の交りは墜の突合ひ、家業を怠り、分限を忘れ、色に耽り、酒に溺れ、その尻の仕舞には、人を騙したり、いろ〳〵の欺謀などが發ることは、イヤハヤ鼻持のならぬ穢らはしいことで御座ります。ようマア罰の當らぬことぢや、道を知らしやつた聖人の清い御目から御覽じたら、いかさま御歎きなされた筈ぢや。そこで爰に、聖人之を憂ふることあつて、契をして司徒たらしめ、世界の人へまづ人倫の道から御敎へなされたと御座ります。

お互に本心知つて、此の身の外に道もなく、道の外に此の身のないことを會得し、只一筋に親には孝、君には忠、夫婦和合、兄弟むつまじく、他人の交りは信實を以て交るの五倫の勤めは、此の命の有らん限りは勤めぬかねばならぬことで御座ります。

しかしかやう申しても、私は只口ばかりで、ねから骸が利きませぬ、實にお恥かしいことで御座りますが、どうぞ又お前さん方も、耳ばかりにならぬやう御聞きなされて下さりませ。それが天地神明への御恩報じ、御代泰平の御恩報じと申すもので御座ります。扨相かはらぬ長話し、さぞ御退屈で御座りませう。先づ今日はこれ限り。

氣炮じ　氣放じと書くが正しい。氣保養に同じ。

遊山　山に遊ぶこと、轉じてすべての外出して遊ぶことにいふ。

やまど　山師、投機。確かなる目的なくして事業を企て、萬一を僥倖せんとするものゝこと。

心學道の話第五篇

前　席

『季路、鬼神に事へんことを問ふ。子曰く、未だ人に事ふること能はず、焉んぞよく鬼に事へん。敢て死を問ふ。曰く、未だ生を知らず、焉んぞ死を知らん。』

これは論語先進の編に出て居る章で、至極ありがたい御示し故、これを今日の御話の題に致します。まづ此の季路と申すは、孔子樣の御弟子の中でも、十哲と申して、十人選び擧げた、その中の一人で、子路と申す人のことで御座りますが、その子路がある時、先生の孔子樣へ大切なことを二つ問はれました。この二つの不審は、此の子路ばかりぢやない。誰が身の

・十哲　孔子の門人の中にすぐれたる十人のこと。顏淵、閔子騫、冉伯牛、仲弓、宰我、子貢、子有、季路、子夏、曾子の十人のこと。王應林の小學紺珠に出づ。しかし此の十哲などいふは俗說である。

上でも、常に詮議して置かねばならぬ大切なことで御座りますが、先づその一つが鬼神に事へんことを問ふと御座つて、すべて神樣を祭りますには、いかやうに致しましたら、その神樣の御心に叶ひますで御座りませうぞ。それを御示し下されといはれましたのぢや。

なぜなれば、誰であらうとも、人として神佛を祭らぬ人もなし。又拜まぬものもないものゆゑ、その神佛の御心にかなふやうには、どうするがよいといふことを、豫て知つて居らいでは、つまらぬものぢや御座りませぬか。宮寺へ參つても、柏手を打つたり、珠數をすつたりして、『トホカミエミタメ』の、『南無阿彌陀佛』の、『南無妙法蓮華經』のというて、滅多にハツア〳〵と咽をゐぐつて、天窓ばかり屈めたというても、向の神樣や佛樣が、『オ、〳〵それでよし〳〵。』と仰せられるやら、『イヤ〳〵それでは惡い。』と仰せられるやら、御心にかなうたやら適はぬやら、その御返答がわ

・柏手　拍手ともあつたのを讀みの違つて拍の字を柏の字と思つて、かしは手と讀み違つたからのことである。

・トホカミエミタメ　神道の人の神を拜む時の語。

からいでは、眞の片便宜ごいふものぢや。

よし又そのやうに神佛を拜みもせず、祭りもせずといふ人にもせよ、銘々家の内にかうして暮して居るからは、我が先祖や親の年忌弔ひをせぬ人はあるまいが、それもやつぱり同じことで、その先祖や親御の神靈が、『オ〳〵よしよし。』と仰せらるゝやら、『イヤ〳〵それでは濟まぬ』と仰せらるゝやら、御心に協ふやら協はぬやら、それが分らいでは、眞の闇の夜に遠眼鏡を見るやうなもので、分らぬこゝの大上ぢや。

しかしこれはかういうても、今時世間には幾らもある神子よせゝか、神おろしゝか、あんな怪しいことをしたり、又何處の爺樣に弘法大師が乘移つて、かういふ御告があつたげなの、其處の婆樣に山の稲荷が乘移つて、かういふこゝをいふげなのと、そんな埒もないことに肝魂を拔かれたり、金銀を費したりするやうな阿房なことをするのぢやないぞ。あんなことを

・神子よせ・神おろし、くちよせ、など皆同じことなり。

・神おろし・巫女が死人の靈魂を招きて、その意を巫女の口によりて言はしめしことゝ。くちよせ。いちこ。などいふ。

あてにして年中狼狽へまはる人も、世間には多いのぢやが、それがやつぱり、正眞の活きた神佛の御心が分らぬから、我が心を以て神佛を計るので、眞の當座の氣休めをするのぢや。

丁度或處の貧乏人の嬶が難產で、ウン〳〵うめき苦しみ廻はるを堪へがたく思うたか、頓に裏の井の側へ立つて、裸になつて水垢離を取り、讃岐の金毘羅樣を祈りましたげな。『南無象頭山金毘羅大權現樣、嬶が難產を助けたまへ。たとひ小兒の命はなくとも嬶が命を助けたまへ。その御禮には、此の寒中裸で日參致しませう。若又母子とも無事で身二つになりましたら、その御禮には金の鳥居を拵へて御神前へ建てませう。』と一心になつて祈る聲を障子の内から嬶が聞いて、これは怪しからぬことゝ思ひ、苦しい中からいひますは、『申し〳〵こちの人、如何に神樣が物を言はつしやらぬとて、そりやあんまりな立願ぢや。こゝから讃岐の金毘羅樣へは二百里餘りもあ

・讃岐の金毘羅・金毘羅は舊譯者の傳ふる音。新譯者は宮毘羅といへり。鰐魚又は威如王といふ。印度の神。我國にては讃岐國象頭山祀るもの最も名高し。

神は非禮云々。論語季氏泰山に旅するの朱註に出づ。

るといふに、寒中裸で日參がどうしてマア出來るものか。その上に又、朝食うて晩に食うあてもない貧乏なこの内から、金の鳥居がどうしてマア出來るもので御座らうぞ。』と顏を顰めて言ひましたら、カノ男が小さい聲で、『ハテサテそちは合點の惡い。おれが爰からかういうて金毘羅をだますうちには、早く產み居れ。』というたと申す話があるが、大體凡夫の境界は、マア其の位が多いものぢや。

これをかうして下さつたら何々を拵へて上げませうの、あれを叶へて下さつたらかういふことを致しませうのと、何ぞ神樣や佛樣を、御醫者か取揚婆の樣に思うて居る。何と憐れなものぢやないか。神は非禮を受けたまはず、そんな事でどうしてマア神の御心や佛の御心にかなふものか。さるによつて此の一條は、誰であらうと常に篤と詮議して置かねはならぬ大切なことぢやから、それで爰に孔子樣へ季路が。その一條を問はれましたのぢや。そこで孔子の御答に、『未だ人に事ふること能にず、焉んぞ能く鬼に事へん。』と仰せられた。

これはどういふ御心なれば、神佛といふものは、元來形のないものゆゑ、此の方に爲ることが善くても、善いとも仰せられず、又惡しくても惡しいとも仰せられず、御心にかなうたやら、かなはぬやら、その顏持の見えぬものゆゑ、その神佛の御心に叶ふやうにといふことは、そりや甚だむづかしいことぢやから、それよりはマア眼の前に姿かたちの現はれて、しつかり此の眼に見えてある人によく事ふるやうにするがよい。そのまた形の見えてある人の心にさへ善く叶ふやう事ふることの出來ぬものが、眼に見えぬ神佛の御心に叶ふやうにといふ事は、そりやどうしても出來ぬことぢやと仰せられたのぢや。

此の人と仰せられた御一言の中には、親もあれば主人もあれば、夫もあ

れば兄もあれば、凡て我より目上の人や年嵩な人はいふに及ばず、廣うい
へば、子も家來も女房も弟も、皆此の人といふ一字の中に籠つてあるこ
とぢやが、何と聖人の御言葉は廣大なものぢや御座りませぬか。シテ又そ
の人の心によく叶ふやうとは、どうするのなれば、何にも異つたことする
のぢやない。毎日〳〵此の道話の後で、拜讀ます御高札にある通りな事ず
るのぢや。その御高札は先づ始が、

一、親子兄弟夫婦を始め、諸親類に親しく、下人等に至るまで是を憐むべ
し、主人ある輩は、各その奉公に精を出すべきこと。それからその次が、

一、家業を專らにし、怠ることなく、萬事その分限に過ぐべからざること。
それから又その次が、

一、僞りをなし、又は無理をいひ、惣じて人の害になるべきことをすべか
らざること。

何こありがたい御示しぢやござりませぬか。これがみんな人の心に能く叶
ふやうな仕樣を、御示し下さるのぢや。何國へ往ても人は皆此の通りであ
りさへすれば、どんな人の心にも能く叶ふに違ひはない。その人の心によ
く叶うたのが、即ち活きた天道、神佛の御心に叶うたのぢや。

なぜなれば、人と神佛とは元來どこが違うてあるぞといふと、只此の我
といふ身軀のあるのと、身軀のないのと、現はれて眼に見えて居るのと、
現れずして眼に見えぬとの違ひばかりで、元のお性根に何も違うたことは
ないからぢや。

それに此の凡夫といふものは、人と神佛とは根本が違うた別々なもの樣
樣に思うて居るから、それで神樣拜み〳〵人をだまして、我が立身するや
うなこと考へたり、佛樣念じ〳〵人の妨げするやうなこと仕居る。

己に先年ある所に御法度の贋金銀を拵へた奴があつた所、己もさながら

御法度　法律で禁止して置くこと。

五千疋　昔の錢で、二十五文を一疋とする。二十五文は今の二十五錢に當る。

奉書　越前國丹生郡より産する紙で、肌滑か純白なり。

護摩堂　護摩を燒く堂。護摩は梵語、火の祭の義。眞言宗あたりで、ぬるでの木を燒きて佛に祈り、一切の惡事を燒滅すること。これを行ふを、護摩を燒くといふ。

六根清淨の祓　神道の祓の名。欲望を去つて心を清淨にする祓。

三界唯一心　云々十地論に出づ。欲界、色界、無色界

その罪が氣に掛つたやら、俄に近處の眞言寺へ往て、住持に逢ひて言ひますは、『私事諸々の惡事災難を遁れ、開運出世の出來ますやう、その上隨分長壽を致すやうな此の上もないありがたい御祈禱を成されて下され。御祈禱料は何程でも供へます。』といふから、住持は何氣なく請合ました所。その翌日金子五千疋とか、奉書の紙へ立派に包んで、御祈禱料として持つて來ましたげな。

そこで住持はその日より、その仕拵へして、護摩堂へ籠つて浴油の法とやらいふことを七日勤めて、札守など取揃へてやられた所。カノ男は大きに歡び、御札は床の柱へ張るやら、御守は肌へ掛けるやらであつたけながが、御祈禱がよつほど能く利いたと見えて。その夜の九つ頃には、ハヤ御公儀へ召捕られ、終には重い御成敗に逢ひましたけながが、その召捕られた時、近處の評判に、『あれは贋金の罪ぢやげな。』といふのを、かの寺の住持が聞いて大きに驚き、よもやとは思へども、アノ御祈禱料の金も、ごうやら一寸覺束ないものと、包みをあけて見られたれば、是もやつぱり渠が手細工の贋金であつたけながが、なんとマアとんだ痴漢もあるものぢやな。

どうなりかうなり嘘をついて、人の眼さへ眩まして置けば、神佛は御眼は見えぬものと思ふ了簡と見えるが、實に不便なものぢやないか。是等が皆人と神とを別々なものと思うて居るから起ることぢや。

さるによつて、人は只我が本心知つて、人と神佛と微塵も隔てのないことを、能く合點せにやならぬ。その又隔てのないことを、神道でいへば、六根清淨の祓の中にも、天照大神の御言葉に、『人は即ち天下の神物なり。須らく靜謐ることを掌るべし。心は則ち神明との本の主なり。心神を傷ましむることなかれ。』とも仰せられてあり。又佛法では、『三界唯一心、心外無別法、心佛及衆生、是三無差別。』とも說いて御座ります。どうぞ

を三界といふ。世界のあらゆる物象は、一と吾人の心性より起らざるものなく、一事一物皆この心性より出でざるをあらはせり。

五臟。神君。神君は心の神のこと、精神のこと。

山。山車ともいふ。いろ〳〵飾り物を拵へた車のこと。

誰殿も本心知つて、六根清淨の旨を明らめ、五臟の神君安寧にして、天地の神と同根、萬物の靈と同體なることを御會得なさりませ。

しかし此のやうにいうても、中に情の悍い人は、矢つ張り胸に閂入れて、イヤ〳〵それは大方昔のことであらう。今時こゝに此のやうにうろつき廻る人の心が、清淨な神佛の御心と一つものぢやというては、そりやどうも合點が行かぬと思ひなさらうが、神の心も人の心と同じもの〻證據には、アノヤア毎年〳〵の夏の大祭りの事でも考へて御らうじ。御當地はいふに及ばず、京でも大阪でも、その所の神々へ御馳走にというて、山ぢやの、鉾ぢやの、樂事ぢやのといふものを、町々から仕出したり、又種々の造り物や、通り物なぞ仕ますことぢやが、これがみんな、人も見て喜んだり、人も心の樂しむやうな事ほかしませぬ。その上何處の神の祭りであらうと、神事の第一には、神樂といふことがあつて、大勢の社人が寄つて、笛や太

鉾。鎗の屬にて、祭りに用ふるもの。

樂事。山車に同じ。

通り物。山車の類なり。

裸。かんなぎの服で、をみ衣の類。白布で、身二幅、袖一幅に作り、山藍にて水草蝶、鳥などの模樣を付け、袖を縫はず、紙捻に

鼓でピユウ〳〵ドン〳〵囃し立てると、白粉を顏へ鏝ぬりに仕たやうな女中が出て、裸を着て立つて舞ふ。それから又處によつては、舞樂のある宮もあれば、音樂ばかりある宮もあり、能のある祭りもあれば、馬を駈けさす祭りもあり、又遠い田舍の祭りなどでは、劍の舞ぢやの、長刀舞ぢやの、角力ぢやの、綱引ぢやのと、種々樣々な子供遊びのやうな事を、神慰には仕まることぢやが、それがみんな人も見て喜んだり、人も心の慰むやうなことばかりぢや。

そりや何ぜなれば、人の喜ぶのが即ち神の御歡びなさるの、人の樂しむのが即ち神の御樂しみなさるのぢやからぢや。それが又凡夫の思ふやうに、人の心と神佛の心が別々に異つたものなら、右の樣な御祭禮の時には、隨分人の嫌がるやうな事を考へ出しては仕出したり、人の忌々しがるやうなことを精出してせずばなるまいが、さうすると邊物や通りものでもする代

て括るもの。

●舞樂●雅樂を舞ふこと。雅樂とは唐樂や、高麗樂にて作つたものもある。又本邦にて作つたものもある。

●銅鑼●樂器の名。紫銅にて作り、皿の如くして、表面に疣あり。ばちにて打ちならすもの。佛家にて用ふ。

●鐃鉢●佛家の樂器、さはり（響銅）にて造りたるものにして、形は西洋のソツプ皿の如く、二枚打ち合せて撃をむるもの。

りには、何ぞ死人の石灰漬でも引きずりまはるか、三絃や太鼓で囃すかはりには、惣々が寄つて大聲あげて泣きでもせざなるまいが、そんな怪異な忌々しいことする御祭禮は、何處の神樣にもありはせぬ。

又佛法では、諸宗の寺院に佛事するのでも考へて御覽じ、銅鑼鐃鉢で囃し立てたり、御經へ曲節を付けて讀んで聞かせたり、又佛前の莊嚴もでも、人の見る方を專らにして飾り、供物の盛りやうでも、餅や菓子の甘さうに見える方は、皆人の方へ向けて見せ、佛樣の方へは、竹の串や藁苞の食はれもせぬ方が向けてある。あれを譯の分らぬ小理窟でもいふ人は、よくいふものぢや、『全體佛へこそ御馳走に供へるのぢやから、花も美しい方をあちらへ向け、餅や菓子の供物も、表の甘さうに見える方をあちらへ向けて供へさうなものぢや。』といふけれど、それが眞の譯の分らぬ理窟といふものぢや。

なぜなれば、そこへ參る人の眼を喜ばすのがやつぱり佛の眼を喜ばすの、人の心を樂しますのがやつぱり佛の心を樂しますのぢやといふ道理が分らぬからぢや。

それを今日のことに譬へていうて見ると、神佛は世界中の人の親で、人は又神佛の可愛い子ぢや。それでその親の心を喜ばさうと思へば、まづその子を精出して可愛がつて、饅頭の一つも食はしてやると、その親は自身には食はいでも、ホク〳〵いうて喜ぶのぢやが、それを親にばつかり饅頭食はせてその子には、何にも食はせず。側にまぢ〳〵見せて置いては、その親の心には、食ふ氣も飲む氣もするものぢやないやうなものぢやの。

それにまた中に狼狽へた若者などには、祭りの嬉しい紛ぎれに、大酒飲んでは醉狂したり、喧嘩したりするものぢやが、それ等は皆、大切な天下泰平、五穀成就の御祈禱の邪魔を仕居るのぢやから。そんなものは

髪置　昔、男女始めて三歳になつた時、頭に髪を長ぜしむる儀式。多くは陰暦の十一月十五日に行ふ。

袴着　昔、男の子、五歳になつた年の十一月十五日に初めて袴をはく祝のこと。

元服　始めて冠を被ること。男子十四五歳になれば、その祝を行ふ。

ツイ御上から抓んで御除けなさる。さう見ると、人は只々親に孝行、主人に忠義、夫婦は和合、兄弟は睦まじく、世間他人の交りは相互に信義を盡し合うて、世界和合を心懸ける外は御座りませぬ。

その上御若い御方などは、別して親御へ御孝行、これが誠に大切なことぢや。『一孝立つて衆善之に從ふ。』というて、親に孝行の志のあるものは、常に親御の御歡びなさることを歡び、親御の御安心なさることを願ふものゆゑ、何事をするにも、悪いことは出來ぬやうになります。

それで神道でも佛道でも、親御は現在の活神、活佛ぢやというてある。そりやその筈ぢや。御互にギャッと生れた初聲から、ソレ宮參りぢやの、食初ぢやの、髪置ぢやの、袴着ぢやの、ヤレ手習ぢやの、讀書ぢやの、元服ぢやの、嫁取ぢやの、それからそろ〳〵利口になると、詩ぢやの、歌ぢやの、俳諧ぢやのといふ、さま〴〵の遊び樂しみまで、一切母御の腹の中から湧いて出たやうなものぢや。

それにそれとは氣も付かず、只我が利口發明ですることこのやうに思ひ、まだその上のお負けには、おれはえらいの賢いのと、滅多無性に伸ばす鼻も、大きなことを言ひ散らす器用な口も手も足も、皆ひつくるめて親御から只貰うたものぢやないか。そんなら全體此の世界で何がありがたいの、かゞ勿體ないのこというても、親ほどありがたい勿體ないものはない。どうぞ御若い御方などは、こゝの道理をこつくりと御辨へなされ、隨分親御を大切になされますが肝要ぢや。

それから又それに倣うて、家來たるものゝ爲の活きた神佛は御主人、女房たるものゝ爲の活きた神佛は我が夫、弟たるものゝ爲の活きた神佛は我が兄、すべて下たるものゝ爲の活きた神佛は、御上を始めその附々の御役人、是等は皆自然にして我より眼上に現はれ給ふ活きた天命の御姿、大人

君子に三つの畏れあり云々論語季子篇にあり。大人には狎る同篇にあり。

といふものなれば、尤も人の大切に恐れ敬はねばならぬものゆゑ、それで孔子様も、『君子に三つの畏れあり、天命を畏れ、大人を畏れ、聖人の言を畏る。』と仰せられたが、道を知らぬ小人は活きた天命といふものを知らぬゆゑ、『大人には狎る。』と仰せられて、只我が友達か傍輩のやうに思うて居る。難儀なものぢや。

さるによつて當門では本心を知ることを御勸め申すのぢや。本心知ると此の活きた天命が知れるゆゑ、そのやうな心得違ひがないやうになる。その上前に申しあげた人と神佛と何にも異ひのないものといふ譯が、はつきりと分ります。

しかし又かう申すと、心學して本心知りさへすれば、それでもう此の身がぢきに神、ぢきに佛ぢやといふことかと思ひなさると、そりや又大きな間違ぢや。これは只その道理を御話し申すので、その御德や御位のことを

良知學ばずして知るもの、所謂心盡心篇孟子上にあり。又王陽明の唱ふる所なり。

摩訶般若は梵語、大勇、偉などの意。般若も梵語。智慧と譯す。

佛智佛陀の聖智をいふ。

申しますと、それは又格別なことで御座りますから、其所を御聞き違ひのないやう御願み申します。

さて又、その人と神佛は、元來隔てのないものと申す譯は、人は一切の物に勝れて、結構な智恵といふものを生得いて居りますゆゑ、その智恵のことを儒道では、本知ぢやの、大知ぢやの、良知ぢやのといひ、又佛法では、摩訶槃若ぢやの、佛智ぢやの、大圓鏡智ぢやの、妙觀察智ぢやのというてあつて、是が元來わが智恵では御座りませぬ。やつぱり活きた天道、神佛の智恵ぢやから、それで人と神佛とは何にも違うたものではないので御座ります。

しかし又此のやうに滅多に智恵〳〵と申すと、御前さん方は、何でも晝日中に人の眼を眩ますやうな賢いことしたり、鷺を烏にでも言ひくるめるやうな、恐ろしい利口なことかと思ひなさると、そりや又大きな間違ぢや。

大圓鏡智。四智の一。
大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智を四智といふ。
妙觀察智。四智の一なり。
天地はえぬけ生來、生粹（きつすぐる）などといふ意。

そのやうなを世間では智惠〳〵といひますけれど、それを佛法では小知ともいへば、儒道では私知ともいうて、正眞の智惠といふのではない。そりやその人々の此の身軀の氣の働く才といふものぢや。此の才こいふものこ智惠こいふものとは、天地雲泥の違ひのあることで、譬へていうて見ると、旦那と家來のやうなものぢや。智惠は天より受得たる本心の德ぢやから、是は旦那のやうなもの、又才は氣の德なりとあつて、これは此の身軀の氣の働く德ゆゑ、家來のやうなものぢや。

又人の家の內でも、家來といふものは、その家〳〵の大小によつて、家來の多勢ある家もあれば、又家來の少い家もあるけれど、旦那といふものは、たつた一人づゝ外ありやせぬ。

人の智惠と才とが丁度そのやうなもので、智惠は世界一面、人の生れ得た本心の德ぢやから、それは昔の人でも今の人でも、漢土の人でも天竺の人でも、男でも女でも異りはない。平等一枚、天地はえぬけの智惠ぢやけれど、才といふものは、その人々の此の身軀の氣の活く德ゆゑ、これにはさま〴〵の異りがある。

いつち最も、第一などいふこと、俗評。

その差別のいつちよくわかることは、あの芝居など見ることで考へて御覽じ、當る芝居どもぢやと、小屋の中の見物は所々方々から寄集つて居るこゝゆゑ、その中には色々の人があつて、氣の忙はしい才の利く人もあれば、又一向鈍な才の利かぬ人も居り、氣の落付いた才の遲い人も居れば、又落ちつかぬ才の走り過ぎた人も居り、派手なことを喜ぶ人も居れば、粹なことを好く人も居りして、その才氣には色々な異りがあるけれど、向ふの舞臺にする狂言の理道を知り分くる智惠に於て、何にも異りはない。向ふにあはれな悲しいことする時には、皆一統にア、哀れな悲しい事ぢやと知り、又憎く體な意地の惡い事する時には、エ、憎く體な意地の惡いこと

ぢやこ知る。

それを一つ皆さんの能く見覺えて御座ることでいうて見ると、アノ忠臣藏の芝居に、與一兵衛といふ百姓は、七十ばかりなよぼ〳〵した親仁ぢやが、それが娘を賣つた五十兩の金を懷中して、提燈とぼして、山路をとぼ〳〵通りかけると、後の稻叢の蔭から定九郎といふ惡者がニヨツと出かけ、『オイ〳〵親仁どの〳〵』と聲かけ、此の物騷な街道を老人の一人旅、殊に夜道は無用心な、おれが連れになつてやらう。』とかいうて、親切さうに側へ寄ると、與一兵衛は氣味惡るけに慄ひ〳〵、『コレハ〳〵ごなた樣か存じませぬが、御若いに御奇特な。私も年寄つて夜道は嫌で御座りますが、御聞きなされて下さりませ。私は此のあたりの小百姓、御年貢の金に詰り、ぎくともしやくとも動かれず、心當のある方へ才覺に參りましたが、サア何國の浦でも、ある〳〵ういうて無いものは金と化物、相談の付かぬ所に

五十兩の頃の物價は今の八十倍に見るといふ。本説によれば、日南のそれでは四千圓とは高過ぎるやうだ。芝居だから大げさに價をつけたのであらう。

長居はならず、すご〳〵只今歸る所。』と間に合ひを言うて居ると、定九郎は氣色を變へ、

『ヤイ親仁ごの、おれは此方が御年貢の金に詰つた御談義を聞きには來ぬ。ありやうは、こなたの懷に金ならマア四五十兩のかさ、縞の財布へ入れたのをおれが、此の黑い眼玉で見拔いて來たのぢや。サアその金玆へ投げ出して貸して下され。』と。取りにかゝると、與一兵衛は仰天し、逃げうにも逃げられず、只オイ〳〵と泣きながら、色々に佗言するを、定九郎は耳にもかけず、氷の樣な刀を拔いて、與一兵衛をなぶり殺にし、かの五十兩の金を取る所の狂言でも仕て御覽じ、こちらの見物が千人居らうが二千人居らうが、アノ定九郎を見て惡まぬものは只の一人もない。賢い人でも、鈍な人でも、善い人でも、惡い人でも、こちらの世話にもならぬ事に握り拳をしたり、齒を食ひしばつて、ア、憎い仕事ぢやと憎むに違ひはない。是を

かさ　嵩の字に當るのであらう、金がさのことであらう。

巾着切　すりのこと。前に出ず。

もし巾着切や盗賊どもが見たなら、オ、定九郎はよいことする。おれも丁度その通りと思ひさうなものなれど。中々さう思ふものでやない。これもやつぱり歯ぎしりして憎むに違ひは御座りませぬ。又與一兵衛がぶるぶる顫うて死ぬるを見ると、どんなものでも同じやうに不便がるに違ひはない。

又あの芝居に寺岡平右衛門といふ足軽が出て、家老大星出良之助の前へ手を突き、『千五百石御取りなさるあなた様でも、五兩に三人扶持の私めでも、繋ぎました命は一つ、御恩に高下は御座りませぬから、御草履をつかんでなりとも、御荷物をかついでなりとも、敵討の御供に召しつれられて下され。』と、忠義一徹に凝り固まつた狂言をして御覽じ、善き人は勿論、どんな悪い邪慳な人でも、『ア、あれでこそ誠の人ぢや。誰もア、こそありたい事。』と泪をこぼすに違ひはない。

五兩に三人扶持
一人扶持は一日に玄米四合乃至五合の割合であつた。

殊に孝子や忠臣の、貧窮に苦んだり、據ない義理にせまつて、我が子を我が手にかけるなどの辛い狂言どもするのを見ると、作つたことゝは知りながら、どんな人でも泪をこぼすが、サアその泪は何所から出るぞ。その悲しいは何所にあるのぞ。チト不審打つて御覽じませ。

しかし此のやうにいふと、『そりや知れたこと、その泪はおれが眼からおれが出したの。悲しいは向ふの役者が悲しうするのぢや。』と言ひなさるであらうか知らんが、おれが泪をおれが出すのなら、今でも眼をしぼつたら出さうなものぢやが、何程しぼつても出はしませぬ。そんなら向ふの役者が出すのか。向ふの役者が出すのなら、役者こそ眞實に泣きさうなものぢやけれど、役者は毎日のことぢやから、そのやうに泪はこぼさぬ。只泣く仕形をするばかりぢや。近頃聞きました狂歌に、

泣きはせで泣顔するを泣きながら

先師手島堵庵のこと。度々前に出て居る。

近思錄支那宋代の朱子の著なり。

沖漠無朕云々此の語は二程全書に在る。伊川の語である。沖漠は寂靜の貌、即ち色なく音なく靜かなるさまである。一說には深遠の貌ともいふ。

泣かぬ顏して芝居見る人

女中方や若い衆は、側の人に顏を見らるゝが恥しさに、泣かぬ顏はして見せても、『やつぱり泪がこぼれてならぬが、サアその悲しいは何所にあるのぞ。考へて御覽じませ。先師の歌に、

池水の底にも淸き影見えて
何れゝ分かぬ山吹の花

近思錄にも、程氏の語に、「沖漠無朕、萬象森然已に具はる。未だ應ぜざる、是れ先ならず、已に應ずる、是れ後ならず」といつてあつて、世界一面貫きわたつて居るたつた一つの本心の知惠の働き、さう見ると、人の知惠といふものは、平等一枚、たつた一つの主人公なれど、才といふものには、樣々の異りがある。

そりやその筈ぢや。この體が人々別々に異うて居るものゆゑ、氣も丁度それだけに異うて、氣の强い人もあれば、氣の弱い人もあり、氣の忙しい人もあれば、氣の緩うな人もあるから、そこでその氣の活らく才にも、又それ〴〵の異りがある。それが丁度、前にいふ大家小家によつて、家來の多い家もあれば、少い家も、あるやうなものぢや。それでマア大家でも小家でも、家來が多くても少くても、第一の旦那がしつかりして居つて、その家來を下知して遣うてさへ居れば、その家は言ひ分なく治まるやうなもので、才の多い人でも少い人でも、鈍な人でも賢い人でも、本心の智惠の旦那が明かで、才の家來を使うてさへ居れば、賢い人は賢いだけ、鈍な人は鈍ななりで、その身も修り家も齊ふけれど、才の家來が我が儘して、智惠の旦那を押込めるやうになると、そりや又どの樣に利口でも發明でも、その身を保つことも出來ず、家を齊ふることは出來ぬ。恐ろしいものぢや。

その證據は、昔の石川五右衞門でも、熊坂の長範でも、中々十人並のも

朕は獸の子で目がまだ開かなくて、只その縫みたいな形である。又微明を朕といふ。兆形である。

要するに……**原**……**兆**……**生**……**既**……**つ**……**ふ**……**る**……**の**……**は**……**で**……**ある**……

のではあるまい。必ず十人にも二十人にも勝れた才氣のものであつたらうが、己が才氣を頼みにして、智恵の旦那を押込んだばつかりで、末世末代の業さらし、又近くは由井正雪なぞ、あつたことか無いことか、その實は知りませぬが、慶安太平記とかいふ假名本を讀んで見ると、それは〳〵恐ろしい才のある賢いものと見えるけれど、肝腎な智恵の旦那を押込んだゆゑ、あんな阿房なことをして、後には女小供にまで笑はれるやうな淺間しいものに成つて仕舞うた。

「過ぎたるは猶及ばざるが如し」とやらで、人に勝れた賢いものが道を知らぬと、人に勝れた阿房なことを仕出すものぢや。さう見ると、道を知らぬ小人の賢いのや、利口なは、あんまり譽められたことではない、御法度の贋金銀をしたり、謀書謀判をしたり、人を騙局つたり、種々な欺謀巧むものに、まんざらな阿房といふものはない。大方利口な賢い奴か、その

石川五右衛門。豐臣秀吉の頃の大盗賊の名、秀吉の爲に釜うでにせられたといふ。

熊坂。熊坂長範。平安朝末承季の强盗。

安中年間、陸奥の金賣吉丸が牛若丸を伴ひて陸奥に下る。

次に殺さる。此の越後信濃の境なる熊坂といふ所に生れたりとも、又加賀の熊坂に生れたりとも。

由井正雪。四郎と稱す。駿河の丸橋忠弥と共に謀つて、慶安四年に、幕府の吏に責められて自殺す。

慶安太平記。由井正雪など

やうなこと仕居るものぢや。

それが前にもいふ通り、才の家來が我が儘して、智恵の旦那を押込めるので、實は小賢い大馬鹿といふものぢや。

その譯は、そのものも始めから、そのやうなことするを、惡いことと知らぬのではないのぢや。知恵の旦那は惡いことぢや惡いことぢやと知つて、止めるに違ひはないが、才の家來が罷り出でて、それはさうではあるけれども、止めてはこつちの勝手が惡い。そこを斯うして斯う曲げて、かういふ所は是で隱す。アアした所はあれで黑めると、己が才氣に遣はれて、つい本心の智恵を昧ます。

盗人が盗みするも、博徒が博奕を打つも、始めから善いことゝは思はぬ。あれもやつぱり惡いことぢや惡いことぢやと、思ひ〳〵仕居るのぢや。何と阿房なものぢやないか。

の亂を起したことを記した歴史小說なり。

●適ぎたるは猶及ばざる。が如し論語先進篇にあり。

●賢金銀貨を通用貨幣の如く偽造したるものゝこと。

●謀書欺かんが爲に他人の手跡に似せて書くこと、にせふで。

智惠あるこ思へる智惠にさへられて

あはれ誠の道をうしなふ

是等が皆小賢い大馬鹿ぢや。しかしこりや盗人や博奕打ちの事ばかりぢやないぞ、若い衆が茶屋遊びに往たり、若い女中が人目を忍んで、小暗いところへ這入りたがつたり、人の金で騙八百を言ひ歩いたり、人の手柄を已が手柄にして人に自慢したりするも、智惠を昧ます所に於ては皆同じ事ぢや。只此の首へ繩の縲つて居ると、かかつて居らぬこ・牢の内に居ると外に居るとの異ひばかりで、天道様の御目から御覽じると、牢の内に居る盗人や博奕打ちと同列同格ぢや。何とあはれなこごやないか。そんなこごでどうしてマア神や佛の御心に適ふもので御座りませうぞ。御互に小賢い大馬鹿をせぬやう、本心知つて、小馬鹿の大賢いこいふものにならねばならぬ。さるによつて神道でも儒道でも佛道でも、正眞の修行といふものは、

●謀判人を欺かんがために、他人の印形に似せて作る印。にせいん。

●さへられて塞へられること、防げられること。

只此の正眞の智惠こいふものを知つて、それを磨く修行するより外の用はないのぢや。

それは學問こさへいへば、何ぞ大相書物でも讀んで、滅多に小賢うなる事かこ思うて居る。それが大きな了簡違ひぢや。書物讀むのは小賢うなる爲ぢやない。智惠を磨いて、小馬鹿の大賢うなるのぢや。當門に本心を知るといふも、畢竟その爲の入用ぢや。本心知らぬと、正眞の智惠こいふものが知れぬゆゑ、磨かうというても磨きやうが知れぬ。丁度鏡研ぎが鏡を研がうこ思うても、マアその鏡をここへ取出して來ねば、研ぐことが出來ぬやうなものぢや。どうぞ誰殿も本心知つて、正眞の智惠といふものを御明めなさりませ。

しかし此の御社中も大勢のことぢやによつて、惡くすると一應本心の端を知つて、こうかかうか無我の所に少しばかり氣が付くと、それでモウ此

の修行に濟んだやうに思ふ御方もあるものぢやが、それは又言語道斷な大間違ぢや。左樣な心得の人に限つて、神といふものは無いものぢやの、佛こいふものは無いものぢやの、あれも無いの、是も無いのと、何時の間にやら、その無いこいふものをちやんこ拵へて、そこらあたりを擔ぎ歩き、口には我なし我なしと言ひながら、我意我慢の張臂したり、一體〳〵こいうては、事理體用を無差別にしたり、所詮世界の眼口の揃はぬことして、道ぢや〳〵こ言ひ歩く。

それは彼の鏡研ぎが、曇つた鏡を何所ぞから借りて來て、「此の鏡をマア見やしやれ。何と結構な鏡であらうが、此の鏡、此の鏡。」こ其處らあたりへ見せ歩くばつかりで、研がうこはチットモせず、反つて鏡へ疵を付けたり、埃を付けると同じことぢや。それに付いて此所に氣の毒な話がある。或男が禪學を爲候というて、そこらあたりの和尚達に、禪の大意を聞いたり、悟りの語など少々聞きはつつて、常に大きなことや高いことや珍らしさうに言ひ歩いて、座禪のやうなことなども精出して仕居りましたが、ある時その男がいひますは、「扨座禪こいふものは、結構なもので御座る、私は元來氣薄な生れつきで、人に會うては踞々物も得申さず、至つて無口なもので御座つたゆゑ、節季の借錢乞などへ出會ます事などは、誠に憂苦う思ひ居りましたが、近來座禪を致す御蔭で、大分胴が据りましたやら、そのやうな苦勞が一向ないやうになりまして、只今では借錢乞が幾人來ても、瓜絲の皮こも思ひませず、反つて多勢を相手に斷りいふのが、どうか心面白いやうになりました。あれを見ますれば、座禪の德は廣大なもので御座るといひましたが、何と氣の毒なものぢやないか。

そりや胴の据つたのぢやない。横着になつたのぢや。そのやうな曇つた鏡を振舞はすものを、佛法では、「邪見斷無の我が儘悟り。」ともいへば、「空

事理　事理とは事實と道理とこいふやうなここ。事は一切諸法の緣起の事實にして十界差別の有樣なり。理は理性にして、その緣起の本たる不變の理をいふ。即ち眞如常住の現體なり。

體用　本體と應用の體用こと。用は情に屬す。

禪　梵語、禪那の略。定、思惟修、靜慮と譯す。眞理を思惟し、念慮を安靜にして心を治する謂なり。

座禪　主として禪家にして行ふ法性成佛の工夫を凝すために坐して靜慮に入るをいふ。

節季　陰曆十二月の異稱。

見外道。」ともいひますけなが、自然こちらもそのやうにどもなつては居らぬか。それではやつぱり、古人の言はれた、「學は人の諫を禦ぎ、已が非を飾るに足る。」といふ天狗連中も同じことで、知らぬ方が遙か勝ぢや。

しかしさうはいふものの、それがやつぱり本心を自身は知つた積りぢやけれど、實は放心して居るので、正眞の智惠のまだ開けぬのぢや。さるによつて、此の修行はその樣な人の爲にする天狗の仲間にならぬやう、隨分篤實に修行せにやなりませぬ。古歌に、

恐ろしき鞍馬愛宕の天狗より
猶恐ろしき里の小天狗

成程あの天狗といふものは、繪に書いたのでも考へて御覽じ。先づ鼻の高いが高慢の相。それから眼の大きいのが、人の惡いことや人の越度を見出さう見出さうとする眼附、又口の大きいのが、人の惡いことを言ひ歩いたり、人の善いことや人の手柄は、言ひ消さう嚙み消さうとする口ぢや。その證據は、そのやうな天狗の前で人のことを譽めて御覽じ。忽ち眼を瞋らしたり、額へ青筋立てて、その談話をいひ消す。「何所の誰々は誠にえらい博識ぢや。」などいふと、「ナニあの男が何を知つて居るものか、いつ〳〵も何所其所でかういふことを言うたけな。」の、「アァしたこともあつた。」のと、その人の不調法を數へ立てて言ひ消したり、「また何所の誰々は珍らしい篤實な人ぢや。」といふと、「篤實にはあるけれど、全體何にも知らぬ男ぢや。」などと、遠慮もなく言ひ破る。誠に恐ろしい口ぢや。

そりや何故そのやうにいふのなれば、元來が人のことは世間へ惡く思はせて、おのればかり能く思はれうといふ意地きたない根性から、その樣な相を現はすのぢや。しかしこりや此の修行する人の事ばかりぢやないぞ。世間にも此のやうな天狗は幾らもあるものぢや。

●絲瓜の皮の何の役にも立たぬものにいふ。
●學は人の諫を禦ぎ云々この語何に智あるか。誤りにはあらざるか。
●天狗の山城や、鞍馬山に天狗が棲むといふよりのことなり。
●鞍馬愛宕の

何町の何右衛門は大分よい身上ぢや。」なさいふと、「身上はよいけれど思ひの外金がない。」と言ひ破つたり、「何屋の何兵衛は發明なものぢや。」といふと、「發明にはあるけれど、身上持の惡い男ぢや。」と嚙み消したりする。又女中方の事でいふと、「隣りのお源さんは能い客儀ぢや。」といふと、「客儀はよいが、風俗が冴えぬ。」と言ひ破つたり、「向ふのかみさんは珍らしい利發な人ぢや」といふと、「利發はあるけれど恐ろしい癇癪持ぢや。」と言ひ消したり、何でもそのやうに人のことは惡くいひ貶して、已ばかり高く住りたがるものゆゑ、そこで先づ脊中には羽が生えて、額には山に住む山伏といふ印の兜巾を戴き、手には羽團扇をも持つて居るが、根が智惠の足らぬ證據が、アノマア小さな羽團扇の羽風位に、山の木草まで靡かさうと思うて居るやうな我慢な者ゆゑ、それでアノ樣に鼻も高く、眼口も大きいが、その割合にしては耳が小さい。その筈ぢや。さういふものは、人の意見を

兜巾。布にて作り、山伏の頭に戴き、紐にて頤に結び付くるもの。その襲はの十二の因縁にかたどれるといふ。

一向聞き入れず、世の謗を耳にもかけぬから、それで耳が小さいのぢや。又顏の赤いのは、慙愧そのやうな形態するは、實に人の恥づべきことといふことを知らぬゆゑ、何時も恥はかきどほしぢやから、それで赤面して居るのぢや。

それから又爰に一つ不審なことは、脊中には羽も生えてあることゆゑ、モウ足裝束には及ばぬ筈ぢやに、それに天狗は何時見ても、股引脚絆の足裝束に、草鞋まで穿いて居るが、あれが又入用なことぢや。なぜなれば、常任人に勝つことばかり仕事にして居るものゆゑ、自然我よりえらいものが向ふへ出て來るといふと、その時は俄に脊中の羽をすぼめ、逸足出して逃げねばならぬから、それでいつでも足裝束が脫がれぬのぢやが、何とマア見苦しい姿ぢやないか。

是が誠の里の小天狗といふもので、何所の市中にもあちらこちらに散ら

かつてあるもののゆゑ、木葉天狗ともいへは、又高見を通るといふこゝで、山水天狗ともいふけな。

又昔から名の高い愛宕の山の太郎坊の、鞍馬の山の僧正坊の、私の國元の嚴島の三鬼坊のといふやうな天狗といふものは、是は又格別なものゝ見えて、昔から名は高いけれど、終にその姿形を見たものがない。その筈ぢや。アノ樣な大天狗には、右のやうなちつぽけな我意我慢の相はないものゆゑ、凡夫の眼にはチト見え難い。また偶々その姿を見たけなといふ婆、嚊達の話を聞けば、多くは子供が見たといふ話ぢやが。何にも異らぬ常の人ぢやけな　その内緋衣着た坊さんの姿が多いといふ。

至つて子供を可愛いがるもので、自然子供が遊びにども行くと、饅頭やつたり、餅を食はせたりして遊ばすけなが、あゝでは何時でも漢土を見せてやらうかの、天竺を見せてやらうかのというて、その子供の見たがる所を、望み次第に見せてやらつしやるけなが、その時には何時でも子供に、「そちが眼は兩で閉いで居れ。」というて眼を閉がし、脊中へ負うて、時の間に漢土や天竺を連れあるき、是はかう〳〵したこと、それはゞういふ譯といふことを、詳しく教へて下さるけなが、何と親切なものぢやな。

さう見るゝ此の大天狗といふものは、何にも恐怖いものぢやない。誠に智惠の明かな御大德ゝ見えるが、只々恐ろしいものは、里に住む小天狗ぢや。おのれが才氣に遣はれて、正眞の智惠を昧まして居るから、子供を相手に腕押ししたり、角力を取つたりして、子供に勝つては、おれはえらいゝらいと自慢し歩く。

それで鞍馬天狗の諺にも、「我慢高雄の嶺に住んで、人の爲には愛宕山、霞と棚引き、雲となつて、月は鞍馬の僧正が谷を響かし、嶺を動かし、嵐木枯し瀧の音、天狗だふしは夥しや。」と諷ひますが、何所へ出ても只その

鞍馬天狗の諺　鞍馬山にて花見のある日、牛若もその席に列せしが、客僧の狼藉するとて、人々歸りし跡に、獨り殘りて大天狗より兵法ッ傳授を受くることを作れるもの、

我慢高尾の天狗だふし嵐の音に俄にはあきの深山の如く夥しく起ることあり。

我慢心高ひかに天狗慢心特なれば性なり。

所が騒々動々、騒動さすばかりで、何の役にも立たぬと言はうか。大きに世界の防げになるもので御座ります。

それが何でぞいふと、只かの才といふものから私欲の霞が棚引いたり、身勝手な雲か起つて、本心の月の智恵を昧ますから起ることで御座ります。さるによつて、人は只我が本心知つて此の智恵を昧まさぬやう、恐れ慎まねばならぬことぢや。

智恵は前にも申す通り、心の徳ぢやによつて、ごのやうな愚智なもので も、親に孝行するはよい事。不孝をするは悪い事、主人に忠義をするは善い事、不忠をするは悪い事、御法度を守るは善い事、御法度を背くは悪い事、家業を怠るは悪い事、人に信實を盡すは善い事、嘘をついて人を誑すは悪い事、早起するは善い事、朝寢するは悪い事と知り分くるに違ひはない。それがそれ前にいふ本知といふもので、即ち活きた天道、神佛の智恵ぢやから、その智恵の主人公の命令に背かぬやう、善いことと知つたら、手前の勝手は少々悪からうと、そこを堪へてするがよし、又悪いことと知つたら、手前の勝手はよからうと、そこを堪へてせぬやうにすればよいけれど、そこへかの身勝手の私案めが出かけて、それはさうすれば善いけれども、さうばかりは行かぬものぢやの、これはかうすれば善いけれども、それではこつちの積りが違ふの、さうぢやけれどもの、かうぢやけれどものと、とかく此のけれどもめが出て、智恵の旦那殿をそそのかす。此のけれどもこ活く所が才といふものぢや。

此の才といふものは至つて浮足い恐ろしいもので、善い方へ遣ふとどのやうにも役に立つて、善くなるものぢやが、悪い方へ活くと、どのやうにも悪くなちうも知れぬ。恐ろしいものぢや。去るによつて御互に此のけれどもを、善い方に遣はにやならぬ。

それを一つ若い衆のことで、能く分るやうにいうて見ると、フト茶屋遊びにでも行きたう思ふ時、行きたいは行きたいけれども、爰は行くべきことでないこか、酒でも多分こ飲みたい時、飲みたいは飲みたいけれども、さう飲んではすまぬとか、夜は宵から寝たいけれども、さう我が儘に寝ては濟まぬは濟まぬとか、親御は無理をいはつしやるけれども、不孝をしては濟まぬことぢやとか、主人は眼が明かぬけれども、家來の道は盡さにやならぬとか、何でもその通りに、けれごもを善い方へ遣へば、それは前にもいふ通り、智惠の旦那の下知を受けて、才の家來が働くので、小馬鹿の大賢いといふものぢやから、漸々に身も保ち家も榮える結構なものなれども、「小知は菩提の妨げ。」こかいうて、多く小人は此のけれどもを惡い方へ外遣はぬものぢや。

茶屋遊びすることは、元來惡いこごぢやけれども、餘所の若い衆もする

世の中が二尺五寸になりにけり

惡いことを、世の中が狹くなつたといふこと。此の歌、鳩翁道話には、四尺五寸にとある。

ことぢやの、大酒飲むのは惡いけれども、已ばかりぢやない、人も飲むの、早起すればよいけれども、それでは體が續かぬの、孝行すればよいけれども、内の親仁のやうでは出來ぬの、忠義を盡せばよいけれども、此方の旦那は眼が明かぬのこいうて、兎角このけれごもを惡い方へ遣ふ。これがこれ才の家來が我が儘して、智惠の旦那を押込めるので、小賢い大馬鹿といふものゆゑ、後には何處へ行つても人が相手にせぬやうになる。その人の相手にせぬやうになるのが、即に天道神佛の御手の切れるのぢやから、終には自身の五尺の體の置所もないやうになつて、二尺五寸の手拭で頬被りでもせにや、廣い大道も歩行かれぬやうになる。何と不自由なものぢやないか。

世の中が二尺五寸になりにけり
五尺のからだ置きどころなし

さるによつて、人は只此の正眞の智惠といふものを明らめ、精出してこの

けれどもを善い方へ遣ふことぢや。近頃或人の自身を戒められた歌に、

けれどもと一足づつは蹈み止まれ
惜しい慾しいの世の渡り川

何につけても此の蹈留めが大事ぢや。是が即ち人に能く事ふる道で、やつぱり天道神佛に事ふる仕方で御座ります。それで孔子も、「未だ人に事ふること能はず、焉んぞ能く鬼に事へん。」と子路へ御示しなされました。扨前席が餘り長うなりました。先づ一服あがりませ。

論語先進篇の語。

後席

敢て死を問ふ。曰く、未だ生をしらず、焉んぞ死を知らん。

これが又人としては常に詮議して置かねばならぬ大事なことぢやゆゑ、前席に御話し申した御弟子の季路が、先生の孔子樣へ、また此の一條を問はれましたのぢや。先づ此の敢てとは、滅多にといふ意で、遠慮もなく問はるるといふことで御座ります。これは始に鬼神に事ふる道の廣大なることを御尋ね申して、その御示しを問はれた上に、又此の大切なことを問はるると申す心で御座ります。

扨「死を問ふ。」とは「ごういふことなれば、惣て人の死ぬるといふことはどうしたことで御座りますぞ。死んだら人はどうなるもので御座りますか、それを御示し下され。」といはれましたのぢや。これが又人としては、一日も早く詮議して置かねばならぬ大切なことぢや。何ぜなれば、タッタ昨日まで、大路を裸で、摑み喧嘩し歩き居つた男が、今朝朝飯の椀を持ちながら、ころりと逝つたり、夕まで賣りぢやの買ひぢやのというて、算盤カチくいはした男が、今日は藏の鍵を腰に付けながら、ころりと逝つたり、誠に脆い世界ゆゑ、何れ誰でも遲いか速いが、一度は死ぬるに違ひのない

●法然上人前に詳しく註せり。

世界なれば、その死ぬるといふことはどうしたもので、ごうなるものぢやといふことを、マア能う聢りと見極めて置かねばならぬ筈のものぢやが、世界に人も多いけれど、それを知らうと思ふ人は、昔から少いものと見えます。すでに法然上人の歌にも、

皆人の知り顔にして知らぬかな
必ず死ぬる習ひありとは

誰も賢さうな顔はして居れど、大方うか〳〵で仕舞ふが多い。しかし又此のやうに滅多に「死んだ先々。」というて聞かすこ、今時の愚痴な人は、「さればそのことで御座りますてや。私も死んだら極樂へ參られるで御座りませうか。」の「地獄へ墮ちはしますまいか。」の、「佛になれるであらうか。」の「鬼に責められはせまいか。」のこ、積年聞き込んだり見込んで置いた腹の中の塵塚から、いろ〳〵な塵芥を引きずり出して、泣いたり拜んだりはしまするが、その癖やつぱりその死んだ先を正實に知らうと思ふものは、頓こないものぢや。

さう見ると、昔から信實に道に疑を起す人は、誠に少いもので御座りますに、それに此の季路こいふ人は、信實に疑を起す人と見えて、死んだ先のことを孔子樣へ御尋ね申されました。そこで孔子の御示しに、「未だ生を知らず、焉んぞ死を知らん。」と御示しなされた。是が又廣大な意味のある有りがたい御示しで御座ります。

そりやどうなれば、死んだ後のことを知りたいこ思ふなら、マアそれよりは現在爰へ生れ出て、此の通りに生きて居る。この道理から知るがよい。今年四十になる人なら、四十一年前までは、此の世にはなかつたもの、今年五十になる人なら、五十一年前までは、さつぱり此の世に無かつたものぢやが、それがどうして此のやうに爰に生れて斯うして居るぞ。マア此の

道理から知るがよい。現在爰へ生れて出て、此の通りに活きて居る。此の理さへ知らずして、死んだ後を知らうといふことは、そりやどうしても出て來ぬことぢやと仰せられたのぢや。

こりやどういふ譯でかやうに御示しなされたものなれば、元この生死は一理のもので、晝と夜と、寢たと起きたを見るやうなものゆゑ、生れて來ると死んで逝くと、何も別々なものぢやないからぢや。それに此の凡夫小人といふものは、どうやら生れぬ前と死んだ後とは、大きに異うた別々なもののやうに思うたり、又生れて來る理と死んで逝く理を二つのやうに思うて居る。それが大きな了簡違ひぢや。

しかし此の迷ひは、かの佛法の教などでは、三世といふことを假りに立てて、生れぬ前を前世といひ、生れた此の世を現世といひ、死んだ後を來世というて、どうやらアノ空に懸つて御座る御日樣や、御月樣のやうなものでも、世界を異へて別々に御廻りなさる所が、三仕切りにでもなつてあるやうな仕法にして、愚痴無知を教へたものゆゑ、今時の爺さん達や婆さん達には、別して此の迷ひが深い。

しかしそれもみんな昔の佛や祖師方の可愛さ餘つての方便で、ごうぞ此の迷ひの凡夫を、迷ひぐるめになりとも、誠の道に依らしてやりたいといふ、信實から立てられたこゝではあるけれど、何をいうてもこちらの御性根があんまり昧んで居るものぢやから、只その譬や名目ばかりに執着いて、反つて迷ひに迷を重ねる、それが誠の苦しみの中に苦しみを重ね、夢の中に夢を見るこいふものぢや。

ごうぞ誰殿も本心知つて、此の生死は元來一理のもので、本分にはとんとないこゝぢやといふことを、御明らめなさるがよい。さうすると、第一此の死ぬるといふことの苦勞がないやうになつて、大分樂になることで御

此のあたり、生死一理を說いた所は、矢張り哲理に通じ本源を見極めた人の言であつて、流石に道學者の價値がある。

朝に道を聞いて云々　論語里仁篇の語。

座ります。孔子様も、「朝に道を聞いて、夕に死すとも可なり。」と仰せられて、本心知つて活きた道といふものが知れると、朝の夕のといふ差別はない。その儘其所で死すことも可なりぢや。

しかし此のやうにいうても、知らぬ御方は、それでも現在此の體が生れて出たに違ひもなし、又死ぬるにも違ひはないが、それに生死のないといふは、どうも合點の行かぬことぢやと思ひなさるで御座らうが、それが正眞の本心の道が知れぬから、只此の體ばかりの上で算用して御座るのぢや。しかし又その體も、迚ものことに算序に今一段詳しう算用して御らうじればよいのぢや。それで只今私が御前さん方の惣名代に、爰で一つ算用して御眼に掛けやう。

先づ儒迚でいへば、お互の此の體といふものは、元此の天の虛空の中に、陰陽五行の氣というて、冷いと暖いとの二つの氣の中に、自ら木と火と土と金と水との五つの氣が具つてあるゆゑ、その五つの氣を假りにかう結んだのが此の體ぢや。それで佛法では、此の形のある間を「假りの世〳〵。」といひます。常に爺さん達や婆さん達の能く言はしやることぢや。「アア此の世は纔の假りの世で御座る。」と、「何を假りの世か。」と問ふと、「何か知らんが、ツイまあ假りの世ぢや。」というて居るが、何を假りの世ぞといふと、此の天の空氣を假りの世ぢや。

それを委しう算用して見ると、先づ此の體の暖いのが天の火の氣を假りて居るの。血ぢやの唾ぢやの、汗ぢやの泪ぢやのといふものが、天の水の氣を假りて居るの、筋ぢやの骨ぢやの、爪ぢやの齒ぢやのといふものが、天の金の氣を假りて居るの。髮ぢやの鬚ぢやのといふものが、天の木の氣を假りて居るの、肉ぢやの皮ぢやの臟腑ぢやのといふものが、天の土の氣を假りて居るので、悉皆是の天の氣を假りの此の身。又佛法でいうて見る

空氣　此の頃已に空氣の字を用ゐたるを見るべし。

地水火風空　佛教にて之を五大といふ。

卒都婆　佛舍利を安置する所なるが故に、或は佛舍利處ともいひ、また靈廟ともいふ。我が國には、寄家に五層の塔婆を設けて之を大日世尊

の標識なりとし、一般に之を五輪の塔と呼び佛塔を以て塔を示す語として至れり。

眞言宗。眞言宗とは眞言説の謂にして、大日如來三密中の語密に屬す。眞言宗は佛滅後七百年の後、龍猛菩薩、南天の鐵塔を開き、金剛薩埵に遇うて親しく之を受けられた

と、地水火風空の五つを假りの此の身ぢや。それであの卒都婆といふものでも御覽じませ。木を以て五輪の形を刻んで、それへ地水火風空といふ五文字を書いて見せてある。

又眞言宗なごでは、天竺の文字を以て、表の方へは𑖀𑖽𑖨𑖿𑖮𑖼としろし、即にその裏へ𑖀といふ文字を書いて見せてあるが、アノ𑖀といふ文字の形は、人が裸で兩手を合はして、向ふへズット突き伸ばして立つて居るのを、左の脇から眺める文字で、あれが天竺では人の此の體ぢやげな。そこで平常此のおれが體々ご思うて居るものが、そのまま天の𑖀𑖽𑖨𑖿𑖮𑖼の空氣で、天の𑖀𑖽𑖨𑖿𑖮𑖼の空氣がそのまま此の𑖀といふ體ぢやといふことを知らさうためのアノ卒都婆ぢや。

それで經にも、一見卒都婆、永離三惡道というて、一たび卒都婆を見れば、永く三惡道の苦しみを離るるこあるが、成程此の身が此の儘天の空な

るに始まる。我が國にては、弘法大師に始まる。

一見卒都婆。云々。謠曲卒都婆小町。知章一にあり、見卒都婆、永離三惡道、何況造立者、必生安樂國。といふ。

秘密佛教にては、卒都婆を大日如來の象徴、即ち標幟(三摩耶形)として之を尊重し、一

ることをよく得心したならば、餓鬼道、修羅道、畜生道の三惡道の苦しみは離れさうなものぢやないか。

さて又その天と我ご空と此の身と、少しの隔てのないことを、物に譬へていうて見ると、丁度アノ氷と水とを見るやうなものぢや。水のツイ凝つたばかりで氷と名も替はり、姿も替はるけれご、その氷もやづぱり水に違ひはない。それでその氷が融けたというても、やつぱり水ぢや。氷の上にこそ假りに結ぶの融けるのといふことはあれ。元の水に何にも結ぶの融けるのといふことはない。

人が丁度そのやうなもので、生れるの死ぬるのといふことは、畢竟只此の形質の遷り易はる所から、假りに名を付けていふことなれば、元の本性に何にも生れるの死ぬるのといふことはない。生滅ともに不生不滅のものなるゆゑ、佛法では般若心經にも、不生不滅不增不減ごも說いてあり、

たび之を拜む時は、罪過消滅して、永く地獄、餓鬼、畜生の三惡道に生を受けて苦むことを免るれば、まして卒都婆を造立せんものは、その功德により、安樂淨土に生れんと疑なしと說けるよりいふ。

般若心經般若波羅密多心經のこと。

唐の玄奘の譯なり。

又孔子樣は、仁者は壽しとも仰せられた。

そこでその又形質の遷り易はりの迅いことといふものは、此の瞬きする間も住まるものではない。そりやその筈ぢや。今いふ此の天理の流行に、須臾も住まるといふことがないゆゑ、それにつれて此の世界の一切萬物が時々刻々に流れ通すのぢや。それがそれ前にいふ天と我と空と此の身と、何にも別々のものでないからのことぢや。

孔子樣も川の上に御立ちなされて、水の流を御覽なされ、「逝くものは斯の如きか、晝夜を舍めず。」と仰せられて、此の世界へ現れ出たものは、何であらうと彼の佛法でいふ時は、生老病死の四苦を遁るるものはないぢや。

それを一つの此の着て居る着物のことでいうて見ると、先づ此の衣服の出來た所が生といふもので、衣服の生れたの。それから追々古びて行く所が老といふもので、衣服の年の寄るの。それから裾が切れたり、肩が破れたりする所が病といふもので、衣服の御病氣ぢや。それをお三どのが幾度も洗濯して、補綴あてたり針で刺したり、いろ〳〵と療治をし居るが、終には養生相叶はずで、襤褸になつて仕舞ふと、コリヤごうも仕樣がないというて、襤褸葛籠の中へ突込む。それが即ち死といふもので、衣服の死んだのぢや。

仁者は壽し論語雍也篇の語。

逝者は斯の如きか。晝夜を舍めず論語子罕篇にあり。

補綴つぎ切れをあてること。

しかしこれは衣服の境界から言へば死んだのぢやが、襤褸からいへば生れたのぢや。是でこれ生死は元來一理のものなることを御合點なさるがよい。弓を射る矢が空を走るを、矢の後からいへば、向ふへ過ぎて行き居るゆゑ、死ぬるといはにやならぬ樣なものぢやが、的の方からいへば、その方へ來居るゆゑ、生れるといはにやならぬ。往くと來るとが、二つでもないが、生れると死ぬるとが別なものではないのぢや。それで爰に孔子樣が御弟子の季路への御しめしに、「未だ生を知らず、焉んで死を知らん。」と

いつか又の歌

片糸のといふかけてあるふに出時一のかもの糸にてをよるつり合片詞で糸せ一方だらのいであつたるるに難いるかと又世は何ふのてもいとけいと世のなくに意だ。うたい首の世くの区別埋れて暮らす出は再び夜れて暮

ことが悲しいとの意である。

御しめしなされた。

扨それから右の襤褸が襤褸葛籠へ入れられて、土蔵の隅へ押込まれ、襦袢の破れやら帯のちぎれやら、いろ〳〵の物が寄合うて、互に身の上を語り合ひ、

いつか又世に出でんこゝは片絲の
よる晝知らで暮らす身ぞ憂き

などいふやうな述懐でも詠んで居るやらも知れませんが、イヤ又世の中といふものは、そのやうに歎息するものでもないぢや。時節が來ると襤褸葛籠から引出されて、雑巾といふものに生を易へますが、それも又襤褸からいへば死ぬるので、雑巾からいへば生れるのぢや。又その雑巾も遣はれる度々に、老こういうて年が老つて行くこ、後には是もチ切れ〳〵の御病氣で、何の用にも立たぬやうになる。さうすると、こりやモウ仕様がないこ

いうて、塵芥場へ放下して仕舞ふ。それが雑巾の死んだ葬禮ぢや。

扨その雑巾も雑巾からいへば死ぬるのぢやが、塵芥からいへば生れるのぢや。その又塵芥も、農人が取つて田の肥しにしたり、畠の肥しにすると、その塵芥が蒸して腐る精で、米や麥がよく出來るゆゑ、その出來た米や麥は、紛いもない彼の雑巾の生れ易りというやうなものぢや。その又麥米を人が食うて生きて居ると、やつぱり彼の雑巾の御蔭で、活きてもの言うて居るやうなものゆゑ、その人が男女相交はつて子を産むと、その子はやつぱりカノ雑巾の生れがはりこういうても大事ないやうなものぢや。

しかしこりや皆眼前にその形の眼に見えるものゆゑ、その通り生老病死の四苦が眼に見えるが、假令形のないものでも、此の世界へ現はれたものに、此の四苦を遁るるものはない。そりやあの音や香などのやうなものでも考へて御覧じ。カノ鈎鐘の音などでも、始めゴオンと鳴り出した所が音

諸行は無常なり、是れ生滅の法なり。生滅滅し已つて、寂滅を樂となす。

の生れたので、それからオンオンと引いて行くこころが音の年の寄るの、後には音がカアスカニ成つてワアン〳〵といふ所が、モウ音の御病氣で、消えた所が音の死んだのぢや。

その通りに天理の流行は誠に迅いもので、それにつれて此の世界は動き通すのぢやから、それを知らせてやり度いばかりに、佛法ではアノ釣鐘といふものを拵へ、釋迦如來の山で鬼に聞かれたとかいふ四句の文の、『諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅已樂。』といふ事を彫り付け、二六時中にそれを撞いて、それゴオンゴオン、此の通り流れ通しぞよ。消えて往くぞよと敎へて下さる。諸行無常とは、一切此の世界にある程の事、何であらうと一つとして住まるといふことはないものぢやといふことぢや。

成程春かと思やあ夏になる。夏かと思やあ秋になる。夜が明けたかと思やあ日が暮れる。往くかと思やあ戻る。立つかと思やあ坐わる。言ふかと

思やあ默まる。一切住まることはないもので、それが直に天理の流行、生死の道ぢやから、そこで是生滅法というたものぢや。

それを此の凡夫小人といふものは、どうやら生れたといへば、よつほど前の二十年三十年昔のことばかり思うたり、又死ぬるといへば、まだまだ今からよつほど後の此の體のグンニヤリ斃れた時のことぢやことばかり思うて居るから、それで道は即今只今の道といふことがどうしても合點が行かぬ。難儀なものぢや。それについて爰にをかしい噺がある。

或所に大酒飲んでは醉狂する遊郎息子があつた所、親が大きに苦勞に思うて、或日息子へいひますは、「そなたの酒は甚だ惡い癖のある酒ぢや程に、以來屹度相慎み、生涯禁酒致しませい。」と申した所、息子大きに迷惑して、「わたしがあれ程好きな酒を、生涯飲むなといはしやるは、そりやあんまりで御座ります。しかしャア二三年禁酒しませうから、それで堪忍して下

され。」というた所、親父一向聞き入れず、イヤ〳〵そなたの悪性酒、中々二年や三年の禁酒ぐらゐで安心は出來ぬから、どうでも生涯酒は飲むな。」といふゆゑ、息子いよ〳〵歎息して、何か案じて居りましたが、頓て何と思ひ替へたやら、手を突いていひますは、

「いかさま生涯禁酒のこと、屹度得心致しました。しかしながら私もあれ程の好きな酒を、生涯飲まぬことと思へば、どうやら勢が落ちたやうで、力なうも思ひますし、その上最早今日から酒とは生涯の生き別れと申すものなれば、せめての名殘に今日一日は御許しなされて下され。」と申すゆゑ、親父も尤のことと思ひ、そんなら今日一日は赦して飲ますべし。明日よりは屹度生涯禁酒ぞ。」と申し附け、大きな紙へ墨黒に、「生涯禁酒」と書付けてやりました所、息子が見ていひますは、此の通り以來屹度相守り、生涯酒は飲みますまい。しかしその中今日は御赦しのことゆゑ、此の脇へ、「但し今日は赦す。明日より。」と御記し下され。」と申すゆゑ、是も又尤と思うて書いて遣りました所、息子はそれを見附の柱へぺつたりと張付け置き、その日は終日飲みましたが、又翌日も朝から酒を飲みますゆゑ、親父はあきれていひますは、

「豫て生涯禁酒のこと、昨日屹度申し付け、アノ張札まで書いてやつたに、なぜあの通りを守り居らぬ。」と咎めましたれば、彼の息子がいひますは、

「ハイイヤ、あの通りを屹度守つて居ります。」といふゆゑ、親父益々腹を立て、「それでもそこに飲んでは居ないか。」と申したれば、「イヤあの張札にも今日は御免しと御座れば、今日は飲みまする。私、禁酒は明日より生涯で御座る。」というて、その日も飲み、又翌日も「今日は御免ぢや」というては飲みして、生涯禁酒をせなんだと申す話が御座りますが、大方銘々若きの小人が、丁度此の息子と同じことで、

「おれも生涯には親達を安心させる積りぢやが、マア今日は御免ぢや。」というては親に肝を煎らせ、「おれも生涯には主人への奉公を大切にする積りぢやが、マア今日程は御免ぢや。」こいうては奉公を怠り、「おれも生涯にはアノ修行をする積りで居るが、マア此の頃は御免ぢや。」というては遊び、「おれも生涯にはその道を學ぶ積りぢやが、マア今は御免ぢや。」こいうては浮かく、只口でばつかり生涯くというて暮らす人が世間には多いものぢやが、その生涯こは何時のことぞ。やつぱり只今くのことぢやないか。その又只今くが生涯で、只今くに死に居ることを今一つ委しう御話し申さうなら。

人の此の體は、前にもいふ通り、此の天の空氣を假り物ぢやが、それが丁度年賦にして借りて居るやうなものぢや。二十才で死ぬる人は二十年賦を借りたの、三十才で死ぬる人は三十年賦を借りたの、五十才の人は五十

肝を煎る　物事をとりもつこと、世話たやくこと。周旋すること。

年賦　上納金又は借金などを若干に割り、年毎に振り當てゝ拂ふこと。

浦島太郎　丹波國與謝郡に住みきといふ人。常世國に行きて歸る時、美人が手箱を與へて、之を開くことなかれといふ。浦島は日本に歸りて後此の手箱の中を見たくなり、遂に之を開き見たるにより、忽ち白髮となりしといふ。

東方朔　字は曼倩、漢の武帝に仕へ、滑稽諧謔に長じ、談笑の間に諷刺の意を寓せり。此の人三千年生きたといふ。又に九千年とある

年賦、七十歳の人は七十年賦、浦島大郎は八千年賦、東方朔は九千年賦といふやうなもので、少し年賦の配りやうに長いこ短いとの異ひがあるばかり、何れ年賦の借り物ゆゑ、斯うして居る中、時々刻々に借金方へ引取られ、已に今朝も私が此の髮を結びましたに大分髮毛が拔けましたが、アノ髮毛もモウ此方の體へ取返さうこいふことは、どうしても出來ませぬから、あれ程はモウ私が此の體が死んだのに違ひはないのぢや。

それで是も大相にしますれば、葬式でもせにやアならぬやうなものぢやが、そのやうに髮毛が拔けたというては葬式をしたり、齒が拔けたこいうては葬式をしたり、爪をつんだというては葬式をしたりし居ると、後には灸のかさぶたの落ちたのまで葬式をせにやならぬから、それでマア髮毛の拔けた位は、緣先へつまんで出て、口の先でプウといふ位の引導で濟して置きますが、それでも迷ひもせぬかして、遂に髮毛の幽靈か出たの、拔け

は、何によつたのかと思ふ。

此の邊浦島太郎や東方朔まで引いて、年壽の借物なる所以を説いた所は誠に説教に妙を得た大智の態度が見えるのである。

た歯の幽霊が出たのこいふことも聞かぬ。

露の身といふも中々そら言よ

出で入る息に消ゆる命を

その通り時々刻々に、此の體を借錢方へ引き取られて、年賦の算用が濟んで仕舞ふこ、二一天作、算用相濟み申候、目出度かしくこ天道樣の御帳面へ墨を引かれると、旦那寺へ舁いて往て、南無カラタンノウ、ヂヤガランドンあれが算盤投げた音ぢや。アノ樣な音を聞いても、やつぱり凡夫といふものは、餘所にばつかり年賦の算用が濟むやうに思うて、我が身は鐵挺か何ぞの樣に思うて居るから、そこで春はごうせうの、秋はかうせうの、來年はどうするの、明々年はアアするのと、無理無體に虚空をつかんで、肝心な今のこを怠る。何と愚かなものではないか。慈快僧正の歌に、

聞くたびに餘所のあはれこ思ふこそ

南無カラタンノウ

禪宗で葬式の時に置む御經の文句である。

ヂヤガラド

葬式の時の鉦や太鼓を鳴す音の形容を滑稽に書いたのだ。

聞くたびに云々

人が死んだといふことを聞く度によそ事の樣に思ふ人のはかない憐

なき人よりもはかなかりけり

それぢやによつて、御互に今が死ぬる眞最中、かうして居るのは死に居るのぢや。しかし此のやうにいうたら、自然この多勢の中に、かの御幣かつきの死の字嫌ひごもが御座るこ、「エエ忌々しいことを聞くことぢや。おれはモウ死ぬることは大嫌ひ。ヤレ〳〵嫌や、死にともない。」こいはつしやるであらうが、イヤまたその樣に滅多に死ぬるここ嫌はぬがよい。それがやつぱり生れたるので、今が生れる眞最中、かうして居るのが生れ〳〵し居るのぢや。芭蕉の歌に、

悟りこは障子の引手峯の松

燧袋にうぐひすの聲

ソレ芭蕉と生れ、ソレ茶碗と生れ、ソレ歌と生れ、ソレ猫と生れ、ソレ天窓と生れ、ソレ痒ゆいと生れ、時々刻々生れ通し、何と目出度い世界ぢや

れなことをいつたのだ。

御幣かづき物事にえんぎをいふ人のことをいふ。

芭蕉元祿時代の人、俳諧の大家の開祖。正風

悟りとはの歌

普遍には、佛法はとある。佛法は必要で（障子の引手）そのものゝ姿を

ないか。さるによつて大學にも、「苟に日々に新なり、日々に新にして、又日々に新ならん。」とあるが、人は只々今日只今の境界、甚深微妙の味あることを能く知つて、その今々を大切に、「おさんよ。」、「アイ〳〵。」。「長吉よ。」「アイ〳〵。」と勤め守るより外、しやうはないのぢや。

それで彼の釋尊の四句の文にも、「生滅滅已、寂滅爲樂。」こういうて置かれた。サア爰が誠の大切な所ぢや。生といふこともなく、死こいふこともなく、生滅ともに滅して已まへば、其所が誠の寂滅といふ、寂な何ともない所で、我こいふこともなけらねば、他といふこともなく、是といふこともなけらねば、非いといふこともなけらねば、迷ひといふこともなし。苦といふこともなけらねば、樂といふこともなし。得こいふこともなけらねば、損といふこともなし。何にもなしのずぼろぼろ。雨降らば降れ風吹かば吹けと、一休和尙のいはれました誠の安樂の所ゆゑ、その所に止るが人の樂しみの最上、正眞の極樂といふものぢやといふことぢや。

更に趣あらしめ（峰の松）なくてはならぬもの（燧袋）で、又微妙な（鶯の音）ものであるとの意。

甚深微妙どく深くたへなること。

雨降らば降れ

有漏地より無漏地に通ふ。雨降らば降れ風吹かば吹け。とある一休和尙の歌なり。

寂滅といへば、滅多に此の體の死に果つることぢやとばかり心得て居るは、大きな了簡ちがひぢや。誠の寂滅こいふは、儒でいへば孔子の御言葉に、「回やそれ庶からんか、屢々空し。」の、或は「空々如たり。」のと仰せられたやうなもので、大學でいへば「至善。」といふ所、中庸でいへば「中和。」の、「誠。」のといふ所で、微塵毛頭も我といふもののない、私心人欲を離れ切つた所のことぢや。

その又微塵も私心人欲のないといふ所を、遍く聞え易い事でいうて見ると、丁度マア夜八ッ時分ごろの、夢も見ず能く寢入つた時のやうなものぢや。誰でもよく寢入つた時といふものは、我が體があるやら無いやら、寢て居るやら起きて居るやら、若いやら老人やら、活きて居るやら死んで居

回・やそれ庶・からんか屢・
空・空しや・論語先進篇の語。
空々如也・論語子罕篇の語。空々は誠實の貌。
夜八つ時・今の午前二時頃で、眞夜中にあたる。

るやら、貧乏なやら金持やら、樂しむやら苦しむやら、さらりさつぱり何にも忘れて、只グウ〳〵グウ〳〵の鼾ばかり、眞の空々になつて居るが、その時は、側に人が幾人居つて、何程その人を謗つたこいうても、腹を立てるこいふこともないが、その代り何程人が譽めそやしたというても、ソレ見よおれはえらからうがと、鼻を伸ばす心もない。

又そのものがどれほど欲の深いもので、心の賤しいものであらうこ、眼の前へ小判百兩投出して、「是れ入らぬか、是れ〳〵。」というて見せても欲しいとも思はぬが、酒や肴の御馳走を鼻先へ突きつけて、飲んだり食つたりして見せても、喉を鳴らしもせぬ。

又女中なれば、瑇瑁の櫛笄ぢやの、玉の簪ぢやの、どんな結構なものを、鼻先へ突きつけて、「コレ〳〵お梅さん、是は入らぬか。これこれ。」というて見せても、只クウ〳〵クウ〳〵の空々ぢや。何こうまいものぢやないか。

そんなら又一向虚空で何の益にも立たぬものかと思へば、イヤ又さうしたものでもないぢや。癢ゆければ、かゆいと知ると見えて搔きもし、痛ければ痛いこ知ると見えて摩りもする。手を伸ばしたり足を屈めたり、寢返りしたり、『ソレ火事。』の『ソレ盜賊。』のといふ時は、アッといふ間もないに、くるりと起きて駈け出しもする。何と自在なものぢやないが。

人の自然こいふ所が丁度マアさういふやうな所で、微塵毛頭も私の心といふものの無い所のことぢや。しかし是は寢た時で、まだ寢たこいふこがあるだけ、見聞覺知の働きが不自由なが、正眞の至善といふ所に於ては、少しも不自由なことはない。隨分をかしければ笑ひもし、悲しければ泣きもし、嬉しければ嬉しい顏もし、辛らければ辛い顏もしようけれど、その嬉しいや悲しいに別に心があるではないのぢや。

ソレヤあの赤子の時のことでも考へて御覽じ。隨分をかしければ笑ひもし、悲しければ泣きもするが、そのをかしいや悲しいに別に心はない。體は起きてがや〳〵して居ても、心は銘々どもの寢だ時も同じことゆゑ、幾人、人が前へ來て、「アア可愛らしいよ。よい御子樣ぢや。アノ御色の白いことわいの。鼻筋もよく通つて、扨も〳〵御賢げな。」などいうて、どのやうに譽めそやしても、『それ見よ、おれは賢げにあらうが。』と鼻を伸ばす心もないが、その代り顏の醜い兒に向つて、「エエ汚穢い顏付ぢや。アノ色の黑いこと。アノ鼻はひしげて、眼は高低、ごうで此の兒は餘り賢うもあるまい。」などいうて謗つても、更に腹を立てる氣色もない。

既に孔子樣が此の季路の德を御譽めなさるに、「敝れたる褞袍を衣て、狐貉を衣たるものと立つて恥ぢざる者は、それ由か。」と仰せられて、ごのやうな補綴した粗末な衣服着て、よい衣裳をした人の中に出ても、恥かしいとも思はぬものは、此の季路であらうと仰せられたが、誰でも小さい子供の時は、此の季路と同じことで、「おれも此のやうな衣裳をして、アノ衆達の中へ出られぬ。」の、「イヤ持つたもの、着ぬのは、結句人が言はぬのぢやが、おれらが樣な貧乏人が着ぬと、却つて人が馬鹿にする」の、眼下に見る。」のといふやうな蒙茸した根性は、ちつともありやせぬ。何と寂かな樂なものぢやないか、そこが誠の寂滅爲樂ぢや。それに就いて茲にをかしい話がある。

敝れたる褞袍　論語子罕篇の話。褞袍は綿入の服、賤者の衣なり。

これはチト賤しい話なれど、先年私が或る城下の町端で見たことで御座りますが、そのあたりの貧乏人の子と見えて、小さな笊籬へ豆腐の滓を入れて、高く我が頭の上へ差し上げ、鼻歌うたうて戻り居りましたが、始めその母親が、その子を買ひにやる時、「途中で人に見せぬやうにして買うて戻れ。」とども、いうてやつたものと見えますぢや。是が此の江戸などでは

ないことで御座りませうが、田舎ではようあることで御座ります。親は貧乏で子供は多し。今日を食ひ兼ぬるといふやうな下賤なものは、御飯の足に此の豆腐の雪花菜を和交ぜて食うて居るといふやうなものが、幾らもあるこゝで御座りますが、そのやうなものの癖に、その雪花菜を買ふこゝをえらう人に恥づるで御座りますぢや。

それで彼の母親が、「途中で人に見せぬやうにして。」こいうたのも、やつぱりその格なこゝで、その母親の心には、その子が雪花菜を買うて戻るを、自然近所の友達が見たなら、アレモ内が貧乏で、常に豆腐の雪花菜を食うて育つこども思はうか、さうすると、此の後アノ子が友達の中へ出ても、肩がすぼるの、眼下に見られるの、馬鹿にせられるのといふやうな、色々な僻んだ心があつていうたことと見えます所、その子は彼の雪花菜を入れた笊籬を、我が頭の上へ載せ、近所の友達が多勢遊び居ります所へ向ひて

いひますは、「コウ〳〵みんな爰へ來て、おれが爰に持つて居る此の笊籬の中には、何を入れて居るか、いうて見なされといひますぢや。

さうすると其所に居る友達が、どや〳〵こ寄つて來て、一人の子がいひますは、「おれが言ひ當てて見せう。それは大方大豆であらう。」と言ひましたれば、彼の笊籬を持つた子がかぶりをふつて、「イイヤ大豆ぢやない、大豆ぢやない。」といひます。又一人の子が、「おれがいうて見せう、それは小豆ぢや〳〵。」こいひますと、「イイヤ小豆でもない、小豆でもない。」こいひます。又一人の子が「味噌ぢや、味噌ぢや。」といひますこ、「イイヤ味噌でもない、味噌でもない。」といひます。してどうしても雪花菜といふことをみんな得いひ當てませなんだ。

さうしましたらその笊籬を持つた子が言ひますは、「エエみんなよう言うてでないの。これは雪花菜ぢやえの。」といひます。さうするこ大勢の子供

が口を揃へて、「フウ正眞にそれや雪花菜かえ、そんならその笊籬を卸して、その中を見せなされ。」といひましたれば、「イイヤ中を見せるこゝはならぬ」こいふ。「なぜ中を見せなさらぬぞ」といへば、「ソリヤ内のカカさんが、人に見せぬやうにして、持つて戻れこ言はれましたからぢや。」こいひましたが、何こ子供の腹の中こいふものは、誠に人我の隔てのない、綺麗なものぢやな。「親が人に見せな。」こいうたから、正直に見せはせぬが、その「見せな。」の意味合は、子供の腹の中には、こんこ覺えのないことゆゑ、わからぬぢや。

又此の話しを或る所で話しましたら、向ふの仁がいはれますは、「イヤもし子供こいふものは、何所でも如才のないもので御座ります。私が近所にも丁度その樣なこゝが御座りました。」といはるる。「そりやどうしたこゝか。」こ問ひましたれば、是もやつぱり貧乏人の子ぢやげに御座りますが、親がえらう貧乏で、家内の着替もない仕合せゆゑ、正月が來るというても、母親が子供に洗濯してやることもならず。やう〳〵春三月頃の天氣のよい日を母親が見立て、その子へいひますは、「今日はそちが着物を洗濯してやる程に、外へ出ずに内に居れ。」というて、着て居る着物を脱がしましたら、その子は裸でふるひ〳〵、「カカさんおれは寒い。」といふから、「オオそんならマア其所の蒲團なりこ被つて居れ。」といひましたげな。

そこでその子は「アイ」というて其所にあつた蒲團を取つて背中から引つかぶり、首ばかり出して坐つて居る所、門口へ近所の友達が四五人連で來て、「萬吉さん遊ばうエ。」こいふとその子が内から、「イイヤ今日は出られぬわい。」こいふけな。そこで母親は氣を揉んで、エエ此の子は默つて居ればよいのにこ思ふうち、又外から友達が呼ひますと、「イイヤ今日は出られぬから、みんなまあ爰へ來なされ。」こいふけな。

そこで又母親は、エエまあ友達を呼ばねばよいのにと思ふうち、はや友達はぞや〳〵と上つて來て、その子の前へくるりと居並び、何やらがやがやいひ居るうち、やがて此方の子がいひますは、「おれは今日なんで此のやうに蒲團を被つて坐つて居るのぞ。いうて見なされ。」といひますけな。

そこで母親は、モウ氣が堪らぬから、側から「コレ萬よ。」というて白眼んで見せても、その子の心にはその譯が分らぬから、母の顏をヂロ〳〵見ながらやつぱり友達へ、「サア〳〵いうて見なされ。」といふと、友達は口を揃へて、「それは寒いからであらう。」といふ。さうすると、「イヤ寒いからではない。」といふけな。「ソンなら風ども引いてのか。」といふと、「イヤ風も引かぬ〳〵。」といふを、母親が側から取つて、「オオあれもちつと風氣で。」といひまぎらさうとすると、その子が、「エエ嚊さんの、アノ樣な嘘をいうてぢや。おれは何にも風引いたのではないのに。」といふけな。そこで母親はます〳〵氣を揉んで、エエまあ此の子はと思ふ內、又その子がいひますは、「みんな得いうてでないから、おれが此の蒲團の端をチイと明けと見せう。」といふゆゑ、母親もモウ耐へかねて、「エエあの馬鹿ものめ。そんな阿房なことするものぢやない。」と白眼んで見せても、やつぱり分らぬから、蒲團の端をチイと明けては「こりやッ。」といひ、又明けては「こりやッ。」といふゆゑ、皆の子供がその裸で居るを見て、「アリヤ此ん兄は裸で居てぢやの、なぜ此の寒いに裸で居なさる。」と問へば、「サアそれを又いうて見なされ。」といふゆゑ、皆の子供が、「それは何でかおれらは知らぬ。」というたれば、その時に此方の子がいひますは、「そんならおれがいうて聞かさう。今日はおれが着物の洗濯ぢや。」といひましたけなが、實に子供といふものは私のないものぢやないか。

諺にも、「七歳になる子は七郷に憎まれる。」とかいひますが、それでも中々銘々ごもの心に比べて見ると、それは清淨な寂なものぢや。その清淨な何ともない所が、儒でいへば至善といふ所、佛法でいへば正眞の寂滅といふ所で、人の生涯止まりぬかねばならぬ心の位、安養淨土といふものぢや。しがし誰でも幼少い時は、皆その通りなものであつて、體は起きて飛んだり刎ねたりし居つても、心はよく寢入りきつて居つたものぢやが、それが追々年を重ねて、體が大きうなるに從ひ、見るに撼られ聞くに撼られ、何時の間にやら撼り起されて、ツイ此の我といふものを覺え付け、それからハアスウ狼狽へ出したのぢや。

イヤ我ぢやの人ぢやの、損ぢやの得ぢやの、負けたの勝つたの、是ぢやの非いぢやの、悟つたの迷うたの、鬼ぢやの佛ぢやの、地獄ぢやの極樂ぢやのと、あるこあられぬこに狼狽へさわいで、生涯心の休む間こいふものはない。それで一休和尚も、その起きて狼狽へまはるものを、どうぞ熟く寢せつけてやらうこて詠まれた歌に、

南無釋迦ぢや娑婆ぢや地獄ぢや、苦ぢや樂ぢや。どうぢやかうぢやこいうは愚ぢや〳〵。

世の中に寢た程樂はなきものを
知らぬたはけが起きて働らく

そんなら是からお互に、元の赤子に立ちかへり、活きながら死んで暮すがよし。起きて居て、寢て暮す修行をどうぞ致したいここで御座ります。しかしかういうと、皆樣が、何か變つたむつかしいことをいふやうに思ひなさらうも知れませんが、そこが人の正眞の生れつきぢやから、何も六かしいここでは御座りませぬのぢや。

已に皆樣、只今でも此の噺を一心になつて聞いて御座れば、その間は元

安養淨土
佛教の語で、極樂と同じである。源平盛衰記に身體を拋ちても望むべきは、安養淨土の境なりとあゝ。

の赤子の樣になつて、只をかしければゲタ〳〵笑ひ、悲しければ涙も御流しなさるるが、それでも現在その體があるとも思ひはなさるまいし、無いとも思ひはなさるまいし、男ぢやとも女ぢやとも、若いとも、老人とも、活きて御座るとも、死んで御座るとも思ひはなさるまい。

又女中なれば、御銘々容姿がよいとも、悪いとも、脊が高いとも低いとも、御尻が大きいとも小さいとも、何とも角とも思ひはなさらぬ。何と樂なものぢやないか。そんなら誠に能う死んで御座り、能う寢入つて御座るといふものぢや。

それぢやから、今は物の欲しいといふ御心も御座るまいし、又欲うないといふ御心も御座るまいし、立身出世をなされたい御心もあるまいし、なされとむないといふ御心もあるまいし、樂しいとも樂しうないとも、苦しいとも苦しうないとも、何とも角とも思ひはなさらぬ。悟りといふことも

此の々別無佛議論のあたり
は中差の差別の境界に入つた風つて、莊子の讀氣になつて、
論敎無差別の境界にあやうな風つて、莊子の讀氣になつて、
齊物論を子の讀氣になつて、
又がむやすうなを。
がすうなを。
れがすうなを。
にれが誠に微に
に入が誠に微に
亘り細に
合つて天
説一つ理人
ふもの人を
ものだ。
いた
だ。

ないが、迷ひといふこともないが、是いも非いも、佛も衆生も、業も因果も、さらりさつぱり何にもなしの、ずぼろぼうになつて、只をかしければ笑ひ、悲しければ泪を流して、聞くとも思はず聞いて御座るが、そこが誠の明德至善、寂滅爲樂といふものぢや。何とうまいものぢやないか。

ごうぞお互に此のうまい味をとつくりと會得して、生涯の仕事に能く死に切り、能く寢入りたいもので御座ります。しかしどうか覺束ないものぢや。平常何事もない時には、誰でもごうやら能く死んだやうな顏付きして居りますが、誰ぞ脇から此の棺桶へチヨツトでも障るが最後、モウ直に活きかへる。

又女中方でも平生は、どうか菩薩のやうな優しけな顏付して、よく寢入つて御座るやうなが、何ぞ鼻先へ出して見せるか、又誰ぞいふまじいことを言ひどもするさ、ツイむつくり起き上つて、サアあれが濟まぬの、是が

足らぬの、ヤレ〳〵私がやうな不仕合せは御座らぬの、業なことぢやの、因果なことぢやのというて、家内中をヒン〳〵劬ねまはる。誠に氣の毒なものぢやないか。とてもその樣な寢ぼけものや、死損ひの幽靈では、主人に忠義や親に孝行のことは捨て置き、何をしても碌なことの出來やう筈はない。能うマア考へて御覽じませ。それについて爰に有り難い話がある。

昔、或國の武士が一休和尚へ相見していはれまするは、「拙者もこれまで學問いたし、凡そ天地の間のこと、何一つ疑ひもないやうに思ひますが、只一つ合點の參らぬことは、佛法にいはるる地獄極樂の說で御座る。尤も佛說にも、しつかり有るやうに說いた所もあれば、又無いやうにいうた所もあるやうに見えますが、あれは全體どちらを正眞に致したもので御座らう。彌々あるもので御座るか。又無いもので御座るか。」といはれましたれば、一休和尚彼の士の顏をじつとねめ付け、「ナニ地獄があるか極樂があるか、

木附子・五倍子のことをおろに造るもの。

その樣なことを尋ねまはるおのれは全體何物ぞ。」といはれますゆゑ、彼の士はやつきとなつて、「拙者は固より武士で御座るが、地獄極樂の有無を承はらうと申すのが何といたしたぞ。」といはれましたれば、和尚へヘラ笑ひしながら、何、武士ぢや。そなたもやつぱり武士の內か、何、武士なら野武士か山伏か、但し木附子か鰹節か。全體誠の武士ならば、武士道程は知つて居りさうなものぢやが、其方はまだ武士道も知らぬと見える。コレ武士といふものは、その天窓の天邊からその足の爪先までといはうか、命までも主人のもので、其方のものでは元來ないぞよ。さすれば先づ治世の時は、銘々の役義に晝夜心を盡し、主人の用事の缺けざるやう大切に勤め、スハ御大事といふ時は、主人の御馬先に立つて、命を的に敵の中へも駈け入り、敵の首か幾らでも討つて取らねばならぬものぞよ。さういふ大切なる身を持つて居りながら、うか〳〵と爰へ來て、地獄があるかの、極

樂があるかのと、そりや何の譫言ぞ。有れば又どうする了簡ぞ。おのれがやうなものを世間では、鈍武士ともいへば、腰拔武士ともいへば、穀潰しこもいふわいやい。エエここな喰ひ潰し奴が。」こいひさま、扇子を持つて天窓をビシヤリと毆かれさしたれば、彼の士もクワツとせきあげ、

「おのれここな輕々坊主奴。最前からいはして置けば、勝手次第な惡口雜言、たこひ佛體を假りて居るこも、そのままには捨て置けぬ。サア覺悟せよ。」と側にある刀を取つてスラと引き拔きましたれは、一休和尚肝を潰し、

「そりやこそ拔いた。ヤレ逃げよ。」と廣庭へ飛び下りて逃げられるを、後より士は「おのれ逃げるこも逃がさうか。」と、氷の如き拔身を振り上げ、息をせいて追つかけまはれば、一休和尚後を振り向き、その姿を指さして、

「アラ恐ろしや、それが地獄ぢや〳〵。」こいはれましたけな。

そこで彼の士も是はと驚き、持つたる刀をカラリと投げ捨て、「如何樣是が地獄で御座る。さすれば今の御惡口は、これを御知らせ下さらんこの御方便で御座つたか。たつた今まで無かつた地獄が、和尚の假の御惡口を聞くと、忽ち出來ました。さすれば有るとも定らず、又無いとも定らず。それでこそ實に恐ろしいものと申すこと、只今合點が參りました。扨も〳〵ありがたや。」と泪を流し禮拜をせられましたれば、一休和尚もにつこと笑ひ、「オオ速に合點が參りて、此方にも滿足いたす。ヤレ〳〵嬉しや、極樂ぢや。オオそれが極樂ぢや。」といはれたと申すことで御座りますが、何こありがたい示しぢや御座りませぬか。

たとひ此の身に生滅はあるとても、心に生滅はないものゆゑ、今日の心が、佛法でいへば未來永々の心。未來永々の心が、やつぱり今日只今の心なれば、神道の敎や儒道の敎はいふに及ばず。佛法に、餓鬼ぢやの修羅ぢやの、畜生ぢやの、イヤ鬼ぢやの佛ぢやの、過去ぢやの未來ぢやのといふ